

見えざる帝国の一員になったのでバンビちゃんを助けることにした

御米粒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

BLEACHの世界に転生したものの見えざる帝国の一員になってしまったオリ主が原作で悲惨な結末を迎えるバンビエッタを助けるついでにセフレになるお話

目次

バンビちゃんどセフレになりたい	1
バンビちゃんは束縛が激しい	14
バンビちゃんは孕みたい	23
バンビちゃんに黙って浮気	39
バンビちゃんは慰められたい	51
バンビちゃんは浮気されている	68
バンビちゃんは孕んでもやりたい	87
バンビちゃんは孕んでもやりたい	前編
バンビちゃんは孕んでもやりたい	後編
バンビちゃんはストレスが溜まっている	112

バンビちゃんとかセフレになりたい

神様のご好意で俺は『BLEACH』の世界に転生した。

交通事故により17年の生涯を終えた俺だったが、生前に善行を重ねたことが評価されたようで、神様から第二の人生を与えられることとなった。

神様はとてよくしてくれて、好きな作品に転生させてくれるだけでなく、転生先で生き抜けるよう複数の能力を転生特典として与えてくれた。

俺は神様に感謝の言葉を述べ、意気揚々と転生したが、予想外の出来事が発生した。

転生した俺は——『見えざる帝国』の一員になっていたのだ。

『見えざる帝国』は、「陛下」と呼ばれる指導者のユーハバツハが率いる滅却師の集団組織で、千年血戦篇で一護たちと敵対する存在だ。周りを見渡すと白い隊服を着た滅却師が大勢いる。

隣の奴に何の集まりか聞いてみると、これからユーハバツハの演説が始まるとのことだった。

5分ほどの演説を聞き終え解散となったが転生したばかりで右も左もわからない俺は隣の奴についていくことにした。

どうやら先ほどの集まりは新人の歓迎式だったようで、これから配属先を決められるらしい。

配属先を告げられ早速業務開始かと思っただが、今日は帰宅していいとのことだった。

思ったよりホワイトな組織でほっこりした。

こうして俺の第二の人生が始まったのだった。

☆☆☆

転生してから一年が経過した。

俺は目立たぬよう下っ端としてそれなりに真面目に働いていた。

なので当然『星十字騎士団』や『狩猟部隊』には属していない。

「今日も呼び出されなかつたな……」

死神として一護の仲間になる機会を失った俺は新たな目標を立てた。

それは——バンビエツタ・バスターバインを助けることだ。

バンビちゃんの愛称で慕われているバンビエツタは星十字騎士団の一人にして、ユーハバツハから『E』の聖文字シュリフトを授かった滅却師だ。

黒髪ロングの美少女で、性格は勝ち気で好戦的。

また、かわいい見た目とは裏腹に、ストレスを解消するために好みのイケメンをセックスした後には殺すという残忍な一面を持っている。つまりクソビッチである。

バンビエツタは、同じ女性滅却師であるリルトット・ランパード、ミニーニヤ・マカロン、キャンデイス・キャットニップ、ジゼル・ジュエルの4人を率いて「バンビーズ」というチーム名を名乗っていたが、バンビエツタが勝手にリーダーを気取っていただけで、他の4人からは軽んじられており、一人だけハブられている描写も多かった。

そんな可哀そうな子のバンビエツタだが、狛村左陣との戦いで瀕死の重傷を負っていた所に、ジゼルによつて絞殺され、ゾンビに改造されてしまい、ジゼルの玩具になるという悲惨な結末を迎えてしまう。

中身はクソビッチだが、外見は好みだったので、バンビエツタとよろしくやりつつ、ジゼルから助けることにした。

なので彼女からの呼び出しを一年以上待っているんだが、いまだにお誘いが来ない。

「うーん、そこそこイケメンだと思っただけだな」

このままでは、先にキャンデイスに呼ばれるかもしれない。

彼女も好みの外見をしているが、実はマゾっぽいバンビエツタの方が好きだ。

「おーいー」

「ん？」

トイレでフェイスチェックをしていると、同僚が駆け込んできた。

「こんなところにいたのか……。探したぞ！」

「悪い悪い。どうしたんだ？」

「バンビエツタ様がお前をお呼びだ」

「マジで!？」

噂をすれば影とやら。

ようやくバンビちゃんからお呼びがかかったぜ。

「ああ。すぐに部屋に来てよ」

「りょーかい!」

俺は駆け足でバンビエツタの部屋に向かった。

途中でバンビエツタの面々とすれ違い、すぐに俺が呼び出された理由がわかった。

バンビエツタの誰かになにか言われて、イライラしたのだろう。

そのストレス解消をするために俺が生贄になったのだ。

「失礼しまーす!」

彼女から「入っついていいわよ」と返事を聞き、慎重にドアを開ける。すると明らかに不機嫌な表情のバンビエツタが俺を見据えていた。

「遅いわよ」

「すみません!」

これでも駆け足で来たのだが言い訳はしない。

彼女をより不機嫌にさせて、エツチする前に殺されるのは勘弁。

まあ、俺が死ぬことはないんだけど。

「なんで呼ばれたかわかる?」

「はい。ストレス解消のためにセックスがしたいんですよ?」

「はつきり言うんじゃないわよ……」

「すみません!」

「もういいわ。あんた経験は?」

「ありますよ」

嘘ですありません。

せいぜい兄貴のエロゲをプレイしたり、エロ同人を読み漁ったくらいです。

「ならさっさとするわよ。ついてきて」

「はー!」

言われるがまま付いていくと、寝室に案内された。

部屋そのものはシンプルで、ベッドとクローゼットしかなかった。
「座っていいわよ」

「お、お邪魔します……」

靴を脱いで部屋の中央にどんと置かれた巨大ベッドの上で向き合う。

「さっそくするわよ」

「んっ!？」

いきなりキスをされた。

「んっ、んんむ、んんっ」

バンビエツタは俺の背中に腕を回し、唇を繰り返し重ねていく。

「どう?・気持ちいい?」

「そうですね」

回答すると、バンビエツタがまた唇を重ねてきた。

甘くて、とろりととろけそうな柔らかい唇が押しつけられ、わずかに差し出された舌が俺の唇を舐めてくる。

キスってこんな甘くて気持ちいいものだったのか……。

「ん、ふぁ……もうスイッチ入っちゃったかも♡」

バンビエツタは唇を離すと、ベッドの上にくろんと横になった。

「ごっから先はあんたがリードしなさい。経験者なんでしょ?」

ベッドに横になったバンビエツタは、隊服の上が少しめくれておへそが見えて、スカートの裾も乱れ、ほっそりとした太ももがあらわになっている。

俺は、思わずごくりと唾を飲み込んでしまう。

「早くしてよ」

待ちきれないのか、バンビエツタは隊服の前ボタンをぷちぷりと外して、前をだけさせた。

わずかに開いた隊服の隙間から、赤色のブラジャーが覗いている。

大きく盛り上がった二つのふくらみ。

こんなものを見たら触らずにはいられない。

「んっ……んむっ……あっ……」

俺はバンビエツタにキスをしながら、ブラ越しに胸をふわっと触れ

て揉み始める。

「……あんた、光榮に思いなさいよ。あたしとエッチできるんだから」
「もちろん思ってますよ」

「ひゃっ!? んっ、んあっ!」

円を描くように胸を揉むと、バンビエツタはビクンと身体を震わせた。

「けっこう胸大きいですね」

「んくっ、あたし、着やせするタイプだから……はあんっ!」

初めて生で聞く美少女の嬌声に、俺の興奮は増していく。

「あんっ、ちよつと……脱がすな……!」

俺はバンビエツタのブラを上にならずらし、その乳房をあらわにする。形がよくて大きなおっぱいが、ぷるんと揺れながら俺の目の前に現れた。

乳首はピンク色で、中身とは反対に綺麗だった。

「んっ、あっ……いきなり吸って……!」

俺はこらえきれず、すぐにその乳首にむしゃぶりついた。

舌先で乳首をぺろぺろ嘗めまわし、ちゅうちゅうと音を立てて吸い上げる。

「あっ、あんっ……赤ちゃんじゃないんだから、もつと優しく吸いなさいよ……!」

「……すみません」

「まあ、いいけど……ふあっ!」

バンビエツタはおっぱいに夢中の俺の頭を抱え、身体をよじっている。

俺は無我夢中で乳首を吸ったり、舐めたり、噛んだりを繰り返した。

「ちよ、ちよつと待ちなさい……。下着脱ぐから……!」

「……あ、はい」

いつの間にか顔を蕩けさせていたバンビエツタの一声で中断させられる。

「隊服も脱がなくていいんですか?」

「この後に星十字騎士団の集まりがあるのよ。だから汚さないでちよ

うだい」

おいおい。精鋭部隊の集まりの前にセックスしてるのかよ。

「善処します」

「汚したら殺すわよ」

「……了解しました」

汚さなくても殺すつもりだろうに。

バンビエツタが下着を脱いだのを確認し、乱れていたスカートをめくり上げ、性器に指先で触れてみる。

「んあっ♡」

バンビエツタのおまんこは、びっくりするくらい濡れていた。

「めっちゃ濡れてますね」

「……うるさい！ あれだけ責められたら濡れるに決まってるでしょ！」

「そうなんですか？」

「そうよ！ だからあんたが悪いのよ！」

「えー……」

逆切れされてしまった。

「いいから続けて。……あたしをもっと気持ちよくさせなさいよ」

「わかりました」

恐る恐る熟したおまんこに人差し指を入れてみる。

「んふうっ」

第一関節まで入れると、膣内に溜まっていた愛液が溢れてきた。

「すげえっ！」

「あっ、あんっ♡ ひいあっ♡ うあっ♡」

膣内を掻き回すたびに、バンビエツタは淫らな声を上げ、愛液がシーツに垂らし続ける。

しばらく指で責めていると、クンニするよう指示を受けた。

俺はバンビエツタの両足を広げ、トロトロになってるあそこに口を思いつきり押し付けて舌で責め始めた。

「あっ、これっ♡ いいっ♡ あああんっ♡」

どうにかこの女を本番前に絶頂させたい。

そう思った俺は最初から全力でバンビエツタのあそこを舐めまくる。

「あひっ♡ んんっ、あふあっ♡」

クンニされるのが好きなのか、バンビエツタの喘ぎが大きくなっていく。

俺は卑猥な音を立てながら、長い舌を膣に入れたり、愛液を吸ったり、クリトリスを舐めたりして激しく責め立てた。

「はあんっ♡ んっ、んんっ♡ ああっ♡」

頭を振り、俺の頭を両手で押しつけながらバンビエツタが絶頂に抗っている。

「ああんっ♡ あっ、あっ、あんっ♡ だめえっ♡ んあああっ♡」

俺は止めを刺すべく、勃起したクリトリスを強く吸った。

「い、いくっ♡ いっちゃ……ああああんっ♡」

刹那。バンビエツタのあそこから透明な液体が噴射された。

隊服を汚さないため我慢したのか、少量ではあったがクンニしていた俺の顔面にかかってしまった。

「んはあ……あっ……んう……」

「気持ちよかったですか？」

「……見ればわかるでしょ」

俺のドヤ顔が気に食わなかったのか、バンビエツタがジト目で睨む。

「少し休みます？」

「馬鹿にしないで。これくらいで休憩なんて必要ないわよ」

息を切らしながらバンビエツタは、うつ伏せになり、枕に顔を埋めるようにする。

「後ろからするんですか？」

「悪い？」

「いえ！」

てつきり騎乗位で責められると思っていた。

バックが好きということは、バンビエツタは本当にマゾ体質なのかもしれない。

「早く入れっ……ひいつ!？」

ズボンとパンツを脱いでると、バンビエツタが悲鳴をあげる。

「な、何よ! 何なのよ! その大きさはっ!」

「え……?」

振り向いたバンビエツタは俺の逸物を見て驚愕した。

そんなに俺の息子は大きいのだろうか。

確かに修学旅行の風呂場で同級生たちに驚かれたが、クソビッチなバンビエツタなら黒人並みの逸物を経験していると思っただけが……。

「そんな大きいですか?」

「……問題ないわ。早く入れなさいよ!」

バンビエツタの顔に恐怖の色が若干浮かび上がる。

だが彼女の性格からして素直に怖いとは言えないだろう。

なので俺は遠慮なく入れさせていただくことにした。

「入れますね」

俺はバンビエツタの可愛いお尻を掴み、ゆつくりと逸物を挿入させていく。

「あがつ! お、大きいっ……!」

「大丈夫ですか?」

「あ、当たり前じゃない! さっさと全部入れなさいよ!」

「わかりました」

バンビエツタは経験豊富なのであそこが緩くなっていると思ったが、そんなことはなく、俺の逸物をギュツと締め付けてくる。

「ああつ、んっ……奥までできたあつ……!」

ずぶずぶと一番奥まで入れて、腰の動きを止める。

「動かしますよ」

「……いいわよ」

バンビエツタは枕をギュツと抱きしめ、後ろをちらりと見てから返事をした。

「んっ、ああつ、あああああつ! んくう……うあつ!」

俺はバンビエツタの尻を掴みながら腰を振る。

バンビエツタは可愛い声を上げながら、膣内でしっかりと絞めつけてくる。

「あんっ♡ んあっ♡ あひいいんっ♡」

何度も突かれて、ぎしぎしと軋むベッドの上で腰を少し浮かして、俺にお尻を押しつけてくるバンビエツタ。

「はひっ、んぐあっ♡ 膣内が抉れて……んおおっ♡」

「やばい、止まらない!」

「やんっ、あっ、ああんっ♡ ちよっ、激しくずぼずぼしたらっ……♡」

俺は高まった興奮を抑えきれず、夢中になって腰を振り続ける。

バンビエツタの膣内も締め付けが強くなり、精液を搾り出そうとする。

「ああああっ♡ あひいつ♡ 壊れるっ♡ 壊されちやうっ♡」

容赦なくピストンをされるバンビエツタが時折振り向いてくる。

その顔は、白目を剥き、だらしなく開いた口から舌が垂れており、とても他人に見せられるような顔ではなかった。

「あひやあんっ♡ あああああっ♡ イクウウ! オマンコイクうう♡」

「俺もいきそうですっ!」

バンビエツタの膣内の気持ちよさ、下品なアへ顔のおかげで、射精感が一気に高まってしまった。

「もう限界っ♡ イグっ♡ イグウウウッ♡」

「出しますよ!」

欲望を吐き出すべく、俺はとどめにひときわ強く腰を打ちつけた。

「あひやああああああああっ♡」

バンビエツタは絶頂に達し、甲高い声を響かせた。

同時に俺も絶頂を迎え、膣穴に挿入している肉棒から怒涛の勢いで精液を放出した。

「あああんっ、凄いつ♡ 大量に中出しされてるうっ♡」

「うわ、全然おさまらない!」

「いいからっ♡ 全部あたしの膣内に出しなさいっ♡」

「わかりました!」

生まれて初めてのセックスに喜んでいたのか、射精は何度も続き、出し終えた頃には結合部から精液が溢れていた。

「あはああ……あああん……すごすぎい……♡」
バンビエツタが嬉しそうな表情で溜息をつく。

肉棒をゆつくり抜くと、ごぼおと汚い音を出しながら精液が大量にシートに零れだした。

「あはっ、すごっ♡ あんた、どんだけ出してんのよ」
「すみません」

「謝らなくていいわよ。それよりティッシュ取って」
「はい」

隊服は汚してないが、あれだけ中出ししたらシャワーを浴びたほうがいいと思うのだが、時間がないのだろう。

バンビエツタは丁寧にあそこをティッシュで拭きとり、ブラや上着の乱れを直していく。

「ふう、スッキリした」

これで彼女のストレスは解消された。

なので俺はもう用済みだ。

「思ったより気持ちよかったわ」

「俺もです」

「そう。それじゃ——サヨナラ」

刹那。俺の上半身と下半身が真つ二つに分かれた。

性欲を満たしてストレスが解消されたバンビエツタに俺は必要なくなったのだ。

「あ、やばっ。いつもの癖で殺しちゃった」

無惨な肉塊となった俺を見下ろしながらバンビエツタが言う。

「セフレにしようと思ったのに……。やっちゃったじゃない……」
「どうやら俺の身体を気に入ってくれてたようだ。」

「またキャンデイスに怒られるかも」

「そうですね。あの人も部下をつまむの好きですからね」

「そうなのよ——え？」

キャンデイスとも可能なら一度くらいやっておきたい。

「どうしたんです?」

「な、なんで……」

「はい?」

「なんで生きてるのよおおおおお!?」

バンビエッタの絶叫が部屋に鳴り響く。

「なんでって俺が不死身だからですよ」

「はあっ!」

「よいしょ。上半身と下半身を同時に動かすの大変なんですよ」

身体を接続するべく分断した二つの肉体を動かす。

なんとか身体をくつつけると、一瞬で二つから一つの肉体に戻った。

「よし。これでオツケー……じゃない。隊服を新しく貰わないと」

身体は元に戻ったが、隊服までは戻せなかった。

「あ、あんた……何者なの?」

「ただの滅却師ですけど」

「ただの滅却師が不死身なわけないでしょ!」

俺の回答に納得がいかないバンビエッタが声を荒げる。

「もしかしてあんたも、陛下から聖文字シュリフトを与えられているの……?」

「いえ。俺はただの下っ端ですよ」

「で、でもっ……!」

徐々にバンビエッタが怯えていくのがわかる。

このままだと俺の性癖が歪みそうなので、俺の能力について実践を交えて説明することにした。

「……そう。あんたの能力はわかったけど、陛下は知っているわけ?」

「知らないと思いますよ。知ってたら下っ端になんかしらないでしょ」

「そうよね。……なんで力を隠してるわけ?」

「目立ちたくないから」

「はあっ!」

「俺は平和に暮らしたいんです。仕事をそれなりにこなしつつ、バンビエッタ様とセックスしたり」

「あ、あたしとって……。それよりそんな強かったら敵なんていない

じゃない」

「そうですね」

「……もしかして陛下にも勝てたりするわけ？」

「恐らく」

俺の回答にバンビエッタが絶句する。

「ただ陛下と戦うつもりはないので、このことは二人だけの秘密にしてくれると助かります」

「もしあたしがほかの人に喋ったら？」

「そうですね。……少しだけ痛い目見てもらうかもしれないです」

「っ……」

「試しに今やってみます？」

「や、やだ……やめてよ……」

怯えるバンビちゃんかわええ。

「冗談ですよ。バンビエッタ様には酷いことはしませんから」

「……信用していいわけ？」

「はい。俺はバンビエッタ様とセックスができればいいので」

「わかった。このことは誰にも言わないであげる」

「ありがとうございますー！」

こうして俺はバンビエッタとセフレになることができた。

死神たちとの戦いまでは、バンビエッタとのセックスライフを楽しもう。

「それじゃさっそく二回戦目やりませんか？」

「無理よ」

「なんで!？」

「この後に集まりがあるって言ったでしょ」

「あ、そうだった……」

「どれだけ元気なのよあんたは……」

セックスのすばらしさを知ったばかりなので仕方ないじゃないか。

「帰ったらしてあげるから部屋で大人しく待ってて」

「……いいんですか？」

「いいわよ。……あたしも気持ちよかったし」

獣になった俺は一晩中バンビエッタを食った。

彼女がいくら悲鳴を上げても、懇願しても、俺は欲望を吐き続けた。

翌朝。バンビエッタ一人じゃ俺の性欲を受け止められないので、キャンデイスを紹介するようお願いしたら却下された。

どうやらバンビちゃんは独占欲も強かったようだ。

バンビちゃんは束縛が激しい

バンビエツタとセフレになってから数ヶ月が経過した。

いまだに虚^{ウエコムンド}圈を占領したり、尸^{ソウルソサエティ}魂界に攻め込んだりしていない。つまり平和である。

俺は誰でもできるような簡単な仕事をこなしつつ、バンビエツタとのセックスライフを謳歌してる。

「ふああ……もうこんなには、硬くなってる……♡」

場所はバンビエツタの個室。

昼休みに呼び出された俺はバンビエツタにパイズリをされていた。

「熱くて大きい……れろっ、ぢゆるっ♡」

バンビエツタは椅子に座る俺の前に跪き、衣服をはだけさせて、豊かな乳房で勃起した肉棒を愛おしそうに挟み込み、舌を這わせた。

「ああ、チンポ♡ 今日もたくましいチンポしてるじゃない♡」

俺たちは都合が合えば、時間帯を問わずに淫らな行為を行っている。

「竿は胸でしごいて、亀頭はたっぷり舐め回してあげる……んちゅっ、れろお♡」

「うっ……!」

竿部分は乳房の温かい柔らかさに包まれて、上下に優しく揉みしごかれ、快感が肉棒から腰へと熱を持たせていく。

亀頭は唾液を乗せた舌に表面を舐め回されており、尿道口から快感が駆け抜けている。

「あいかわらず上手ですね」

「んじゅっ、ぢゅぷっ♡ 当たり前じゃない♡ んぷっ、れりゅっ♡

あたしを誰だと思ってるのよ♡」

クソビッチで実はビビりなバンビエツタ様です。

「もっど気持ちよくしてあげるんだから♡ んっ、ちゅっ、ちゆるっ♡」

バンビエツタは認めないだろうけど、尽くすことへの悦びに浸っている。

肉棒を乳房にさらに深く挟み込み、左右から力を加えて圧迫感を高めてきた。

亀頭もただ舐めるだけでなく、裏筋やエラにも舌を滑りこませて、敏感な部分を執拗に責めてくる。

「じゅるるっ、れろおっ、ぺろっ♡ んちゅっ、ぢゅるるっ……んふっ、美味しい♡」

妖しく微笑みながらバンビエッタは乳房を揺する上下幅を大きくさせて、竿をより丹念に揉み込み始めた。

「そんなに美味しいですか？」

「美味しいわよお♡ れろべろっ♡ ちゅっ、ぢゅぷぷっ♡」

目を蕩けさせ、より熱心に肉棒に奉仕し、精液を搾取しようとする。

「すぐく気持ちよくしてくれてるので、お礼にこれをプレゼントしてあげますね」

「……なにこよっ？」

俺はニヤリと笑みを向けながら、食後に飲む予定だった液状のヨーグルトを乳房の谷間に向けて垂らしていく。

「んひゃっ、ちよつと！ なにするのよ!？」

「これ使えばパイズリしやすくなると思って」

「もう……冷たいじゃない」

「いいから続けてくださいよ」

「わかってるわよ。……ちゅるっ、べろっ、れろお♡」

「どうです？」

「色とヌルヌルした感じ……精液みたいで、気持ちいいかも……♡」

「それはよかった」

「それにチンポの生臭い味がヨーグルトの甘味で引き立って美味しいかも♡ んちゅっ、れぢゅるるっ♡」

バンビエッタはヨーグルトを舌尖ですくい、れろれろと亀頭を舐り回した後、二つの味を堪能していく。

その様子は卑猥極まりなく、白い粘液まみれになった乳房や肉棒と合わせて、見ているだけで高揚してしまう。

「れぢゅっ、じゅるるっ♡ んんっ、んはあ、美味しい♡」

「そんなに美味しいんですか？」

「美味しいわよお♡ れろお♡ いくらでもいけちやうかも♡」

ヨーグルトが肉棒と乳房に擦れてグチュグチュ下品な音が鳴り続ける。

「んぢゅっ、ちゅぷっ♡ んふう、美味しいっ♡ れろっ、じゆるるっ♡」

ヨーグルトと引き立った肉棒の味わいに、バンビエツタの舌もますますよく動くようになり、敏感な部分を熱心に舐め回す。

「だんだん先っぽからしよっぱい味が出てきたわね♡ もっとチンポ絞って、濃いの出させてあげる♡ んぶっ、れぢゅっ♡」

俺の興奮を感じ、白く汚れた乳房を必死で上下させ、にちやにちやと卑猥な音を何度も鳴らして、絶え間なく肉棒をしごきにかかる。

「ほら、早く出しなさいよ♡ あたし専用のザーメンを♡」
「もうすぐ出ますよ」

「んっ、ぷああっ♡ チンポ、ビクビクしてきたわね♡」

快感で跳ねる肉棒を押さえるため、バンビエツタは乳房を両腕で寄せ、乳圧をあげてしごき立ててきた。

それにより圧搾感が強まり、射精感が徐々に高まっていく。

「んひゃっ、やんっ♡ チンポ跳ねすぎよお♡ オツパイにチンポが食い込んで、気持ちいいっ♡」

自分も絶頂したいのか、バンビエツタがヨーグルトのぬめりを最大限利用し、摩擦を高めながら激しく乳房を振るう。

「んあっ、気持ちいいっ♡ あひっ、ああんっ♡ チンポ食い込んでっ、跳ねてっ、抉られてっ♡ ひいつ、あひいつ♡」

「フェラもしっかりしてくださいよ」

「わかってるわよお♡ れろっ、ちゅぷっ♡ べろっ、ぴちゅっ♡
ザーメン早くう♡」

俺に促され、細めた舌先で鈴口をほじるように動かし、精液を求め

る。
「くっ、射精る……！」

「ああんっ、んぶう、出してえっ♡ 口の中にたっぴり出しなさいよお

♡」

いよいよ解放の瞬間を迎えた。

「んぷあああああああ♡」

肉棒の先端から、いやらしく待ち構える口内へ勢いよく精液が撃ちだされ、バンビエツタは精飲の悦びに、蕩けきった嬌声をあげた。

「はぷっ、んぷうっ♡ ぢゆるるっ、んぐうっ♡」

「まだ出ますよ」

次々にバンビエツタに目がけて精液が噴射される。

「んぱっ、はっぷっ♡ んぢゅっ、ぐくっ、んぼおっ♡」

「美味しそうに飲んでくれますね」

「だって美味しいものっ♡ んぶっ、ぷはあっ♡」

「協力してあげますよ」

顔面にかかった精液を集めて口内に移動させる。

バンビエツタは蠱惑的な笑みを浮かべたまま、美味しそうに飲み続ける。

「ぷはあっ……ふう、はあ……美味しかったわあ♡」

バンビエツタはだらしなく蕩けたその顔で荒い呼吸を繰り返す。

「ねえ、次は下の口に出しなさいよ♡」

開脚して、いつの間にか染みだらけになった下着を見せつけてくる。

「すみません。もう昼休みが終わるんで行きます」

「はあっ!？」

時計を確認すると12時55分を過ぎており、午後の業務開始まで5分を切っていた。

「ちよっと! あんただけ気持ちよくなってずるいじゃない!」

「バンビエツタ様も気持ちよくなってたでしょ?」

「そうだけど……あそこが疼いてしょうがないのよ!」

「我慢してくださいよ。仕事上がったらすぐに来ますから」

「無理っ! あんた、仕事サボりなさい!」

バンビエツタは性欲が理性に負けて、時たま無茶な命令をしてくる。

「上司に怒られますよ！ それにバンビエツタ様も仕事あるでしょ？」

「あたしは午後から休みよ。だからあんたがサボれば問題ないのよ」
「問題ありますから！」

「いいからあたしの言うことを聞きなさいよ！」

なんて我儘でしつこい女だ。

こうなったら脅すしかない。

「あんま我儘言うようだと、またアレをお見舞いしますよ？」

「ひいつ……!?!」

刹那。バンビエツタの顔が恐怖一色に染まり、全身がガクガクと震えだした。

「や、やだ……やめてよ……」

「どうしようかな〜」

「お、お願いっ！ もう我儘言わないから……。アレされたら、あたし壊れちゃうわよお……」

しまいには涙目になり、懇願し始めた。

アレの効果は抜群だ。

「なら大人しく待っていてくれますか？」

俺の問いに、可哀そうなくらい必死に首を縦に振るバンビエツタ。

「それじゃ俺は仕事戻りますね」

「……わかったわよ」

俺は恐怖で怯えるバンビエツタを置いて、職場に戻っていった。

☆☆☆

俺が見えざる帝国で暮らしていくうえで気をつけていることがいくつもある。

それはユーハバッハやバンビエツタ以外の星十字騎士団シュテルンリッターとなるべく接触しないことだ。

バンビエツタもそうだが、基本的に頭がいかれている奴ばかりだ。俺のような下っ端が気まぐれで殺されたりすることもある。なので

セックス以外であいつらとはなるべく関わりたくないのだ。

「しかしバンビエツタがあそこまで束縛が激しいとは」

バンビエツタにキャンデイスを紹介するようお願いしたら、ものすごい形相で断られたことがある。

時間をおいて改めてお願いしたが、再度断られてしまった。

セフレだけと完全に彼氏と同じ扱いをされている。

「溜息なんてついてどうしたんだ？」

休憩から戻ってきた同僚が声をかけてきた。

「いや、仕事がだるいと思って」

「毎日同じこと言ってるな」

「お前もそう思わないか？」

「確かにそうだが」

「女の子少ないし」

「お前、バンビエツタ様に聞かれたら怒られるぞ？」

「今日は午後休だから大丈夫だよ」

「休みまで把握しているのか。さすがセフレだな」

俺がバンビエツタと関係をもっていることは、隊員のほとんどが知っている。だからこうしてからかわれたりすることもしよつちゆうだ。ただ、バンビーズ以外の星十字騎士団シュテルンリッターの奴らは興味がないように、すれ違っても声をかけられることはない。

「そういう俺もやったぞ」

「キャンデイス様と？」

「正解。よくわかったな」

「部下に手を出す人は限られてるからな」

「確かに。これで俺もイケメンの仲間入りだな」

キャンデイスの趣味はイケメンの部下をつまみ食いすることだ。バンビエツタと違うのは事後に殺さないこと。だから下っ端にはバンビエツタよりキャンデイスの方が人気がある。

「気持ちよかった？」

「ああ。おっぱいも大きかったぞ」

「見ればわかるよ。いつも谷間全開の隊服着てるじゃん」

「そりやそうだ」

そうなると俺がキャンデイスとセックスしたら、こいつと穴兄妹になるのか……。それは嫌だな。

「だからさ、記念に今日飯いかないか？」

「なんの記念だよ？」

「俺のイケメン認定記念！」

「祝ってやりたい気持ちは一切ないけど、バンビエツタ様と会う予定だから無理だ」

「またかよ……。お前ら週に何回やってんだよ？」

「五回くらいじゃないか」

「やりすぎだろ」

「俺に言わないでくれ」

ちなみにやる場所はバンビエツタの部屋と決まっている。俺のような下っ端隊員の部屋は狭くて壁も薄い。もし俺の部屋でやれば隣の部屋の住人に聞かれるのは間違いない。

「性欲と強さって比例してんのかな？」

「比例したら俺もお前も星十字騎士団シュテルンリッターの一員になってるよ」

「確かに。あー、ミニーニヤ様ともやりてえな……」

「それは同意。多分あの人が一番胸が大きいだろ」

「だよな。ほかの二人はどうよ？」

「ガキと男には興味ねえわ」

「だよな。……こんな話聞かれたら俺たち殺されるな」

「だな。そろそろ仕事再開しようぜ」

「おう」

☆☆☆

「あんっ♡ んあっ♡ あふあっ♡」

仕事を上がってから三時間後。

バンビエツタは俺に跨り、淫らに腰を上下させ、快楽を貪るように腰を振っていた。

「おっぱい揺れすぎでしょ」

部屋に入っつてすぐバンビエツタに押し倒され、休憩もなしにずっとセックスをしている。

「あああん♡ あんたも動きなさいよ、はあんっ♡」

「わかりましたよ」

バンビエツタのくびれた腰を掴み、下から勢いよく突き上げる。

「あひいいいいっ!?!」

「これでいいですか?」

「いいっ♡ もつと強くしてえっ♡」

「本当我儘だな」

下から快楽を与えるたびに、バンビエツタは淫らに声を上げる。

淫らなのは声だけではない。

端正な顔は見るも無残なアへ顔になっており、シュテルンリッター星十字騎士団の威厳は完全になくなっていった。

「んひゃっ♡ んおおっ♡ おほおおっ♡」

「バンビエツタ様、下品すぎますよ」

「う、うるひゃいっ♡ こんな気持ちよくされたら、こうなっひゃうわよおっ♡」

「だったらもつと下品にしてあげますよ」

両手を腰からぐるんぐるん揺れている乳房に移動させる。

愛撫とは程遠い手つきで、力強く鷲掴みすると、バンビエツタの身体がビクンと反応した。

「あひゃっ♡ おっぱいっ、握り潰されりゅっ♡」

「ほら気持ちいいでしょ?」

「気持ちいいっ♡ ひいあっ、んひいっ♡ これやばいっ♡」

体位を騎乗位に変えてから主導権を握っていたバンビエツタだが、自分で動かすのも忘れて、快楽を与えられるだけの雌になっている。

「あ、俺もそろそろやばいっ!」

「いいわよ、出しなさいよっ♡ んふああっ♡ あたしの子宮にたんまりと精液出しなさいっ♡」

「わかりました!」

「あああつ♡ もうだめえ♡ イク♡ もうイツひやうつ♡」
抽送を一気に早くしてラストスパートをかける。

「んはああつ♡ イクっ♡ イクイクイクッ♡」

「射精だしますよっ!」

「あひやあああああああつ♡」

精液を放出すると同時に、バンビエツタが大きな嬌声を響かせた。

「あはあつ♡ きたあ♡ 子宮にザーメンきたあああつ♡」

「ちゃんと受け取ってくださいよ」

「当たり前じゃないっ♡ あんたも出し尽くしなさいよ♡」

やがて射精を終えると、バンビエツタが息を切らしながら覆いかぶさってきた。

「もう限界ですか?」

「う、うるさいわね……少しだけ休憩よ。はあはあ……」

「なら晩飯食べたいんで、どいてくれませんか?」

「……だめよ。あたしと繋がってなさい」

結局、俺が夕食にありつけたのは、それから二時間後のことだった。
お昼からお預けをくらっていたバンビエツタの性欲はすさまじく、
風呂場に移動してからも求められてしまった。

バンビちゃんは孕みたい

真夜中。俺はバンビエツタを連れて、俺たち以外誰もいない職場に足を運んでいた。

「あんたの職場に連れてって」

事後に二人で浴槽でイチヤイチャしてたら、バンビエツタが急にそんなことを言ってきた。

理由を聞くと、自室でのエツチに飽きたようで、普段俺が働いている場所で抱かれなくなったとのことだった。

そんなわけで、夜勤でもないのに俺は日中過ごしている場所に来ているわけだ。

「んあつ、はあ、はあ、くうっ……んう……」

デスクに上げさせると、バンビエツタは自ら隊服のボタンとブラを外し胸を露出させた。

「足も広げてくださいね」

「わ、わかってるわよ……」

少しだけ恥ずかしながらも、言われたままにゆっくりと足を広げていく。

スカートから覗き見えるショーツには、発情していることを示すように、染みができていた。

染みができた部分が盛り上がり、小さな機械音が聞こえてくる。

これは先ほど69をした際に、どちらが先に絶頂するかの対決で俺が勝ち、罰ゲームでクリトリスにローターをつけてもらっていたのだ。

「くひゅっ……んあつ、はあんっ♡」

後ろに手をつき腕を震わせたまま、ローターの振動に喘ぐバンビエツタ。

「すごい感じますね」

「んひっ、ひいんっ♡ だって、これ、ずっと震えっぱなしで……はふうっ♡」

クリトリスから与えられる快感が全身を侵食し、バンビエツタの理

性を蕩けさせていく。

移動中もずっとローターはクリトリスを刺激し続けていた。

職場で大腿を広げ、ローターで感じて作った染みを見られる恥ずかしさも、快樂には抗えないようで、腰を突き出したバンビエツタが、俺を誘うようにくねくねと下腹部をくねらせる。

「ふうっ、ああ、んっ♡ そんなに……見られると……ひやうっ♡」

視姦される興奮に、乳首が勃起していく。

「バンビエツタ様、エロすぎでしょ」

「そ、そんなの知ってる……それより早くチンポがつ、欲しい!」

俺を興奮させたのか、バンビエツタが卑猥な言葉を口にする。

「俺も挿入したくなってきたけどもう少し我慢してくださいね。まずは……」

「ひやあっ!!? そ、そんなものいつ手に入れたのよっ!!? ああ、ふあ、あひいっ♡」

俺が手にしたアナルパールを見て、バンビエツタが息を飲む。

「言ってませんでしたっけ? ローターと一緒に作ったんですよ」

俺は能力を使って複数のアダルトグッズを作っていた。

見えざる帝国に大人の玩具専門店がなかったので、自分で作ることにしたのだ。

「これでいっぱい気持ちよくしてあげますからね」

「くひゅっ!!? ふっ、ひいっ、んっ……はふうううんっ♡」

下着を脱がせて、ヒクつくピンク色の肉筋から溢れでる愛液をアナルパールに塗りたくる。

「ひいっ!!? はひっ、んにいっ♡ ふう、ひっ、あひいんっ♡」

窄んだアナルへと、先端を押し込んでいく。

肛門をグリグリと圧迫される刺激に、バンビエツタが堪らず嬌声を上げる。

「力抜いて。奥まで入れたいでしょ?」

少しずつ手に力を込めると、先端が埋め込まれていく。

「ふうっ、ひうっ、はあっ、くうっ……んひっ、んひいんっ♡」

ブルブルと太ももを震わせながら、愛液を溢れださせ、尻穴を穿ら

れていく刺激に耐えるバンビエツタ。

「全部入れますよ!」

バンビエツタにそう告げると、残りを一気に押し込むことにする。
「くふううふうう!? はっ、かはっ! んっ、んん——っ!」

連なった珠が腸肉を擦りながら、すべて中へと埋め込まれる。

尻穴を貫かれる衝撃に、堪らず声を放ちそうになったバンビエツタだが、ここが職場だということを思い出すと、飛び出しそうになった声を抑えきった。

「くうっ、ふうっ、ふひっ、ひいっ……んっ、んっ! んふううっ!」
唇を噛んで声を押し殺す分、形よい鼻穴から荒々しい息が溢れ出てくる。

ハリのある乳房が息づくたびに上下に動き、勃起した乳首をプルプルと震わせる。

「まだ慣れませんか?」

バンビエツタのアナルは開発してから一週間が経ったが、いまだに初心な反応をする。

「な、慣れるわけじゃないでしょ……あぐっ、んうっ!? お尻の中……ミッチミチになってるのよ……んあっ、くひいんっ!」

尻穴から伝わる圧迫感を押し出そうとするように腸肉がうねりだす。

「苦しそうだから出した方がいいですかね?」

「くひいっ!? あがつ、くうっ! や、やめ……ふあああっ!」

波打つように連なった珠を吐き出そうとする動きにあわせて、ズルズルッと半ばまでパールを引き抜く。

「うあ……ああ、声……出ちやう……! 肛門めくられて……声がある……出るうっ!」

「まあ、今日は夜勤いないので出してもいいと思いますけどね。とりあえず戻しますね」

「はひゅっ!? くひっ! んっ、ふひっ! くひいんっ!」

めくれ出た腸肉を中に埋め込むようにして、また根元までズツポリと突き込んでいく。

お尻を伝う強烈な圧迫感に、バンビエツタが眼を見開いたまま身体を硬直させる。

ブルブルと腕が震え、愛液がぼたぼたと机の上に垂れ落ちていった。

「ふうっ、くっ、はあはあ、こんなの続けると……おかしくなるうっ♡」
バンビエツタの頭の中が痺れ、思考する力を快楽が奪っていく。
荒々しい息遣いと共に、喜悦に染まった甘い喘ぎ声が溢れ出てくる。

「また声が大きくなってますよ」

「んぎっ?! あ、あんたが、卑猥な道具でっ、気持ちよくするからでしようがっ♡」

擦られ刺激された腸壁が、尻を滲みださせ尻穴の中を満たしている。

ブチュツ、ブチュツと飛沫を立てながら、珠と共に腸汁がかき出されてくる。

「でもだいぶケツマンコもトロトロになってきましたよ。こんなにスムーズに入れられますし」

「あぐっ?! ふう、はうっ♡ んくっ……ひっ、ひいんっ♡」

突き込んだでは、グリグリツと腸壁を抉りながら抜き出していく。

「うっ、ひいんっ、くひいんっ?! ああ、ケツマンコオ……十分にトロトロになったから、もう擦らないでっ♡」

「まだまだ。もっと気持ちよくしてあげますよ」

「んおおお!? もう感じまくってるからあ……ダメえええっ♡」

声が抑えきれなくなり、獣のようになって快楽を貪ってしまう。

職場で雌と化してしまうことに躊躇しているのか、バンビエツタが髪を揺らしながら頭を振る。

「くほおっ?! ふっ、ひうっ……あああ……んひいひいっ♡」

熱を発し熱くなった尻穴の奥を、先端でグリツと穿る。

激しい衝撃と共に、顔を仰け反らせ宙の一点を見つめるバンビエツタ。

「かはっ、あう……奥う、擦ってるっ♡ はうっ、くひいんっ♡」

「そろそろケツマンコの方は大丈夫ですかね」

「大丈夫って言ってるでしょ！ け、ケツマンコっ……もういいからあ♡」

「本当に？」

「本だからあ！ も、もう抜いてえ！ 十分だからあっ……！」

ズルツ、ズルツと珠を抜き出していくと、バンビエツタがいきみ始めた。

「んん——っ！ んふううううっ！ はああっ、あうっ!? ん
おおっ！」

最後の先端を、鼻息荒いきみながらひり出そうとするバンビエツタ。

「バンビエツタ様」

「ふえ……っ？」

息んでいたバンビエツタが、名前を呼ばれた拍子に、一瞬力を抜いて俺を見る。

「はへええっ!? くっ、はあっ、ど、どうしてえ……戻しゆのよおおっ!?」

尻穴が緩んだ一瞬のすきを突いて、全てを奥へとねじ込んだ。

驚きと喜悦の入り混じった声を上げ、バンビエツタが見開いた瞳で俺を見つめてくる。

「まだ啜えたがってたみたいなんで」

「はあ、はあ、くひっ♡ 抜いてって、言ったでしょっ……！」

「こうして奥まで突っ込んでる方が、バンビエツタ様も落ち着くでしよっ。」

「ひあっ!? くひいんっ……おお、おほお♡ お、落ち着くわけないでしょうがっ……！」

フルフルと頭を振り、尻穴をいきませながら、バンビエツタが必死に異物を押し出そうとする。

「駄目ですよ。このまま入れときますから」

「で、でもっ……でもっ……！」

「次はこっちを気持ちよくしてあげますからね」

「ふえっ!? へあっ、えっ、な、何をっ……!?」

俺の視線がヒクついているピンク色の肉ヒダに向けられている。そのことに気づいたバンビエツタが、期待をするように身を震わせた。

「はうっ!? はあっ、はあんっ♡ ひっ、ひいんっ♡」

愛液たっぷりの膣穴へと、指を突き込むと、そのまま容赦なく抽送を始める。

尻穴を穿られる快感に溺れている間、疼きっぱなしだった膣穴をようやく気持ちよくしてもらえる。

その喜びに媚肉を震わせ指に喰いつきながら、奥へと引き込もうとうねりだす。

「んあっ、んひいっ♡ くひいんっ!? へあっ、はへえええっ♡」

「ほらほら、声が大きくなってますよ」

「り、両方気持ちよくされてっ……声、抑えるなんて無理に決まってるでしょっ……!」

バンビエツタは、声を抑えることを放棄したかのように、嬌声を放ちっぱなしになる。

「ついでにクリも気持ちよくしてあげますね」

「くひっ!? ローター、触っちゃっ……うああっ♡ 気持ちいいいっ♡」

腰を持ち上げたまま、バンビエツタがビクンツと下半身を跳ねさせる。

「はあっ、はひっ、いひい♡ イツたあっ♡ ふへえええっ、イツたあっ♡」

愛液を掻き乱す指の動きに耐えられなくなったバンビエツタが、絶頂したことを途切れ途切れに告白する。

「どこでイツたんです?」

「わ、分からないわよおっ! 全部気持ちいいからあ♡」

「そうですか。……それじゃもつとイキまじょうか」

「へうっ!? くひいんっ♡ はあっ、はうっ♡ あひいっ♡」

蜜壺から止めどなく溢れ出てくる汁で指がぐしょぐしょに濡れ、強

烈な雌臭を放ち始める。

「イクツ……イグうつ♡ ま、また……イツちやうつ♡」

「イきましたね」

「さ、さつきから言ってるでしょっ……♡ イキまぐってるのよおっ……♡」

「それじゃ今度は確実にマンコでイかせてあげますね。バンビエツタ様が大好きな場所で」

抽送していた指の動きを止め、入口付近の天井部分に指の平を押し当てる。

「ふえっ!? くっ、ひいっ♡ そ、そこっ……撫でられるとっ♡」

「噴いちやうんですよね。知ってますよ」

「あっ、あっ、あんっ♡ くひいっ♡ あひいっ♡」

バンビエツタに最上級の絶頂を味わわせるため、膣穴の天井を指先で擦っていく。

「で、出るっ♡ ああ、イキまくってるのに……そんなグリグリされたらあ……ふ、噴いちやうつ♡」

「いいですよ、噴いて！」

「くるっ♡ くるっ♡ きちやううつ♡」

何度も絶頂を迎え敏感になったバンビエツタの身体は、弱点への責めに耐える力を残していなかった。

「イツぐうつうつうつうつうつ♡」

歓喜の叫びと共に、飛び出してくる透明な液体。

最高の快感を貪っていることをアピールするかのようには、豪快に潮を噴き上げるバンビエツタ。

「ひっ、ひいっ♡ イツてりゅっ♡ イツでりゅうつ♡」

「まだまだこれからですよ」

指の動きを止めないまま、ローターの振動を一番強くする。

「ひぎゅっ!? うっ、うひいっ♡ クリでもイグっ♡ イぎゅうつうつうつ♡」

息つく暇も与えない、押し寄せてくる快感に、バンビエツタの顔がだらしなく崩れ、机の上は大量の潮と愛液で水たまりが出来てしまっ

ていた。

イキまくるバンビエツタの痴態を見ることに、満足感を覚えると、少しずつ指の動きを緩やかにする。

「くひっ、んう……あふっ……我慢出来ない……」

「なにが我慢できないんです?」

「んふう……チンポお、チンポ欲しいのおっ……♡ チンポちょうらいっ♡」

「こんなにあんなにイッたのに、突っ込んでほしいんですか?」

「ほしいっ! チンポでイキたいのよおっ♡」

媚びた声で俺を求めてくるバンビエツタ。

「わかりましたよ」

机の上でぐったりとなつているバンビエツタの身体を下ろすと、そのままお尻を突き出させる。

「くひゅううっ!? はうっ、んっ! んふうううっ!」

バンビエツタの両手を掴み、尻穴をパールで塞いだまま、濡れそぼる肉筋に龟头を押し当ててる。

「入れますよ」

囁きかけると、少しずつ肉傘を膣口へと埋め込んでいく。

「ふあっ!? はっ、ひいんっ♡ くひっ、あはあっ♡」

何度も絶頂した身体は、思うように力が入らないのか、机に上半身を押しつけたまま、動けなくなっている。

ムニユツと歪に形を変える乳房を見ながら、腰の突き出しを激しくする。

「あひいっ♡ ま、マンコの奥う、届いてるうっ♡」

肉傘がコツンツと最深部に突き当たった。

その衝撃に顔を仰げ反らせると、バンビエツタはガクガクと膝を震わせ始める。

「ふうっ、ふっ、んふう♡ コツコツ……したあっ♡」

「こうやってコツコツされるの好きですもんね?」

「す、好き♡ チンポノック好き♡ んひいんっ♡」

肉棒で貫かれてノックをされる快感に、バンビエツタが溺れ始めて

いる。

軽く小突いた後、膣穴に肉棒を馴染ませるべく動きを止めると、我慢できなくなつたように、バンビエツタの方からお尻を俺に押し当ててきた。

「奥、いっぱい突いて欲しいんですか？」

「ほ、欲しい……はあ、はあ、突いてえ♡ 奥う、ムズムズするの♡」
「わかりましたよー！」

引き込む動きに合わせて、軽く子宮口をノックする。

「くひいいい♡ あへっ!? んっ、はふううう♡」

ビクビクツと尻肉を跳ねさせると、バンビエツタが室内に歓喜の声を響かせた。

「うわ、マンコの締め付け強くなりましたよ」

「い、今……イツたからあ♡ またイツちやたのよおっ♡」

蕩けた声で、絶頂したことを認めると、バンビエツタはもつとイカせてほしいとおねだりするように腰を振り動かし始める。

「はあっ、はあっ、ふうう……ひっ、くひいいい♡ はあ、はうっ、ふああああっ♡」

「そんながつつかなくても、まだ時間はたっぷりありますよ」

尻肉をぎゅむつと掴むと、バンビエツタを焦らすように動きを封じる。

「んひっ、くひいん……い、意地悪するんじゃないわよ……。くひっ、ふひいいいん♡」

「だつてバンビエツタ様見てると、意地悪しちやくなつちやうんですよね」

「なによそれえ……。あたしはいっぱい突いて欲しいの！ 入れられただけだと……我慢、出来ないっ！」

切なく声を震わせながら、バンビエツタが激しく犯されることを望んでくる。

「やっぱバンビエツタ様エロすぎですよ」

「あ、あんたがしたんでしょう……！ こんなチンポ好きの身体に……！」

俺に抱かれる前からビッチだったと思うが、黙っておこう。

「あ、あたしをこんな風にした責任つ……取りなさいよ！」

潤んで瞳で睨むように見つめながら、バンビエツタが俺を求めてくる。

欲情を煽る艶めかしい顔に、膣穴の中で肉棒が跳ねた。

「ひゃひいつ!? ち、チンポが、動きたがつてるっ♡ 我慢出来ないっでドクドクしてるっ♡」

「そりやバンビエツタ様に求められたらこうなりますよ」

「だったら動いてっ! 突いてえ! あたしを激しく犯してっ!」

期待を声に滲ませながら、バンビエツタがもどかしそうに尻をくねらせる。

「わかりました。責任は取らせていただきます……よっ!」

「はひゅうううっ!? くひっ、くひいいいいっ♡」

大きく腰をグラインドさせ、ガツンツと尻奥を貫く。

その衝撃に、バンビエツタが悦びの声を放つ。

「せ、責任取ってイカせてっ♡ はあ、はあ、マンコもっ……いっぱい突いてえっ♡」

「もちろん」

膣肉に貼りつかれ、締めあげられていた肉竿も、そろそろ疼きが大きくなってきた。

中に溜まった愛液を掻き出すように、肉棒を出し入れして、膣穴を擦っていく。

「いひいつ!? いい……いいっ♡ チンポっ……あたし専用のチンポ気持ちいいいいっ♡」

腰の律動と共に、激しくなっていくバンビエツタの声。

「こんなエロくて可愛い姿、みんなにも見せたいですね!」

「や、やあつ……こんなのっ、あんただけしか……見せられないっ♡」
「俺だけなんですか?」

「そ、そうよお♡ あたしは……ふあ、はあんっ♡ あ、あんただけのモノだからあつ♡」

あのバンビエツタが男のモノに成り下がるのを認めた。
完全に快樂墮ちした雌の言葉に、悦びが全身を駆け巡る。

「でもこんな大声出したら、いくら夜中でも誰かに聞こえますよ」

「で、でも……気持ちよすぎて、声っ、おへえ、抑えられないっ♡」

「バンビエツタ様のアへ顔、みんなに見られちゃいますよ?」

「はひい、ふうっ♡ それでも……今はあ、あんたのチンポに犯される
ことしか考えられないっ♡」

バンビエツタを脅しているが、他人に俺たちの声が聞こえることは
ない。

職場に入る前に俺の能力で、他人に俺たちを感知できないようにし
たのだ。

「チンポはめられるとっ、んへえっ♡ 気持ちよくなることしか……
頭はないっ♡」

勃起した乳首を、自ら机に押し付け擦るようにして喜びを貪ってい
く。

その淫らではしたない今の姿を見られることに、バンビエツタはさ
らに興奮してしまっている。

「ああっ♡ く、くるっ♡ 気持ちいいのお……くるう♡ んひい
んっ♡」

蜜壺をひっくり返したかのように、大量の汁を溢れださせながら、
媚肉で肉竿にまぶしていく。

膣穴が挟まり小刻みに震えながら、軽い絶頂を何度も貪っている。

「また……突きますよ」

「んおおお!? き、きたっ♡ 子宮ノックきたあああああっ♡」

子宮口が亀頭に吸い付いてくると、バンビエツタの言う通り先端が
ノックをする。

「んふい——っ!? ふっ、ふひいっ♡ あへっ、えひいっ♡ ああ
ゝ ああっ♡」

俺の手を掴むバンビエツタの手に強い力がこもってくる。

突き出したお尻を、グイグイとバンビエツタが自ら押しつけてく
る。

子宮の中へと迎え入れようとするように、亀頭をめり込ませようとするバンビエツタ。

そのバンビエツタの動きにあわせ、掴んだ手をグイッと引つ張る。「かはあああつ♡ はひいつ……刺さるう……ち、チンポお……マンコの奥に刺さるうううつ♡」

メリツと亀頭が軽く子宮口にめり込んだ。

その衝撃に、バンビエツタが激しく声を上げ、全身を強張らせた。「いつもは中だしした後に精液を能力で外に出してますけど……もう孕んじやいますか?」

俺は快樂墮ちしたバンビエツタがどこまで言うことを聞か試すため、妊娠をちらつかせた。

バンビエツタは星十字騎士団シュテレンリッターの隊員だ。妊娠しても除隊はさせてもらえない。むしろユーハバツハに殺される可能性が高い。

通常なら妊娠は拒むはずだ。

「ふうつ、んにいいつ♡ ほ、欲しい……孕みたい♡ あんたのザーメンで孕みたい♡」

「いいんですか? 星十字騎士団シュテレンリッターを辞めることになりますよ?」

「いいつ♡ そんなのどうでもいいつ♡」

「陛下に殺されるかもしれないですよ?」

「あんたがあたしを守ってくれればいいつ♡ あたしも赤ちゃんも守ってえっ♡」

今の言葉で確信した。

もうバンビエツタは俺なしでは生きれない身体になっている。

「わかりました。孕ませてあげますよ!」

ヌルヌルの肉壁を擦りまくりながら、膣穴にしつかりと肉棒を馴染ませていく。

「いひいつ!?! ふつ、ひいつ、んひいいんつ♡ はぐつ!?! あひやあつ♡」

「気持ちいいのききました?」

「き、きひやつ……あふう、くふううつ♡ アクメきひやううつ♡」
押し寄せてくる絶頂の波に耐えるように、バンビエツタが汗の玉を

浮かんだ丸い尻を震わせる。

「好きな時にイッていいですよ」

「んあっ、はひいっ♡ あんたと一緒にイクっ♡」

「俺とですか？」

「一緒にイクのがいいのっ♡ それが一番気持ちいいからあっ♡」

俺と一緒に絶頂することを望むバンビエツタが、イキそうになるのを必死に耐えながら腰をくねらせる。

尻穴がキュツ締まり、貼りついた媚肉が肉胴をしごき上げてくる。

「俺もイキそうになってきました」

絡みつく肉壁を引き剥がすように、肉棒を抜き出していくと、ラストスパートをかけるように腰の動きを激しくする。

「はっ、はひっ♡ きてっ♡ イッてえっ♡」

「ちゃんと孕んでくださいよ！」

「孕むうっ♡ あんたの赤ちゃん、孕むからあっ♡ だから出してえっ♡」

甘く蕩げた声で、バンビエツタが孕まされたいと、自ら口にする。興奮が最高潮に達していくと、子宮口に龟头を密着させる。

「あっがああっ♡ そ、そのままあ……出してっ♡ 子宮にザーメン飲ませてえっ♡」

小突かれまくった子宮口が緩み、精液を欲するように口を開けている。

「イキますよ、バンビエツタ様！」

「ふあっ、はひいっ♡ イクからあっ♡ イッちやうからああああっ♡」

バンビエツタの手が俺の手を再度強く握りしめ、絶頂を迎えようとすることを伝えてくる。

その手を握り返すと、俺も止めを刺すように子宮の中を犯していく。

「はひいっ♡ くひっ♡ んああああっ♡ クルクルクルううっ♡」

「射精ですー！」

「おっひいい♡ へああっ……はへええっ……し、幸せえ……♡」
「え……？」

「あんたの赤ちゃん孕むのっ、幸せなのお♡ いひっ、くひいいんっ♡」

クソビッチの珍しい純情な言葉を受けて動揺したのか、強烈な快感が身体を駆け巡った。

膣穴の中で、プクツと亀頭が膨らむと、ありったけの精液を注ぎ込む勢いで、射精が勢いを取り戻す。

「んぎいいいつ♡ しゅごお、しよごいいいつ♡」

怒涛の勢いで噴き出す大量の精液は、子宮を満杯にしてもなお、吐き出され続ける。

「お、お腹、パンパンっ♡ 子種汁でパンパンだからあっ♡ おひイイツ♡」

「本当に孕んだみたいになってますね」

妊婦のように膨らんだ腹を見ながらバンビエツタに囁きかける。

「ほ、ほんとに妊娠しひやい♡ 大好きな人の赤ちゃんの種でえっ♡

あひゆっ♡ あへええっ♡」

種付けされる雌の悦びを剥き出しにして、バンビエツタは何度もイキまくる。

「俺もバンビエツタ様好きですよ」

俺も自分の気持ちを吐き出し、ありったけの精液をバンビエツタに流し込む。

「……ふう、やっと終わりましたね」

「あ、あひやあ……♡ これえ……お腹あ、破裂しひやう……♡」

バンビエツタは種付けされた余韻に浸っている。

これだけ射精したのだ。

もうこれ以上は出ないと思い、肉棒を抜こうとしたが、バンビエツタに好きを連呼され、元気を取り戻してしまった。

「しようがないよな」

子宮の中に溜まった精液を波打たせながら、肉竿を動かしていく。
「あふえ……？？ まだしゆるう？ セックスしゆるのお？」

疑問に思いながらも、俺の動きに合わせて身をくねらせるバンビエツタ。

「もう一回だけいいですか？俺の息子がもつと種付けしたいみたいなんで」

「いいっ♡ 続けへえっ♡ あ、あたひも……もつとセックスしたい♡♡ 赤ちゃん欲ひい……んああ♡」

「それじゃ続けますね！」

すでに膣穴は精液がなみなみと蓄えられている。

それでもなお、肉棒から力が抜けることはなかった。

そして、俺専用になった膣穴もまたうねりながら、肉棒を絞めつけてくる。

赤ちゃんを作りたい。

その想いを共有したまま、俺とバンビエツタは再びお互いを貪りあっていた。

バンビちゃんに黙って浮気

とうとう虚^{ウエコムンド}圏と尸^{ソウルソサエティ}魂界に攻め込むことになった。

千年血戦篇の始まりである。

星十字騎士団の一員であるバンビエツタは尸^{ソウルソサエティ}魂界に出張中だ。今ごろは多くの死神たちを殺しているだろう。

下っ端の俺には招集がかかることもなく、通常業務をこなしている。

「みんな忙しそうだな」

黙々とデスクワークをしていると、仲良しの同僚が話しかけてきた。

「俺たち以外はな」

「それな。バンビエツタ様がいなくて寂しいだろ？」

「そうだな。今日の性処理どうしようか考えてる」

「寂しいのは下半身だけかよ」

バンビエツタと子作りを始めてから一ヶ月が経った。

もし妊娠したら予定を早めて、二人で現世に逃げようとしたが、妊娠の報告は受けていないので、バンビエツタが狛村左陣に敗北するまではアクションを起こさないことにした。

「あのさ、もし見えざる帝国^{ヴァンデンライヒ}が負けたらどうする？」

「おいおい、俺たちが負けるわけないだろ」

「もしもの話だよ」

「……そうだな、死にたくはないから命乞いでもするかな」

「やっぱ死にたくないか？」

「当たり前だろ。俺はもっと女の子とよろしくやりたいんだ！」

性欲に素直な同僚に呆れを通り越して感心してしまう。

「だよな。死にたくないよな」

ユーハバツハが一護に敗北して、見えざる帝国^{ヴァンデンライヒ}は滅びることになるので、予想以上に親しくなった同僚^{こいつ}をどうしようかずつと考えていた。

「お前、現世って興味ある？」

「あるに決まってるんだろ！」

「そつか。なら近い将来連れてってやるよ」

「おう。期待しないで待ってるわ」

こうして現世に連れていくやつが一人増えました。

「そういえば破面アランカルの捕虜を知ってるか？」

「トレス・エスパーダ第3十刃のティア・ハリベルだろ。知ってるよ」

ハリベルは昨日から見えざる帝国の捕虜になっているらしい。

「そいつ以外にも捕虜がいるんだよ」

「そうなのか？」

「けっこう可愛かったぜ」

「見たのか？」

「ああ。たまたま運ばれているところを目撃してな」

「ふうん」

原作ではハリベルしか捕虜にしてなかったはずだが、描写がなかっただけで、ほかの破面アランカルも虚ウエコムンド圏から連れてこられたのかもしれない。

「確かロリ・アイヴァーンって名前だったかな」

「っ……!？」

同僚から捕虜の名前を聞いて驚愕した。

本来なら虚ウエコムンド圏で、狩猟部隊の統括狩猟隊長であるキルゲ・オピーに

楯突いて返り討ちにあうはずだ。

「……ちなみにどこの牢屋にいるんだ？」

「ここの棟だよ。なんかハリベルと違って雑魚だから、ここのセキユリテイで十分らしい」

原作でも扱いが酷かったが、見えざる帝国ヴァンデンライヒでも扱いが酷いロリちゃんかわいそう。

「ふうん」

原作と違う展開に多少は驚いたが、これは好都合だ。

夜中に忍び込んで、ロリ・アイヴァーンを抱きにいこう。

たまには違う女の子とエッチがしたい。

幸いバンビエツタは不在なので、ばれることはないだろう。

「ククク」

「どうした？ 気持ち悪い笑み浮かべて」

☆☆☆

「悪いけど少しの間眠っててくれよ」

深夜。俺はロリ・アイヴァーンに会うため、牢屋に来ていた。セキリティイは甘いようで、看守を眠らせたらすんなりと潜入に成功した。

牢獄されているのは一人だけのようで、すぐにロリを発見することができた。

「うわ、酷い状態……」

ロリは生きているのが不思議なほど負傷していた。恐らく連行される際に激しく抵抗したのだろう。全身が痣や切り傷だらけで、端正な顔も酷い有様になっている。

思えばロリは原作でも同じような目にあっていた。

ロリ・アイヴァーンはツインテールとミニスカートが特徴的な破面アランカルで、「藍染の側近」を自称しており、格上である十刃エスパーダにも高圧的な態度を取る愚かな女だった。

藍染に特別扱いされていた井上織姫に激しく嫉妬し、メノリと共に暴行を加えていたところを、グリムジョーに見咎められて胃液が逆流するほど腹を蹴られ、拳句の果てに片足をもぎ取られてしまう。

その後、用済みとなった織姫を再び暴行するが、ヤミーと交戦してボコボコにされてしまう始末。

リヨナラーを歓喜させる美少女だった。

「とりあえず治すか」

俺がロリに手をかざすと、瞬時に彼女の傷が癒されていく。

「あとは念のため手枷もおこう」

ロリが全回復したのを確認し、彼女が暴れないよう手枷を生み出して拘束する。

「……うっ……」

「お、もう目覚めたか」

「……………え？」

きよとんとした顔で俺を見つめるロリ。

「……………あんた、誰？」

「俺は滅却師だよ。早速で悪いんだけど俺と取引しない？」

「取引って…………？」

「ここから出させてあげるから、俺とセックスしてくれない？」

「なに言ってるの？」

「何って取引条件だけど」

「なんであたしが、あんたとやらないといけないのよ！」

予想通り声を荒げてきた。

ロリは陰湿な性格をしているが、直情的でもあるので、バンビエツ
タと似ているところがある。

「でも虚^{ウエコムンド}圏に帰りたいでしょ？」

「くっ…………」

「もしかして処女だったりする？」

「そんなわけないでしょ！」

「じゃあいいじゃん」

「っ…………」

眉をしかめ、俺を睨んでくるロリ。

弱いのに強気な姿勢を崩さないのは好きだ。

「……………いいわよ。そのかわり手枷を外してよ」

「それは出来ない。抵抗されたら面倒だからね」

「ちっ…………」

「ちなみに手枷してると、^{レスレクシオン}帰刃は使えないから」

「なっ……………!？」

^{レスレクシオン}帰刃とは、斬魄刀の形に封じ込めた虚としての本来の力を開放する
ることだ。

つまり今のロリは両脚で蹴ることくらいしか、抵抗することができ
ない。

「……………わかったわよ。さっさと抱きなさいよ」

「交渉成立だな」

ロリが取引に応じることは予想出来ていた。グリムジョーに片足をもぎ取られる際に、身体を差し出そうとしていた女だ。脱出できるならセックスの一回くらい安いものだろう。

「それじゃいただきます」

胸を覆っている上着をずらすと、いきなり乳房があらわになった。

「ブラしてないんだ」

「文句あんの?」

「いや、ないけど」

「ひゃんっ」

両手で胸を覆うと、ロリが可愛らしい声を上げた。

「もう感じたのか?」

「そ、そんなわけないでしょ! あんたの手が冷たかっただけよ!」

「……ふうん」

ロリの乳房はバンビエッタより小さいが、バランスのいい大ききで、乳首も鮮やかな濃いピンク色をしており、劣情を誘うには十分な代物だった。

「あうっ、んっ」

蠱惑的な膨らみを手のひらいっぱいを感じながら、じっくりとほぐすように揉み上げる。

ほのかに熱い乳肉の感触は、瑞々しい弾力に溢れ、指を押し返してくる感覚が実にいい具合だ。

「思ったより大きいんだな」

「う、うるさいっ……。はひっ! 黙って揉んでなさいよっ……!」

喘ぎながらも気丈に振る舞い、俺を睨みつけてくる。

「黙ってたらつまらないだろ」

さらにロリに淫猥な刺激を与えるべく、乳肉に埋め込んでいた指の一つでヒクヒクと震える突起物を突いてみる。

「ひあっ!」

「ここ感じやすいんだ?」

「ち、ちがっ……あうっ、はひうっ!」

ぶつくりとした乳輪に埋没させるように乳首へ愛撫を加えていく

と、敏感に反応したロリがビクンと身体を跳ね上げて甲高い声を発する。

「ひいんっ！ さ、さっさと挿入すればいいでしょ……あひんっ！」

「本番だけでもつまらないでしょ」

「あ、あんたなんかとしても、楽しくなるわけ……んひいっ……ないでしようっ……！」

「そんな顔で言われても説得力ないんだよな」

ロリは胸だけで十分快感を得ているようで、いつの間にか顔が蕩けている。

「ま、あんまりゆっくりしていると人が来ちゃうかもしれないから、こっちも弄らせてもらおうか」

投げ出されていたロリの足を掴み、力任せに開く。

大股開きにされた上、スカートの中までもがあらわになったことに、ロリが抗議してきた。

「こ、こんなに足広げなくていいでしょう！」

「いちいちうるさいな」

強気な女は好きだけど、強気すぎるのも考え物だ。

俺はため息を吐きながら、現れたパンツを素早くずらして、性器に指を乱暴にねじ込んだ。

「んきやあっ!？」

「うお、きついな」

指先に生々しい粘膜の感触が伝わりとともに、ねっとりするような熱さが指に絡みついてくる。

ロリのはバンビエツタに比べると締め付けがきつく、まさに啞えるといった調子で指を圧迫してきていた。

「ひやああっ!？ あうっ、指動かすなっ！」

指が入っていることを教えるように、軽く柔壁を撫でると、華奢な身体が引きつり、甲高い悲鳴があがる。

その反応が愉快で、俺は指を中の粘膜に押しつけながら、ねっとり熱い膣肉の感触を楽しんでいく。

「やだっ、やめなさいよっ！そこはだめだつてばあ！」

ロリのか弱い反応に気分を高ぶらせ、突き立てた指で穴の中をほじりまくる。

「ひあつ！ やめつ、はひつ！ ひいあつ!」

じつくりと肉胴を広げるように指で刺激を与えると、ロリが喚きながら背筋を震わせる。

それにももない、もともときつい膣口がますます強烈に締め、肉壁の卑猥な起伏が指の表面でひしやげていく。

「んああつ、やめてっ……やめてえっ！ 掻き回さないでえ！」

「やだ」

「やつ、んっ!? んあああつ♡ は、激しくっ……やあああつ♡」

媚肉をさらに荒々しく掻き回す指の動きに、ロリが甘い声を発する。

小ぶりの尻をくねらせて、感じながらも刺激を嫌がる様は、戦士としてはあまりにも弱弱しく、その姿がますます俺を楽しませてくれる。

「んひっ……やつ♡ ふあああつ、あひいつ♡」

何度も指先で肉壁を引つ掻き、愛撫を加えていくうち、膣奥から次第に粘り気を帯びた体液が溢れてきた。

「うあつ……あう、はうっ……」

潤ってきた牝穴から指を抜くと、ロリは少し安堵した声を漏らし、ヒクヒクと背中を震わせる。

「一気に濡れてきたな。ほら」

「そ、そんなの、見せないでよお……!」

快感の証拠を見せつけられたロリは、恥ずかしさのあまりそつぽを向いてしまう。

「あ、ごめん。それじゃそろそろ挿入しようか」

「そうよ。さっさと——ひいひいっ!」

突き出された肉棒を対面した瞬間、ロリの全身が跳ねるように震え、恐怖に引きつりきった声が飛び出した。

「ちよっと……何なのよ、その大きさはっ……!」

「いや、普通より大きいくらいだと思っただけ」

「そんな大きいアランカルの破面にはいなかった！」

「そうなんだ」

アランカル 破面の方が大きい奴がいそうな気がするが。たまたまロリの相手が俺より小さかっただけだろう。

「とりあえず挿入するぞ？」

「ちよ、ちよっと！ やめて！」

「なんで？」

「そんな大きいのも無理だから！」

「大丈夫だって。すぐに慣れるから」

バンビエツタも最初は怖がっていたが、すぐに気持ちよくなっていた。

「やだ！ やめてよ！」

悲鳴をあげるロリに身体を寄せ、愛液でしつとりと濡れた秘所へ膨れきった亀頭を押しつけていく。

「やめてってば！ やめてよやだ！ やめて！」

「大丈夫だから」

「ねえ！ 口でするから！ 口で気持ちよくしてあげるから！ ね

えってば！」

「うるさいな……。ほら！」

「いつ、ぎひいいいいいつ!?!」

引いた腰を勢いよく打ち付け、一気に膣奥へねじ込んだ瞬間、ロリの身体がひととき大きく跳ね上がった。

腹の底を潰されたような呻き声が響くと同時に、異物で埋まった肉脬が一気に引き締まり、たぎる肉棒を引き千切らんばかりに絞り上げてくる。

「あつ、がつ……。うつ……。」

刹那。ロリは白目を剥いて気絶してしまった。

「うそーん……」

結合部から血は溢れていないので、処女ではなかったようだが、あまりの激痛に意識が保てなくなったようだ。

アランカル 破面として雑魚だったロリだが、あそこも雑魚だった。

☆☆☆

「あひいいいいっ♡ おほおおっ♡ オマンコイクううっ♡」
ロリは俺に片足を上げられた体勢で、精液塗れの牝穴に肉棒を突かれまくっている。

「あはああああっ♡ イクっ♡ イグうううっ♡」
挿入だけで気絶してしまったがロリだったが、俺の能力で痛覚を遮断されると、すぐに狂いだした。

もともとロリのおそこは軽い手マンだけで絶頂してしまうほど刺激に弱く、何度か抽送をしただけで、肉棒に屈服してしまったのだ。

「んお、おおっ♡ ああああんっ♡ あひゃっ♡」

「そんな気持ちいいんだ？」

「気持ちいい♡ オチンポいい♡ いいっ♡ くひいいいいっ♡」

アクメに突き抜けたロリが、涙と涎を垂らしながら、獣のように喘ぐ。

さらに何度も中出しをされた結果、お腹が妊婦のように膨らんでおり、アへ顔と相まって下品下品極まりない状態になっている。

「汚い顔してるぞ、ロリ」

「ごめんによひゃいいっ♡ でもチンポ凄すぎでえっ♡ アクメとまらなによい♡ いいっ♡」

「俺のせい？」

完全に勃起した乳首を思いつきり抓り、能力で軽く電気ショックを与える。

「ち、違いまひゅううっ♡ すぐにイツぢやう、あたしのオマンコのせいですううっ♡」

「そっだよな」

まるで性奴隷のように成り下がったロリはどんどん呼吸を荒くさせ、さらなる欲情に瞳を妖しく煌めかせだす。

「だがらあっ♡ この雑魚オマンコにい♡ もっとオチンポしてくださあいいっ♡」

「わかった。またイカせてやる！」

「おっほおおお♡ 奥にきたあああつ♡ あひいいいいつ♡」

容赦のないピストンに見舞われたロリは大きくよがり声を走らせ、発情した動物のように喘ぎだす。

「あんっ、ふああああつ♡ ひぬううううっ♡ 気持ちよすぎて、ひぬううううっ♡」

「おいおい、簡単に死ぬとか言うなよ。それでも藍染の側近か？」

「もう側近じゃないれずううっ♡ 雑魚まんこの破面アランカルでずうううっ♡」

自分でも雑魚であることを認めたロリは、恥も外聞もなく、ひたすら快楽を求める。

「ならその雑魚まんこに射精してやる！」

「はひいいいいいいつ♡ いっぱい出してくだひやいいいいつ♡ おひいいいいつ♡」

「出すぞー！」

「きやひいいいいいいいいんっ♡」

豪快な射精を子宮に受けて、再び快楽を与えられたロリは、理性を飛ばして狂ったような嬌声をほとばしらせた。

「おいおい、失禁するなよ」

ひととき大きな絶頂に悶え狂いながら、射精に負けぬほど勢いよく尿を噴き散らし、恥もかなぐり捨てて猛烈なアクメ姿をさらしている。

「あっひひいいいいいッ♡ 飛んじやつてるううッ♡ 頭もっ、おしっこもおおおっ♡ んお〇お〇 おおっ♡」

子種汁が子宮の奥に勢いよく叩きつけられるたび、尿の放出が勢いを増し、はしたなく排泄音を響かせる。

「まだイクううう♡ ひいいいんっ、ひやひいいい♡ きひいい、ふひいいっ♡ んひい〇い〇——っ♡」

あまりに連続で絶頂しすぎたせいで、ロリは引き付けを起こしたような状態になっている。

「ひぎゆううう♡ いひっ、ひいい〇い〇——ッ♡ イグうっ、う〇あ

「あ——ッ♡」

「ロリ、これで終わりだ！」

「おっひい♡い♡い♡い♡い♡い♡——♡」

精液を出し尽くすと、ロリは女があげてはいけないような声を放った。

射精後もしばらく痙攣したロリはもはや精魂尽き果て、意識が飛んだ状態でぐったりとした。

「すー、しゅぎたあ……♡ ひいひい♡ オマンコ……はひっ♡ たくさんイッたあ……♡」

視点すら定まらない虚ろな調子になりながら、ただただ力なく快感の言葉を呟く。

ヒクつく花弁には小便の残滓が滴り、濃密なアンモニア臭が牢屋に立ち込めていた。

「さて、精液も出し尽くしたし、ウエコムンド虚圏に帰る？」

「か、帰らなひい……。ここに残ってえ……。あなたに、抱かれるう……♡」

「捕虜のままでもいいのか？」

「いい……。ウエコムンド虚圏に帰ったらあ……。あなたのちんぽが、なくなっひやう……」

「いや、俺のチンポはなくならないけど」

ロリの頭はまだ蕩けているようで、思考も言動も正常ではない。

ここに残ったら処刑される可能性もあるのに、それでもロリは俺のチンポを欲しがっている。

「あ、あたし……。あんたの、肉便器になりゆ♡ いつでもお♡ どこでもお♡ ハメていい肉便器になるう……♡」

「おいおい、肉便器って恥ずかしくないのか？」

「恥ずかしいとか、どうでもいい……。あんたのチンポ、もらえるならなんでもいい……♡」

肉便器志願してきたロリだったが、バンビエツタにばれるとまずいので、戦いが終わったらウエコムンド虚圏に帰ってもらうことにした。

ロリの性格だと、バンビエツタに戦いを申し込んで瞬殺されるのが

オチだろう。

戦いが終わったたら現世と虚^{ウエコムン}圈_下を行ったり来たりする生活が続きそ
うだ。

バンビちゃんは慰められたい

「思ったより死人が凄いな」

ロリを抱いてから数日後。俺は尸魂界ソウルソサエティに来ていた。
ヴァンデンライヒ
見えざる帝国が、第二次侵攻中であり、戦場には死神や滅却師の死
体があちこちに転がっている。

俺は雛森桃や涅ネムなど護廷十三隊の美女たちを観察しながら、戦況を見守っていた。

「ちくしょう……あたしが死神に負けるなんて……」

数キロ先で瀕死の重傷を負ったバンビエッタが嘆いている。

原作と同じく狛村左陣と再戦したバンビエッタだったが、自らの心臓と引き換えに不死身の肉体をゲットした七番隊隊長の前になく敗れてしまった。

「5人の中で……あたしが最初にやられるなんて……」

彼女が言う5人とは、もちろんバンビーズの面々である。

リーダーである自分が真つ先に負けるとは思いもしなかったバンビエッタだが、他の4人からは下に見られている。実際に今回の戦いでも敗北するバンビエッタを嘲笑う様子が見受けられた。

「やっぱりわざと孤立させてたんだな」

最初は5人で戦っていたが、途中からバンビエッタ一人だけとなり、他の4人は俺と同じく高みの見物をしていた。

男の娘であるジジはバンビエッタに対して歪んだ感情を抱いていたようで、彼女が敗北した瞬間に、残酷な笑みを浮かべていたのが印象的だった。

「かわいそうなバンビちゃん。助けてあげる」

いつの間にかジジたちがバンビエッタを囲んでいた。

「ボクたち、バンビちゃんがいないと寂しいもんね」

「やだ……やめて……やめてよジジ……」

ジジの言葉に酷く怯えるバンビエッタ。

このままだと、バンビエッタはジジに絞殺され、ゾンビ化してしまう。

俺はバンビエツタを助けるために来たので、当然見過ごすわけには
いかない。

「殺さないでっ……………!」

「殺さないですよ」

「……………え?」

ジジが首を絞めようとした瞬間、俺はバンビエツタを手元に移動さ
せた。

「あ、あんた……………なんで……………」

お姫様抱っこされているバンビエツタが、呆けた様子で俺を見上げ
る。

「なんでってバンビエツタ様を助けに来たに決まってるじゃないです
か」

「っ……………」

「もう大丈夫ですよ」

「お、遅いわよ……………。もっと早く助けに来なさいよ……………!」

「すみません」

安堵したバンビエツタが泣き出してしまった。

「バンビエツタ様」

「なによ……………」

「おしっこ漏らしてますよ」

「っ……………!?!」

先ほどは瓦礫に埋もれていた気づかなかったが、バンビエツタは恐
怖のあまり失禁していた。

「こ、これは違っ……………」

「そんなにジジが怖かったんですね」

「うるさいっ……………!」

「とりあえずここは危ないんで、現世に行きましょうか」

一刻も早くジジから離れたいバンビエツタは素直に頷く。
名残惜しいが尸魂界ソウルソサエテイとはしばらくの間お別れだ。

「平和になったらまたここに来ましようか」

「二度と来ないわよ!」

☆☆☆

現世に移動してから一時間後。

俺とバンビエツタは豪華な空き家でくつろいでいた。

全身が焼け爛れていたバンビエツタだったが、俺の能力で回復しており、綺麗な白い肌に戻っている。

「ほんと、あんたの能力って卑怯よね」

隣りに座るバンビエツタが呟いた。

「そうですね」

俺は神様からの転生特典で、俺が知る創作物の能力や必殺技をすべて使用することができる。

生前アニメオタクだった俺は、マイナーなラノベや漫画も愛読していたので、知識は非常に豊富である。

なのでユーハバツハに勝てる能力も、今後現世で生きていくために必要な能力も知っている。

「陛下——ユーハバツハは本当に負けるの？」

「負けますよ」

俺が殺してもいいんだが、原作の主人公である一護の邪魔をするわけにはいかない。

「そう」

先ほどからバンビエツタの元気がないが、仕方ないだろう。仲間だと思っていたジジたちから見下されていることを知り、拳句の果てに殺されそうになったのだ。

「あたしって惨めよね……」

「そうですね」

「少しはフォローしなさいよ」

「フォローのしようがないので」

「うぐっ……」

死神には楽勝って言ったのに惨敗。ジジに殺されそうになって失禁。フォローのしようがない。

「だ、だったら慰めなさいよ……!」

「十分に慰めていると思うのですが」

肩に頭を乗せてあげたり、頭を撫でてあげたりしている。

「か、身体で慰めてっ……!」

「こんな状況でムラムラしたんですか?」

「仕方ないでしょう!」

人は生存を脅かされると子種を残そうと必死になると本で読んだことがある。

もしかしたら先ほどの戦いで、バンビエッタの生存本能が働いたのかもしれない。

「わかりましたよ。慰めてあげます」

「きやつ!?!」

俺はバンビエッタを押し倒すと、腰を持ち上げ、下腹部が丸見えになる恥ずかしい体勢にさせた。

「ちよつと、何よこの体勢は!?!」

顔を赤らめながら、バンビエッタが恥ずかしそうに睨んでくる。

「まんぐり返しですよ」

「それは知ってるわよ! 恥ずかしいじゃない!」

「この体勢の方が妊娠しやすいって本に書いてあったので」

「そ、そうなの……。なら仕方ないわね」

もちろん嘘である。傷心中のバンビエッタを辱めたいだけだ。

スカートを捲って下着を脱がすと綺麗な性器があらわになる。

「自分で足を抱えて、もっとよく見えるようにしてください」

「わ、わかったわよ」

バンビエッタは言われるままに、膝の裏を両手で抱え、下腹部を突き出してくる。

「マンコ丸見えですね」

「っ……」

羞恥に震えながらも、バンビエッタのあそこは充血し肉筋は腫れぼったくなっている。

「もう濡れてる。いつから濡らしてたんですか?」

軽く肉ヒダを指でなぞると、愛液が指に絡みついてくる。

「くひっ!? し、知らないっ……んあっ!」

「もう喘いでるし」

既に敏感になっているようで、ビクンと腰を跳ねさせバンビエツタが嬌声を放つ。

「それじゃ今日は俺が奉仕してあげますね」

「ふえ……? くひいんっ!」

ピンク色の媚肉に、舌を押しつけながら舐め上げる。

ザラリとした舌の感触を感じた瞬間、肉壺が蜜汁をトプトプと溢れださせる。

バンビエツタの悦びの声を聞きながら、肉ヒダへ唾液をまぶしていく。

「あふっ、ふあっ、ひいんっ♡ あふう、あひいっ♡」

ゆっくりとした舌の動きを、お腹をくねらせながら受け入れるバンビエツタ。

トロリトロリと源泉から湧き上がる蜜汁を舌で吸い取ると、喉を鳴らして飲み下す。

「ああ……あたしの……マン汁う……飲まれてるう♡」

俺が蜜汁を飲んだのを見たバンビエツタが、悦びに身を震わせる。

「いつも飲んでもらってるので、たまにはいいかと」

「……美味しい?」

「美味しくないです」

「そこは美味しいって言いなさいよ!」

バンビエツタはいつも俺の精液を美味しそうに飲んでいるが、快樂補正がかかっているからだろう。

補正がかかってない俺には蜜汁は無味だった。

「うるさいですよ」

叫ぶバンビエツタを黙らすため、自己主張するように勃起したクリトリスを、軽く唇でついでばみ、歯を立てる。

「へあああっ!? 歯は立てちゃ……あひゆうっ♡」

一際大きな声を上げると同時に、突き上げた下腹部をブルブルと震

わせるバンビエツタ。

軽くイッてしまったようで、半開きの唇からはタラタラと涎が垂れ流れていた。

「もうイッたんですか？」

「くうっ、んっ、んひいつ♡ そ、それは……はっ、はひいつ♡」

蕩けた顔で絶頂したことを誤魔化すバンビエツタ。

「こっちにも奉仕してあげますね」

「ひゃうっ!? い、いきなりにやにを？ んひいあっ！」

膣口から流れ落ちる蜜汁が、窄んだアナルを濡らしていた。

ねっとりとした汁を指に絡みつけ、ほぐすように指を突き入れる。

尻穴を軽く圧迫される衝撃に、バンビエツタの全身が強張り痙攣する。

「締め付け凄いですね」

「む、ムズムズするからあ……入れないでっ！ ひいつ、お尻は……抜いてえっ！」

異物の侵入に、腸壁がうねりながら活弁に蠢く。

押し出そうとするような動きに抗い、奥へ奥へ指を突き込んでいく。

「何度もアナルで絶頂してるくせに、何を言ってるんですか？」

「はあっ、はひっ!? お、お尻っ……ひいつ！ らめえっ！」

腸肉に指の腹を擦り付けながら、一気に半ばまで指を引き抜く。

絡みつく腸肉ごと引き出すような抜き出しに、バンビエツタが尻穴をギュッと窄めてくる。

「そんなに抜いて欲しいんですか？」

入口付近の秘肉を指でほじりながら、バンビエツタへと視線を向ける。

「ぬ、抜いてえ……ゆっくりい……お願いっ！」

喘ぎながら言葉を紡ぐバンビエツタだが、尻穴の疼きが強くなっているのか、声が弱弱しい。

「それじゃ抜いてあげますね。力を抜いてください」

「はうっ、ふう、はあ、んうっ」

言われるままに、バンビエツタが身体から力を抜く。

「よいしょ」

「かはあぁっ!? な、なんでえ……奥っ……あぁあぁあぁっ♡」

尻穴が緩んだ隙をつき、また指を埋め込む。

完全に不意打ちを食らったバンビエツタが、顔を蕩けさせながら嬌声を放った。

「マン汁凄いですね。そんな気持ちいいですか?」

尻穴を犯されることを悦ぶかのように、止めどなく蜜汁が溢れ出ている。

「あぁ、ひっ、んあぁあぁあぁっ♡ お、奥っ……らめなのにい♡」

腸肉の粘膜が熱を発し、とろりとした汁を滲ませてくる。

腸汁が潤滑油となり指に絡みつき、肉壁を収縮させる。

強く指が締め付けられているのを感じながら、俺は再び肉壁を引き出すように指を抜いていく。

「あぁぁっ!? はうっ、くひいんっ♡ んひゃあぁあぁっ♡」

抽送されることによる快感に、バンビエツタは何度も絶頂してしまっている。

ピンク色の肉ヒダをうねらせ、もの欲しそうに蜜汁を垂らす膣口。クリトリスも弄ってほしいとプルプルと、震えっぱなしになっていた。

むせかえるような雌の匂いを充満させる膣穴を舐め回しながら、尻穴に指を抽送する。

「あぁ、ゴリゴリいっ……だめえっ♡ 肛門、外まで出すの……ダメえええっ♡」

指の抜き出しと共に、排泄感が込み上げてくるのか、ガス音が聞こえてくる。

「き、聞くなぁ……♡ ふひいっ、くひっ、んおおっ♡」

「だったら音が鳴らないようにしてあげますね」

「きひいっ!? うっ、へうっ♡ はへええっ♡ へひいんっ♡」

勢いのいい指の突き入れに、バンビエツタが大きく喘いだ。

「このままイカせてあげますね」

滲み出た腸汁でヌルヌルになった尻穴は、スムーズに指の抽送を受け入れるようになっていた。

「いひいっ♡ あんっ♡ あはあああんっ♡」

「ほらほら」

「おふうっ♡ んああっ♡ んお♡ おおっ♡」

抽送に抗えず、バンビエッタの声はどんどん大きくなっていく。

「あふあっ!?! も、もう駄目え…………♡ 頭の中が…………真っ白になりゆっ…………おひいっ♡」

「もうイキそうですか?」

「くほおおっ♡ ま、まだよ…………お♡ ほおおおおっ♡」

顔を蕩けさせながらも、まだ絶頂を認めないバンビエッタ。

「ならもつと責めますよ」

「んひいっ!?! くひっ♡ ああっ♡ うああああああっ♡」

十分過ぎるほどに敏感になっているクリトリスを、下腹でグツと押しつける。

その強い快感に歓喜の叫びを上げ、尻穴を絞めるバンビエッタ。

そんな尻穴を絞めつけることによって、指がさらに腸壁を刺激していく。

「んふ——っ!?! クリ舐めとお尻…………あたひいっ、はへええっ♡」

「まだイッてないですか?」

「イってる! イってるの認めるからあつ! もう許しへえええ…………!」

せつかくご奉仕してあげているのに、拒否しようとするバンビエッタ。

そんな彼女の懇願を俺が聞くわけもなく、さらに絶頂へと突き抜けるさせる。

「それじゃもつとイかせてあげますね!」

「しよ、しよんなっ…………はひいんっ!?! い、イキすぎておかしくなりゆ…………!」

「おかしくなっていていいですよ!」

「ちゆらいのおっ! 戦った後で、イッてばかりでえ…………くるひいっ

！」

辛い苦しいと言ってる顔は、悦びにだらしなく蕩けていた。

「俺を求めた時点で、こうなるのわかってましたよね？」

舌責めをやめて、指の腹でクリトリスを潰していく。

「くひいつ!? ひいつ、無理い……! 無理っへ……言っへりゆのにいいっ!」

「何が無理なんです?」

「ちよっ待っへえ! ら、らめっ……来ちやう! クルクルクルう!」
オーガズムの波に身を委ねさせるべく、力強くクリトリスを捻り上げる。

「うひいつ♡ ああ——っ♡ あひひいいいいいいいいっ♡」

絶叫と共に、透明の汁が噴水のように噴き上がる。

「で、出ひやったあ♡ しゅごいのきひやああああっ♡」

最上級の絶頂を味わうバンビエツタが腰を跳ねらせながらイキまくる。

もつとバンビエツタを狂わせたい。

そんな衝動に駆られた俺は完全に勃起しているクリトリスに歯を立てた。

「クリ噛みらめええええっ♡ イギしゅぎひやううううっ♡」

敏感なクリトリスを容赦なく攻め立てられ、息も耐え堪えにバンビエツタが声を上げ続ける。

尻穴をギュツと締め、膣肉をヒクつかせながら、快楽を貪るバンビエツタの瞳が俺を見つめ返してくる。

「ぎ、気持ちよしゆへ……蕩けひやううっ♡」

素直に快感を認め、絶頂していることを告げてくる。

「これだけイったならもういいですかね?」

「ま、まだあ……チンポ、もらってにやい……」

子宮が疼きだしたようで、バンビエツタが肉棒を求めてくる。

「戦いの後で疲れてるんじゃないんですか?」

「っ、疲れてりゆけどお……チンポは別だからやあ……」

「一回じゃおさまらないですけど、いいんですか？」

「いい……。イッパイ……。してえっ……。♡」

理性が完全に崩壊し、子宮でモノを考えるようになったバンビエツタが、甘い声でおねだりをしてきた。

「わかりましたよ」

バンビエツタの身体に覆いかぶさるようにして乗りかかる。

俺専用の穴と化した膣口に龟头を押し当てる。

「あはあっ♡ はあ、はあ、おひいっ♡」

腰を突き出しながら、熱くぬめった膣穴へとめり込ませていく。

バンビエツタがアナルでの絶頂に抗っていたのは、早く肉棒が欲しかったからだろう。

その証拠に、バンビエツタは俺にしがみつきながら嬌声を放っている。

「もっもっ、奥うっ……。入れて……。イカせてっ♡ チンポでイカせてっ♡」

早く膣奥を満たされたい。

その欲求のままに、バンビエツタが腰を足を絡めてくる。

そのまま、絡めた足に力を込めると、自ら膣奥へと引き込んでいく。

「あんっ、あふううんっ♡ ああ、気持ちイイイッ♡」

「奥まで入りましたよバンビエツタ様」

「んっ♡ 奥までチンポきたあっ♡」

「子宮、いっぱい突いてあげますから」

両手を首に回し、蕩けた顔を俺に見せつけながら、バンビエツタが嬉しそうにコクコクと頷く。

「はうっ!? んひっ、いいっ♡ はああっ、あひっ♡ ひいあっ♡」

子宮口を圧迫されたバンビエツタが、しがみついた身体をビクツと跳ねさせる。

「ああ……。これ好き♡ 子宮にチンポでキスされるの好き♡」

「知ってますよ」

「もっもっ子宮にキスしてええっ♡」

子宮口を突かれることを望むバンビエツタが、両手両足に力を込め

る。

その動きに促され、膣奥までねじ込んだ肉傘が、何度も何度も子宮口へと押し当てられた。

「はあっ、ひっ、コツコツっ………されてるっ♡ んおっ♡ はひイインっ♡」

「すごい締め付けですね」

「イキッ………そうだから♡ もう、イキそうっ♡」

「好きなだけイッていいですよ」

バンビエツタを抱きしめたまま、腰だけを振り動かし子宮口を突きまくる。

「ひいあっ!? はひっ♡ あひイインッ♡ イクイクイクうっ♡」

尻穴を穿られ、肉ヒダを舐め回されて、何度も絶頂していた身体は待ち望んでいた肉棒に貫かれ、すぐに雌の悦びを露わにする。

バンビエツタのしがみついてくる力が強くなり、膣肉が激しくうねり、肉幹を擦り上げる。

その強い圧迫に耐えながら、ひたすら子宮口を突きまくる。

「ふひインっ♡ はへっ、えっ、えひいんっ♡ イックうううっ♡」

本能のままに快樂を食ったバンビエツタの身体が、少しずつ弛緩し始めた。

「ふあっ、はあ、はあ、あふううう………♡」

肉棒に屈服させられた悦びを顔一杯に浮かべ、バンビエツタが乱れた息を吐き出す。

「イキましたね、バンビエツタ様」

「んふう………イッたあ♡ チンポ子宮にキスされてイッたあ………♡」

トロンとなったままのバンビエツタが、絶頂したことを認める。

「でも、チンポお………まだイッてない………♡ ああ、チンポもイキたがってるう………♡」

「そうですね。イカせてくれますか?」

「んう、イカせるっ♡ あたし、イカせてもらったからあ………次はあたしがあ………♡」

「それじゃお願いしますね」

「でも、その前にい……んちゅっ、れるお……れる……んぢゅっ」
ゆつくりと口を開けたバンビエツタが、舌を突き出し俺の唇を舐めてくる。

「唇であたしを慰めてえ……♡ ちゅっ、ちゅっ、れるおっ♡」
「んっ」

バンビエツタの求めに応じるべく、俺も舌を突き出す。

「むうっ、ふううっ、ちゅぷっ♡ むっ、んちゅうっ♡」

バンビエツタは積極的に舌を絡めてくる。

ぬめぬめとした赤い舌をうねらせるバンビエツタが、少しずつ膣肉に力を込み始める。

バンビエツタと繋がったまま、濃厚な口づけを交わす。

「ちゅぷっ、ぢゆるっ……んくっ、んふう、んちゅっ♡」

絡み合う舌と舌を通して、唾液がバンビエツタの口内に垂れ落ちていく。

喉を鳴らしながら唾液を飲み込んだかと思うと、もつと飲ませろとばかりに、俺の舌を吸いたててくる。

「んっ、んむっ♡ ずじゆるっ、じゆるるうううっ♡」

舌を根こそぎ引き抜かれるような強い吸引力に、痺れるような快感が広がっていく。

俺は舌での愛撫をバンビエツタに委ね、ゴツンツと軽く腰を突き出した。

「くひゅうっ!? あひっ、ひいんっ♡ はふうっ、んひイインツ♡」

油断しきっていた子宮口を小突かれる快感に、絡みつかせていた舌を離して、バンビエツタが淫らかな声を上げる。

それでも、すぐにまた舌を絡め取ると、唾液をまぶすように擦りつけてくる。

舌を貪り唾液を啜る音と、膣穴を抽送する音が混じり合いながら大きくなっていく。

「いひっ!? ふひい……キシユラけれえ……イキひよ♡ イっひやううう♡」

「何度でもイっていいですからね」

「はうっ!? ま、まひや……あたひらけえ、んんっ、イカされひやう♡」
「ん?」

「んちゅ、ちゅぷっ……あたひい……あんたを気持ちよふ出来へりゅ
う……?」

「気持ちいいですよ。これでわかるでしょ?」

滾っている肉棒の存在を示すように、膣肉に肉胴を擦り付ける。

「あひゃっ!? ふひっ♡ ちゆるるっ、ずっ、んじゅずうう♡」

肉棒に貫かれる悦びを、身体中で示しながら、バンビエッタが俺の
口内へと舌を突き入れてきた。

れるれろと歯の裏を舐め回し、縦横無尽に動かしたかと思うと、軽
く唇で舌をついばんでくる。

「キスしながらセックスするの気持ちひいいっ♡ ぢゅぷうっ♡
ぢゆるるっ♡」

美味しそうに俺の唾液を飲み下すバンビエッタに、新たな唾液を流
し込む。

口内から抜け出た舌を絡ませ、唾液を垂れ流していくと、バンビ
エッタの瞳が喜悦に蕩けていく。

「そろそろバンビエッタ様の大好きな場所、思いつきり突いてあげま
すね」

「ふひいんっ!? くひゅっ、へあっ♡ へひイインッ♡」

緩やかな動きから一転、力強い動きで子宮口をこじ開けにかかる。

「し、子宮がっ!? んひいっ♡ 潰れひやうっ♡ あひいいんっ♡」

一瞬、苦しそうにバンビエッタの顔が歪み、絡めていた舌を離して
しまう。

「強すぎました?」

「はあ、はあ、だ、大丈夫だからっ! 子宮、ジンジンして……気持ち
いい♡」

「それじゃ続けてもいいですか?」

「んっ♡ んふううっ、はふううウウツ♡」

自分だけガッツついているように見られるのが恥ずかしいのか、バン
ビエッタは返事をする代わりに、絡めている足に力を込め、俺の強く

身体を押しつけてくる。

「いいってことですね」

「い、言わせるんじゃないわよお！ ふあっ!? ひいつ♡ ふひイインツ♡」

まだツンな部分を残しているバンビエツタに興奮を覚えると、俺はグリグリと子宮口をこじ開けにかかる。

肉傘が入口を擦り、無理矢理入り込もうとする強い圧力に、子宮を犯されているということを強く意識してしまっているバンビエツタ。

「はあっ、はひいつ♡ んちゅっ♡ ぢゅるっ♡」

膣肉を締め肉棒に快楽を与えながら、バンビエツタが舌を吸い上げ唾液を啜り飲む。

「あ、あたひ……気持ちよすぎへえっ、イツひやう♡ イキまくっひやうっ♡」

絶え間なく押し寄せてくる快楽に、バンビエツタの身体は震えっぱなしになっている。

「イキなひゃい、あんたも！ ちゅぱっ、れろお……イキなひゃいよお♡」

唾液まみれになった舌をくねらせ、バンビエツタが俺に絶頂を求めてくる。

「激しくしますよー」

膣内に締め付けられ続けている肉竿は、脈動を激しくし肉傘を広げ始めている。

先端に集まっている熱い塊をぶちまけたい。

肉棒はウズウズと疼きっぱなしになっていた。

「あひゅうっ!? 激しくしてえっ♡ んちゅっ、あたしを壊してえっ♡」

これでもかというくらいに強い力でしがみつき、舌を吸ったままバンビエツタが頷く。

熱くぬめった膣穴に肉棒を出し入れし、俺も欲情のままにラストスパートをかける。

「ん、ひっ♡ くっ、ひいいんっ♡ ちゅぷっ、んちゅっ♡ ん

あああっ♡」

ガツン、ガツンと突かれる度にバンビエツタが身体を跳ねさせる。意識を飛ばしそうになる強烈な快感を貪りながらも、俺を気持ちよくしようとする舌を離そうとしない。

「くっ！ バンビエツタ様っ！」

みんなが戦ってるのに、俺たちは恋人セックスをしている。

そんな罪悪感と快楽が混ざり合い、俺もバンビエツタも淫乱さが増していく。

「中でっ……出しへえ♡ あたしに、種付けしへええええ♡」

イクまくって思うように身体に力が入らないにもかかわらず、バンビエツタが腰に絡めた足に力をさらに込めてくる。

「今日こそ孕んでくれますか!?!」

「は、孕むっ♡ ぜったい孕むから、出しへええええっ♡」

「孕まなかったらアレしますからね！」

「わかっひやあっ♡ あああああ、もう……イキユツ♡ イギユウっ♡」

「射精だしますよ！」

「むぐううっ!?! ぐっ、んぐっ♡ ぢゆるるっ♡ ふぐっ、イグうううううううっ♡」

子宮口に押し当てたまま亀頭を跳ねさせると同時に、バンビエツタの口を塞ぐように唇を押しつける。

口の中で舌を絡ませ、お互いの唾液を交換しながら、子宮内へと精液を注ぎ込んでいく。

「んむううう♡ ふぐっ!?! じゅぷっ、んぶうううう♡」

怒涛の勢いで噴き出す精液が子宮壁を打っていく。

その衝撃に、しがみついたままバンビエツタの身体が激しく痙攣してしまふ。

その動きを封じるように、さらに強く唇を押しつけキスを貪っている。

「んぶううっ！ ぶはあっ！ イグイグイグうう♡ んむうっ♡ んぢうううっ♡」

塞がれた唇の隙間から、荒々しく息を漏らしながら、バンビエツタが恍惚の表情で俺を見上げる。

濡れた瞳は、もつと膣穴に子種汁を求めているように見えた。

「まだ射精ますよー！」

子宮口をさらにこじ開けるようにして、腰を突き出し、肉壁を刺激する。

擦り付けられる精液が、媚肉を発情させ、締め付けをどんどん強めていく。

バンビエツタは必死に俺にしがみついたまま、本能のままに身をくねらせる。

「むううっ!? んくっ……イキユツ♡ ま、まひやいつひやううっ♡」

「俺もイッてますよー！」

止まることを知らない勢いで、精液が噴出しバンビエツタの膣内を満たしていく。

あまりの快感に頭が痺れ、思わず顔を離すと、唾液の橋が俺とバンビエツタの口の間にかかる。

「あひいんっ♡ イギユツ♡ イギユううっ♡ イツぢやうううっ♡」

種付けされる悦びに、バンビエツタはアへ顔でイキまくっていることを告げてくる。

「またアへ顔になってますよー！」

「ら、らって、気持ちよしゅぎるううっ♡ 種付けされるの気持ちよしゅぎりゆうっ♡」

「俺もバンビエツタ様に種付けするの気持ちいいですよー！」

ろうそくの火が消える前に一瞬大きくなるように、精液の噴射が増していく。

「あゝあゝ——っ♡ しゅごっ♡ しゅごいっ♡ 出る出る出る出てりゆううううっ♡」

確実に孕ませようとするよに、新しい精液がぶちまけられ、バンビエツタのお腹を膨らませていく。

「くひイイツ♡ 出ひすぎい♡ 精液れえ……子宮が破裂しゆりゆううっ♡」

「これで打ち止めですよー！」

「あひやあああああああ♡」

狂人のように喘ぐバンビエツタを抱きしめまま、精液を注ぎ込む。

「あゝあ……♡ いひい、ふひい……あへえ……♡」

イキ疲れてへろへろになっているバンビエツタの膣内を、たつぷり精液で満たすと、力尽きたようにバンビエツタの上に倒れ込む。

「ふひい、はあ……ら、らいじようぶ……っ！」

「大丈夫ですよ。少しだけ疲れただけです」

今日はいつもより能力を使ったので、その反動がきたのかもしれない。

しばらく俺たちは抱き合ったまま、交尾の余韻に浸った。

バンビちゃんは浮気されている

俺とバンビエツタが現世に降り立ってから数ヶ月が経った。

一護は死闘の末にユーハバッハを打ち倒し世界に平和をもたらした。

俺たちは空座町から離れたとある市街に住居をかまえ、石田雨竜と同じく高校に通いながら滅却師として暮らしている。

もちろん勝手に虚を退治すると問題が発生するため、浦原喜助に協力してもらい、護廷十三隊と取引をした。

取引内容は以下の通りだ。

- ・俺たちに危害をくわえないこと
- ・滅却師の活動に目を瞑ってもらうこと
- ・ソウルリサエティ、ウエコムド尸魂界や虚圏に好きなだけ行き来できること

もちろん最初は却下されたが、今まで消滅した死神たちを蘇生させたところ、無事に取引が成立した。

ここで俺はあるミスを犯してしまった。

それは——消滅した死神たちを全員復活させてしまったのだ。
ヴァンデンライヒ見えざる帝国との戦いで消滅した死神たちだけ蘇生するつもりが、能力をコントロールしきれず全員復活させてしまった。

志波夫妻、ルキアの姉である朽木緋真、市丸ギン、地味なところだと尸魂界篇で涅マユリに人間爆弾にされてしまった新人の死神たちなど全員蘇生させたのだ。

開き直った俺は一護の母親や、石田の祖父など、俺が覚えている善良キャラ全員を生き返らせることにした。

復活した山本元柳斎重國にありえないくらい説教されてしまったが、大勢の死神や人間に感謝されたので、結果オーライだ。

特に奥さんと再び暮らせることになった朽木白哉、姉と恩人が蘇った朽木ルキア、一護の妹たちは泣きながら感謝の言葉を述べていた。

「そういうえば買い物中にあんたと仲良かった奴に会ったわよ」

夕食を調理中にバンビエツタが言ってきた。

「元気にしてました？」

「ええ。今度お店に来てくださいって言われた」

「あの野郎」

俺と仲良かった同僚はホストで生計を立てていた。滅却師としては雑魚すぎるので、お酒と女好きのあいつにはぴったりの職業だろう。

「それより夕食まだ？」

「あと10分くらい待つてください」

よほどお腹が空いているのか、バンビエッタがテーブルを叩きながら急かしてきた。

同棲して初めて知ったことだったが、バンビエッタは家事スキルが0に等しかった。

料理はもちろん、掃除や洗濯もしたことがないようで、家事を覚えさせるのに苦労したもんだ。

「早くしなさいよね。こっちは課題で忙しいんだから」

「それは俺もなんですけど……」

料理だけは一向に上達しなかったので、俺が担当することになっている。

「それにあたしは二人分食べないといけないのよ」

「わかってますよ」

バンビエッタのお腹には新しい命が宿っている。

どうやら現世に降り立ってのセックスで受精に成功したようで、今のバンビエッタは妊娠三ヶ月の妊婦さんだ。

「ていうかあたしが学校に通う意味ってあるわけ？」

俺たちは17歳なので、高校に通っていてもおかしくない年齢だ。

「だって制服姿可愛いですし」

「そんなのあんたの趣味なだけじゃない」

「でもバンビエッタ様だって制服エッチにはまってるじゃないですか」

「そ、それは、あんたがいつもより攻め立てるからでしょっ!？」

「興奮するから仕方ないじゃないですか!」

「逆ギレするんじゃないわよ!」

隊服もいいけど、制服姿のバンビエツタはとにかく可愛いのだ。
我慢できずに学校のトイレや屋上で何回犯したことだか……。

「胎教に悪いから怒らないでください」

「くっ……。それを言われると怒れないじゃないっ……。……」

これも意外だったが、バンビエツタは子供が好きなようで、まだ性別もわかっていないのに、生まれる赤ちゃんの名前を考えている。

「だから怒らなくていいんですよ」

「……わかったわよ」

「代わりに夜になったら可愛がつてあげますから」

「そんなの当たり前じゃない」

バンビエツタの妊娠が判明してからも、俺たちは性に溺れた日々を過ごしていた。

こんな淫乱な両親で子供には申し訳ないが、美男美女のどちらかになるのは間違いないので、許して欲しい。

☆☆☆

「ふーん。これがロリの男ねえ」

翌日。ロリを抱くため、ウエコムンド虚圏に来ていた俺はメノリ・マリアに見定められていた。

「そうよ。こいつがあたしにはまっちゃってさ」

ロリが自慢げに説明する。

「それより来るの遅かったじゃない。一時間の遅刻よ」

「悪い。トラブルがあつて遅れたんだ」

「遅れるなら連絡くらい入れなさいよね！」

頬を膨らませて可愛らしく咎めるロリ。

「遅刻するなら連絡くらい入れるのが常識だろ」

「メノリもそう思うでしょ？ 本当にかいつはダメなのよ」

アランカル破面が常識を語ってるよ。シニールだな。

「悪かったよ」

「ふん、分かればいいのよ」

「男を紹介してもらったことだし、あたしは部屋に戻るよ」

「うん、またあとでねメノリ」

俺を一目見たかっただけのようで、メノリは部屋を後にした。

「…………ごめんなさい、ご主人様!」

直後にロリが土下座をし始めた。

「口調がいつもと違うからびびりしたぞ」

「本当にごめんなさい。メノリの前で雌犬のあたしを見せたくなかったの!」

チンポに屈服したロリは自ら肉便器になることを望み、俺のことをご主人様と呼ぶようになっていた。

どうやらロリは強い男に仕えたり、媚びたりするのが好きなようで、俺は藍染に代わる新たな主となっている。

強い男ならグリムジョーに仕えたらどうかと質問をしたが、片足を千切られたことを思い出し、トラウマで失禁をしていた。

陰で悪口を言ってるが、なるべくグリムジョーに遭遇しないように気をつけてるらしい。

哀れすぎだろロリ……。

「別にいいよ。それより望みの玩具を持ってきたぞ」

「ありがとうございます」

「早速使うか?」

「はい!」

「それじゃその椅子に乗って。そして、しゃがんで股を開いてくれ」
「かしこまりましたあ♡」

俺の命令にロリは嬉々として従い、椅子に乗ると指示通りの体勢を取る。

「ああん…………♡」

ロリのスカートを捲ると性器があらわになった。

俺の命令でロリはノーパンで過ごすようになっていたのだ。

「偉いぞロリ」

「は、はい♡ ご主人様の命令だから当然ですよ♡」

ロリの男に媚びまくりの言葉遣いに、たまに笑いそうになってしま

う。

「入れるぞ」

「んふうわああああああん♡」

用意したデイルドを膣穴へ埋めると、ロリは背筋をゾクリと震わせ、はしたない声を上げた。

「やあああん、入っちゃったあ……♡ はあ、はああんっ♡ いやらしい♡」

妖しい痴情に火照り切った顔をして、根元までずっぽりと刺さるデイルドの眺めにうつとりと見入るロリ。

容赦なく挿入された大きなデイルドのせいで、肉の花弁は限界まで広がり、玩具を咥える膣口は息苦しげにヒクついていた。

「ご主人様あ♡ これでどう虐めてくれるんですかあ?」

「そうだな、このデイルドを手を使わないで、膣圧だけで抜いてみてくれ」

「えっ……! 手を……使わないで?」

「そうだ」

「はい、わかりました♡ ご主人様の命令に従います♡」

ロリは表情に恥じらいを滲ませつつも、俺の命令に素直に従い、強く頷いた。

「くっ……! はううう……んんっ……!」

さっそく下腹部に力を入れ始め、デイルドを膣穴から押し出そうとする。

「はうううんっ、お腹に力を入れてえ……! んくう、むううううッ……!」

精一杯膣穴を窄まらせているようだが、肝心の力の入れ方がわからないように、牝穴に埋まるデイルドはピクリとも動かない。

「こ、これ全然出てこない……! うううううっ……! んむうううう……!」

「頑張れ」

「はううううっ! ふううううううんっ! んんんっ、んむうううう!」

腹の底から搾するように唸り声をあげ、懸命に力を入れて踏ん張っているが、残念ながらその頑張りはなかなか反映されない。

額に汗をじつとりと滲ませ、手足にまで力が入っている様子から、相当真剣にやっているのはわかるのだが、ロリは情けない声を漏らし、呼吸を荒くする。

「す、すみません……はあ、はあ……頑張って、締め付けてるのにい……」

乱れた息を整えながら、ロリは不服そうに自分の股間を覗き込み、悲しげに目を細めて嘆きを漏らす。

「ご主人様あ、どうしたらいいんですかあ……?」

「うーん、中に入っているモノを押し出す動きをすればいいんじゃないか?」

「は、はいっ……! やってみます……!」

俺のアドバイスを受けたロリは唸りながら息み、深々と呑み込んだデイルドを捻り出しにかかる。

整った美貌がますます紅潮していき、形のいい小鼻がヒクヒクとせわしなく動く。

「ほら頑張れ!」

「うううっ、はあっ……! ふうふう……だ、だめですう……出てきません……」

しかし成果は著しくなく、相変わらずデイルドが膣穴から抜ける様子はない。

「早くしないと帰っちゃうぞ」

「そんなあつ!? が、頑張って出しますからお待ちくださいっ……!」

ロリが泣きながら懇願してきた。

「よかったら手伝ってやろうか?」

「いいんですか? お願いします……!」

「よし」

「ひいひいん……? あっ……ああ、ご主人様ああ!」

俺の指が尿道口に触れ、摩擦を始めると、ロリはその刺激に声を上げずらせ、ビクツと身体を引きつらせた。

「ああん、そ、そこ……そこはオシッコの穴です！ そんなところ……触っちゃダメですう……ああ！」

「そうか？ ……ここを刺激されると悦ぶ女もけっこういるぞ」
バンビエツタしか知らないけど。

驚いて声をあげるロリにニヤつきながら、俺はプニプニと柔らかい感触を返してくれる尿道口を、指の腹で愛撫していく。

「ひいいん！ そんな……あう、ご主人様あ、やだ……ああっ……！」
「肉便器のくせに逆らうの？」

「あううう……そ、そんなことないですっ！ ふあああつ、オシッコの穴あ……いっぱい、触ってください……んうううっ……！」

ロリは慌てて身体から力を抜いて身を任せてくるが、まだ不安そうに俺の愛撫をじつと見てくる。

未知の刺激に困惑しつつも、どこか魅入られたような妖しい気配を漂わせるロリの様子を楽しみながら、出口の周辺を円を描くように動きで擦っていく。

「ひああああんっ、あううううっ……はひいいんっ……！ オシッコの穴、ムズムズしちゃうっ！」

ロリは落ち着かない様子で腰をもじもじと動かし始めた。

「感じ始めたか？」

「あうんっつ、だつて……ご主人様の指使いが……すぐく……あひい、エツチ、だからあ……♡」

ロリは単純に弄られてるだけだと思っているが、実は能力で尿を促している。

このままディルドを抜こうとすれば、間違いなく失禁するだろう。

「それじゃ再度自分の力で抜いてみてくれ。尿道をしつかり締めてたぞ」

俺は尿道口から指を離し、ロリの観察に戻る。

「は、はいっ……教えてもらったとおりにやってみます！ んむうううううっ、うううううんっ……！」

ロリは俺の言葉に従順に頷き、腰をプルプルと震わせて下腹部に力

を入れる。

すると、デイルドに動きが見えてきた。

先ほどまではわずかに揺れるだけだったが、少しずつ手前へと押し出されてきたのだ。

「その調子だ」

「は、はいいいっ！ んううううんっ、はうんツ……！」

顔を真っ赤にし、さらに力強く息み続けていく。

ズツポリと膣穴に締められていたデイルドが奥から窄まっていく媚肉に押し出され、少しずつ抜けてくる。

「す、すごい……♡ さっきまで全然ダメだったのに……♡ これならちゃんと出せそう……♡」

確実に成果が見られるとロリは驚いたように声を上げ、嬉しそうに顔を綻ばせる。

「んむううう……ひぐううううっ、んんう……！ ああっ、だめえ、オシッコ……オシッコがあ……！」

能力の効果で膨らむ尿意に苦しみながらも、ロリは懸命に力を入れて、膣洞を奥の方からきつく窄めていく。

「あああん、オマンコ……中、強く、擦れてえ……ひいいん♡ 何だか……ああああ……ゾクゾクしますう……♡」

牝穴が強く締まることで膣壁と玩具の摩擦が強くなり、それによって柔肉の快感も煽られているようで、ロリの唇からは甘い吐息が漏れてきた。

「はあっ、はあ……ああああんっ♡ 擦れるう……♡ 気持ちいいっ♡」

「顔が下品になってきたぞ」

「す、すみませんっ♡ 気持ちよくてえ♡ んはあっ、はああっ、あっ……！」

デイルドが3分の1ほど出てきたところで、ロリは辛そうに呼吸を荒げ、肩を震わせた。

「どうした？」

「はあ、はあ……あふうううん……♡ オマンコ……気持ちよくなっ

て……余計に……おしっこ、漏れちゃいそうですぅ♡」

結合部からは蜂蜜さながらのねっとりとした愛液が漏れだして、玩具に擦られて生じた甘美な刺激に心地よさを覚えているのが見て取れた。

「気持ちいいとおしっこが漏れそうになるのか？」

「は、はひいつ♡ あたしはすぐに失禁しちゃう肉便器ですからぁ♡」

「そんなに気持ちいいのか？」

「そうれすぅ♡ オマンコのお肉でしっかりと絞めつけてるから……ひぁぁぁああんっ♡ いつも以上に入ってるモノを感じちゃってますぅ……♡」

ロリは色っぽく息を吐き、くねくねと腰をくねらせる。

「あ、あのご主人様ぁ♡」

「なんだ？」

「このデイルドをご主人様の赤ん坊だと思っいいですかぁ？」

「……………へ？」

「ご、ご主人様の……赤ん坊だと、思えば……出来そうなんですぅ♡」

このビッチは何を言ってるんだろう。

一瞬呆けてしまったが、俺はすぐに了承した。

「いいぞ」

「ありがとうございますっ♡ 頑張りますっ♡」

俺の許可をもらったロリは再び下腹部に力を入れ始め、牝穴に刺さるデイルドをジリジリと押し出していく。

「くううう……あ、赤ちゃん……ご主人様の……赤ちゃんうう……♡

んむう、ひむううう……♡」

思い込みの力は強いようで、デイルドがなかなかのペースで抜けていく。

「あつ、はうう、んんんんっ♡ あはぁ、ご主人様ぁ……♡ ふは、ひ

ふううん、んはあぁっ♡」

「いいぞロリ」

「くっ……！ はうううんん……！ ああん、雑魚まんこ頑張りますぅうう……！ んふうあぁあぁあぁ……♡」

俺の声援を受けたロリは、紅潮した額に汗を浮かべながらなお息み、膣肉の力だけでデイルドをさらに押し出した。

玩具が半分を過ぎたぐらゐまで抜けると、膣内に溜まった愛液が湧き水のようにこぼれ、椅子を淫らな液体で濡らしていく。

「あふうん、はふううんあ……もう少しなのにい……ああああん、このままだと……漏らしちゃううう……」

いよいよロリは尿意がギリギリのところまできたらしく、先ほどよりさらに息を荒くし、切迫した様子で身体を細かく震わせていく。

「ここまで来たんだから漏らさずに踏ん張れ！」

「ふはああ、ご主人様あ……でも……無理です……おしっこ出るう……！　もう無理ですうう……あひいいい……」

俺の叱咤にロリは切なげにかぶりを振り、切実な声で限界を訴えてくる。

「このまま漏らささないでデイルドを出したら、ご褒美にロリを孕ませてやるぞ」

「……えっ！　は、孕ませてもらえる……っ！」

今までも中出しをしていたが、念のため精液をテレポートで体外に放出させていたのだ。

牝の官能をくすぐる言葉に、ロリはハツとした顔つきになった。

「上手くいったらオチンポ……♡　それも、種付けしてもらえらう

……♡　本物の赤ちゃんが産めるう……♡」

つい孕ませると言ってしまったが、人間と破面アランカルじゃ子供は出来ないだろう。

「わかりましたあ……！　頑張つてオシッコ我慢します♡　そして、ご褒美の種付けしてもらいますうううっ♡」

ロリは俄然やる気を出し、身体を奮い立たせて最後の力を振り絞ってきた。

「んむううううんっ！　ふむうううううっ！　ご褒美い、種付けしてもらおううううっ……！」

「あ、一気にデイルドが出てきたぞ」

「あうううっ、はううっ……もう、出るけどお……ふはあああ……出そ

うなののおおおおお……♡」

「頑張れロリ」

「ひううううっ、もう膀胱がいっぱいれずう……パンパンでっ、はちきれそうっ……んはああああ！」

能力の影響で尿がいつもより多く溜まってきたようで、下腹部を苛む圧迫感に、ロリの声に悲鳴が混ざってくる。

「あひいいいん……！ デイルド、抜けてきてるう！ あぐううっ……！ 膀胱が破れそうっ……！ んぐううううっ、むうううううんっ……！」

力を入れて膣洞を収縮させていくものの、それに連れて尿意も限界寸前まで膨れ上がってきて、ブルブルと腰を震わせ、苦しそうな呻きを漏らし続ける。

しかしながら懸命の頑張りが効いてきたのか、デイルドが膣穴からにゆるにゆると出てきて、今にも抜け落ちそうになってきた。

「ああん、出る！ んはあああああっ！ ご主人様、抜けます！ やつと抜けますううう！」

「ああ、いいぞ」

「でも……でもおっ！ オシッコももう限界いっ！ はひいいいっ……！ 出ちやダメえっ！ 出ないでええええっ！」

寸前まで抜けた玩具が重力に負けて傾いてきたが、膨れきった膀胱は無情にも決壊のときを迎えていた。

「いやあああああ——っ！」

ごごとり、と音を立ててデイルドが椅子に落ちた瞬間、尿道口から黄色の恥水が放物線を描いてほとばしった。

失禁と同時に絶頂したのか、腰の辺りがビクビクと痙攣している。

「ひいいいっ！ ダメえっ！ オシッコだめえええ！ 出ちやう……いっばい出ちやううううう！」

「すごい勢いだな」

「いやああんっ！ ああああっ、止まってえっ！ オシッコ止まってええ！ あああああっ！」

ロリは悲痛な顔で願うものの、絶頂に達したために身体に力が入ら

ないようで、尿を止めることができずにいる。

「あああああつ……オシッコ漏らしちゃったあ……！　ご主人様との約束があ……！」

ロリは放尿を我慢できなかったことを嘆きながら派手に小便を漏らし続け、床に大きく恥ずかしい水たまりを作っていた。

ようやく尿の放出が止まった頃には、床は黄色い液体が大きく広がって酷い有様になり、鼻にツンとくるアンモニア臭が漂ってきた。

「ご主人様の……命令、守れなかったあ……これじゃ……孕ませてもられない……」

アクメの余韻から抜け出したロリは、しでかしてしまった不始末に哀れなほどしよげかえる。

「しようがないな。ロリ、こっちに来い」

「ああうっ……はい……」

俺はベッドに移動すると、ズボンのファスナーを下げて勃起ペニスを露出させる。

「ロリが上に乗って動いてくれ。俺をイカせられたら、中だししたままにしてやる」

「あああ……♡　ラストチャンスですねぇ……♡　わ、わかりましたあ……♡」

ロリは愛らしい顔をたちまち蕩けさせて素直に返事をする。

「そ、それじゃあ……♡　はあ、はあ、はあ……♡　オチンポ、入れさせていただきますう♡」

そうしてロリは、はしたなく息を荒げながら、勃起したペニスを膣口に宛がい、そのままゆっくりと腰を沈めていった。

「んふうわあああああ♡」

たっぷり沸かせた愛液によって受け入れ準備万端の牝穴に、肉棒が根元までズツポリと埋まると、ロリははしたなく歓喜の声をあげた。

「はひいいい……オチンポきたあ♡　や、やっぱりご主人様のオチンポが一番気持ちいいれすうう♡」

「そりやどうも。しっかり動いてくれよ」

「は、はい……♡　あたしから動きますっ……♡　オマンコでいつぱ

いオチンポをしごいてご主人様を気持ちよくさせていただきますう
♡」

俺に促され、ロリは白桃さながらのお尻を上下へと跳ね躍らせて、
肉棒へ奉仕を開始した。

こちらに尻を突き出す体勢になっているため、ロリのヒップは実物
以上に大きく感じられ、淫猥な眺めがより強調されている。

「ひはあああつ♡ オマンコ喜んでますう♡ 気持ちいい♡ あ
ひいいん♡」

「なんだ、ロリ。ずいぶん積極的だな」

「はいいい♡ んあああ♡ 寂しかったところにオチンポもらえ
て、オマンコが喜んでるんですう♡」

すっかり膣穴を埋められる心地に夢中になって、ロリは恥ずかしげ
もなく卑猥な告白をしながら、なおもお尻をバウンドさせて快楽を貪
る。

「だ、だからあ……一生懸命ご奉仕させてくださあい♡ 種付けして
もらえるよう頑張ります♡」

媚びた態度で宣言をするなり、ロリは唸り声をあげながら腰をブ
ルツと震わせ、下腹部に力を入れ始めた。

「はふうふうん♡ あたしのつ、ふうああ♡ 肉便器のおつ♡
オマンコの肉をいっぱい感じてくださあい♡ んんん♡、ううん♡
♡」

膣奥の窄まりが波打つような動きで徐々に入口まで移動してきて、
根元から亀頭まで肉棒が余さず締めあげられる。

「くっ、凄いな……!」

「んはあああ♡ あひゆううう♡ ご主人様あ……気持ちいいで
すかあ?」

「ああ、気持ちいいぞ」

いつときも休むことなく動き、ペニスを締めあげては解放する膣肉
の快感に、腰が細かく痙攣して止まらなくなってくる。

「あん、嬉しい♡ 褒めてもらえたあ……♡ ひいん、それに……あた
しも……感じちゃって……あああ♡」

ロリが喘ぎを多く漏らし、甘く熱っぽくなる吐息に官能の色を滲ませる。

「あつ、あつ、あんっ♡ ご主人様あ、もつと気持ちよくなつてくださひゃいっ♡」

「なってるぞ」

「むはああああつ♡ オマンコでオチンポなぞの気持ちいいれすっ♡ ひああああんっ♡」

快感をはしたなく口にしながら、俺も感じさせようと必死になるロリの熱心な腰振りに、官能が煽られ、より強い刺激が欲しくなった。

沸々と湧き上がる獣欲に突き動かされ、俺はロリの尻を掴み、自ら腰を振って堀削を行う。

「はひひひひひひひひひひっ♡」

突然膣奥を急襲した刺激に、ロリはたまらず声をあげ、反らした背筋をビクビクと痙攣させた。

「やああんっ♡ いきなりこんなにあかれましたらあつ♡ んはあああつ♡ 気持ちよくなりすぎひゃうううう♡」

「いい子のロリにご褒美だ」

「はひひひひひひひ♡ ご褒美っ♡ ありがとうごひゃいますっ♡ んおとおおっ♡」

ロリは蕩けた声で応えつつも、強くなる快感に甘えることなく、デイルドで覚えた締め付けを肉棒に見舞い続ける。

火照る筋肉が波打つ動きはペニスの芯にまで官能を伝え、肉竿が窮屈にしごかれる気持ちよさに、つい熱い息を漏らしてしまう。

「あひひひひひひんっ♡ オチンポビクビク震えてますうっ♡ もつとしごきますっ♡ んむううううっ♡」

「俺ももつと気持ちよくしてやるー」

「ひゃああああつ♡ オマンコ感じすぎてえっ♡ ふあつあああつ♡ ああつ、これっ、きひゃうう……♡ きひゃいひゅううっ♡」

ロリはブルツと全身を震わせ、膣穴をひととき強く窄らせてきた。どうやら絶頂が近いようで、膣穴を強く締めてのしごきはかなりの

快感を生んでいるようだ。

「イキたいならイッていいぞ！」

「ご主人様あああ♡ あたし、イキますっ♡ オチンポしごいてイッひやいますっ♡」

俺はロリを絶頂に導くべく、ひときわ強く腰を突き上げ、深々と牝穴を貫いた。

「んっふあああああッ♡ 深いッ♡ オチンポおおッ♡ おひいイ

イイイッ♡ イツクっ♡ イクうううッ♡」

「イッちまえー！」

「きやひいひいひいひいん♡」

膣奥への荒々しい一撃が引き金となって、ロリは一気に狂おしい絶頂へと上り詰め、けたたましい嬌声を響かせた。

壮絶なアクメが全身を駆け巡っているようで、腰をくなくさせて淫らに悶え喘ぐ。

「あひいひい♡ イキましたあ♡ 雑魚まんこイッひやいましたあ♡

ひいあああああっ♡ 気持ちいいの止まらにやいれすううう♡」

「声を聞けばわかるよ！」

「おほおおおっ♡ もっとオチンポ締めますッ♡ んはああああ♡

アクメオマンコ、オチンポ感じまくってまひゆううっ♡」

ロリの容赦ない締め付けで、腰が抜けそうになるほどの強烈な快感が伝わってきた。

「このまま射精すぞー！」

「あひいっ、中だしいっ♡ 種付けしてもらえう♡ ひいひいん♡

あひいひいんっ♡ おおん、ご主人様ああ♡」

度を越えた快樂を味わい、俺は腰の中心に熱が集まるのを感じながら、いっそう激しい突き上げで絶頂中のロリを責め続ける。

「ひはあああッ♡ またイクう♡ 漏らしちゃう♡ はひいひいっ

♡ イキながらオシッコ噴いちやいまひゆううううう♡」

排泄器官を膣肉越しに突いてほじり上げ、さらなる絶頂へと導くための抽送を見舞うと、ロリはかぶりを振って、腰をガクガクと暴れさせる。

ますますうねって締まりを強くする膣穴のもてなしに、ペニスは

いっそう激しい快感を与えられ、俺は下腹部から広がる熱い感覚に興奮を高めていく。

「はひいひいんツ♡ あっ、あああんツ♡ オチンポツ膨らんでますううツ♡ オマンコの中っ、グイグイ広げてええツ♡」

「ああ、そろそろイキそうだ!」

「あひやああああ♡ ひいひいんっ、ご主人様ああ♡ 出してえっ♡ 熱い精液、たっぷり出してえええ♡」

快感が強まることでより窄まる媚肉に肉棒を絞められ、腰に溜まった射精感が解放を求めて脈を打ち始めた。

「はひいひいひいっ♡ オチンポおっ、刺さってくるう!? これイクラッ♡ イツひやうっ、オシッコ出るう♡ ひあああああっ♡ んはあああああっ♡」

「よし、射精るぞロリ!」

「はっひやあああああッ♡」

尿がパンパンに溜まった膀胱を亀頭で突かれて、怒涛の勢いで襲いかかる官能と排泄欲に呑み込まれ、ロリは腰を弾ませながら、勢いよく小便を噴いて達した。

ロリのアクメと同時に俺も絶頂に達し、膣内の最奥へ、熱い子種汁をいっぱいに叩きつけた。

「はひいひい♡ んひいひいひいひい♡ 子宮にザーメン届いてるウウ♡」

「キツ過ぎだろ……!」

「あひいひいひいんっ♡ オシッコとまりやない♡ んはあああああっ♡ 閉じなくなっひやたあ♡ イクうう♡ いくうううう♡」

ロリは膣内射精の快楽に歓喜の声をあげ、さらなる子種汁を求めてグリグリと腰を動かし、膣奥に亀頭を押しつけながら竿の根元を締めてくる。

「あああああああっ♡ 子宮どろどろお♡ この濃さっ、絶対孕んじやいますう♡ んはあああああっ♡」

子宮を満たす精液の感触に牝の本能を剥き出しにし、ロリは派手に腰を痙攣させ、小便をはしたなく四方へ噴き散らかしていく。

「もつと精液くだひやああい♡ お漏らしもしちやう雑魚マンコ、妊娠しますからあああツ♡ ご主人様の立派な赤ちやんツ♡ ぜったいに孕みますからあああツ♡」

「ああー、これでしつかり孕んじまえー!」

「おつひいいいいいいいいいっ♡」

最後の一撃をくらわすと、ロリは見るも無残なアへ顔で絶叫した。

「ひはああ……♡ ああん……♡ はあ、はあ、はあ……♡ んふう……♡」

子宮を子種汁で埋めつくほどの射精が終わる頃、ロリもようやく絶頂から抜けたようで、幸せそうにうっとり吐息した。

「ひああああ……幸せ……幸せえええ♡ ザーメンたくさん……出ひてもらえまひたあ……♡」

アクメと種付けの快楽を同時に味わったロリは、今にも蕩けそうな表情で、膣内に溜まる精液の感触に嬉々とする。

「こんな小便を漏らすんじや、セックスのたびに掃除が大変だな」

「はうう……♡ す、すみまへえん……♡」

ロリはエロチックな高揚感に染まりきった妖艶な牝顔で、恥ずかしそうに呟いた。

☆☆☆

「んお、お、おおおっ♡ イッグうううう♡ まだイグウウウウツウ♡」

虚圏ウエコムンデに来て3時間が経過した。

俺はいまだに肉便器に成り下がったロリを犯し続けていた。

「おひいいいいいんっ♡ ご主人様あ、イッてますっ! あたひい、イってまひやうううう♡」

「そんなの知ってるよー!」

「も、もう止めてくだひやいいいいいっ! あたひの雑魚まんこじや、これ以上耐えられませえんっ!」

俺が虚圏ウエコムンデに来るのは週に一回なので、毎回ロリがギブアップする

まで抱いている。

ロリは自ら肉便器に志願したくせに、数時間経つと必ず止めるよう懇願してくる。

「ロリのマンコなら大丈夫だ！ 頑張れ！」

「無理れずうゝううううっ！ 子宮もオマンコも壊れひやいますううううっ！」

ツインテールを手綱のように掴まれ、立ちバックで犯されている口リが絶叫する。

「俺の子供孕みたいんだろ？ だったら我慢しろ！」

「我慢できないれひゆうううっ！ もう限界れずうううううっ！」

「今日は何発でも付き合えると言ったただろ！」

「ひぎゅっ！ ひいいいいいっ!? ち、調子に乗りましたああああっ！」

あたし、調子に乗っちゃいましたああああっ！」

歯をガチガチと震わせながら嘆くロリ。

バンビエツタなら10発までは付き合ってくれるのに、やはり格の違いだろうか。

「もう許してくださいひやいいいいいっ！ ひんじやうっ！ ひんじやいますからああああっ！」

「死んだら生き返らしてやるから安心しろ！」

「そんなあつ!? んあああああゝあゝッ！ もうダメえっ！ もうダメえええええっ！」

ツインテールから僅かに揺れている乳房に両手を移動させ、さらに快樂を与える。

「お、おっぱいひいいいっ!? ひああああああっ！ しぬしぬしぬしぬううううっ！」

「ロリ、頑張れ！ これじゃ肉便器以下だぞ？」

「いいでずううう！ 肉便器以下でいいでずからあつ！ もうやめでえええええっ！」

「おいおい肉便器以下って認めちゃうのかよ？」

「はひいいいっ！ 認めまざうっ！ ロリ・アイヴァーンは肉便器以下れずうううううっ！」

俺の肉棒のせいでどんどん成り下がっていくロリ。

セックスが終わる頃には、完全に意識を失っており、オナホール同然の状態になっていた。

ちなみに前回もロリは最後に気を失っている。

ロリは学習能力がないようで、抱く前は最後まで付き合おうと宣言するが、最後は意識を失うのがお決まりになっている、

結局、今日も気絶したロリを放置して俺は現世に帰った。

俺の浮気に気づいたバンビエッタが虚^{ウエコムンド}圈に乗り込んでロリを半殺しにしてしまうが、それはまだ先の話である。

バンビちゃんは孕んでもやりたい 前編

妊娠してからも高校に通っていたバンビエツタだが、いよいよお腹が目立ってきたので退学することになった。滅却師の活動も控えており、基本は自宅でくつろいでいる。

たまに運動という名目で虚^{ウエコムン}圈に乗り込んで、俺の愛人であるロリをボコボコにしているようで、毎回血まみれで現世に帰ってくる。

ここ最近はこの流れがお決まりになっている。

- ①バンビエツタとロリが口論する
 - ②ロリがバンビエツタに殴り殺しにされる
 - ③バンビエツタが笑顔で俺に報告してくる
 - ④俺の能力でロリを全回復させる
 - ⑤ロリが号泣しながら俺に愚痴を吐く
 - ⑥ロリが懲りずにバンビエツタに喧嘩を売る
- 原作で片足を千切られたロリだったが、バンビエツタにも全身の骨を折られたり、欠損させられたり、大変悲惨な目にあっている。俺の能力で回復させることができるので問題ないが、なぜ一思いに殺さないのかバンビエツタに問うたことがある。

バンビエツタは笑顔でこう答えた。

「死なせたら苦痛も絶望も味わえなくなるじゃない」

子供を宿して少しは丸くなったと思っただが、残虐な性格は直らないようだ。

そんなバンビエツタだが、ジジたちには復讐するつもりはない。

なぜなら殺されそうになったトラウマで、ジジの名前を出すだけで、涙目で震えてしまうからだ。

自分より弱い相手にしかマウントを取れない俺の嫁が可愛すぎる。

「なんで退学したのに学校に来なくちゃならないのよ」

俺とバンビエツタは学校のプールに忍び込んでいた。

「水泳って妊婦にとつていい運動になるみたいだし」

「水泳させるつもりないじゃない。どうせスクール水着のあたしを犯したいだけでしょ？」

お腹を大きくしたバンビエツタだが、俺の要望でスクール水着を着用している。

妊婦のスクール水着姿は、これ以上にならないほど卑猥に見えてしまう。

「そうですね。でもバンビエツタ様も久しぶりにプールでエッチしたって言ってたじゃないですか」

「そうだけど」

バンビエツタが退学するまでの間、学校で何度も何度も交わりあってきた。

放課後の教室、トイレ、保健室、体育館の倉庫、屋上など様々な場所のでバンビエツタを抱いた。

「子供産んでからでもいいじゃない」

「妊婦のバンビエツタ様を学校で犯したいんですよ」

「変態」

「それはバンビエツタ様でしょ。ほら入って入って」

「……わかったわよ」

されるがままに水に浸かるバンビエツタ。

俺はプールサイドに腰を下ろし、足だけ水に浸からせる。

「それでどうすればいいのよ?」

「こうです」

「え? きゃあっ!?!」

バンビエツタの水着の胸部分に穴を開け、いきり立った肉棒を潜り込ませていく。

「ちよつと水着がもつたいじゃない!」

「あとで直すから大丈夫ですよ」

バンビエツタも所帯じみてきたもんだ。

「それより……何をすればいいかわかりますよね?」

「わ、わかるわよ。……だから怖い言い方しないでよ……」

少しだけ涙を浮かべたバンビエツタが、乳房で肉竿をむにゅっと包み込む。

「はあ、はふうう……んっ、お汁出てきてる……れろっ、ちゆるうっ」

赤い舌を覗かせ、舌腹を押しつけながら、ペロりと先走り汁を舐め上げる。

肉竿をしつかりと乳肉で挟みながら、俺の股間に上半身を押しつけ、バンビエツタが上目遣いに見つめてくる。

妊娠した今でも、肉棒を見るとバンビエツタは艶めかしい顔になる。

「んちゅっ、ちゅぱっ……レロツ、レロツ」

紅潮した顔を俺に向けたまま、舌の動きを見せつけ、いやらしい音を響かせ愚息を舐め回す。

エラ首に舌が巻きつき、擦ってくる刺激に、乳肉の中で肉竿が跳ねっぱなしになる。

「暴れちゃだめえ♡んくっ、んっ♡」

「うぐっ!？」

自ら乳肉を寄せ合わせ、ギュツと肉胴を圧迫してくるバンビエツタ。

唾液と汗、そして先走り汁が混じり合った胸の谷間は、ヌルヌルと熱く柔らかい感触を肉幹に伝えてくる。

「ふうっ、はふう……元氣よすぎい……ちゅうっ、れろれろおっ♡」

水着を着たままのバンビエツタにパイズリされるシチュエーションに興奮は増していき、肉竿はいきり立ったままになる。

青筋を押し潰すように、ギュツと乳肉を押しつけ、左右の乳房を交互に動かし始めて、ヌチュヌチュと音を立てながら、快感が肉胴を這いあがってきた。

「ふひゅう……れろっ、ちゅっ♡ ああ、悦んでるう……興奮しまくっへりゅじやない♡」

熱く官能の色を帯びた息が先端に吹きかけられる。

先走り汁を器用に掬い取り、口の中に舌を戻すと、ゴクリと喉を鳴らして飲み下す。

先走り汁だけでも発情しているようで、バンビエツタの顔に恍惚の笑みが浮かぶ。

「バンビエツタ様、妊娠してからますますエロくなってますね」

赤ちゃんを孕んでからというもの、バンビエツタはますます妖艶になつていく。

「んちゅっ、くちゅっ♡ あんたが悦んでくれるからあ……いつぱいあんたに悦んでもらいたいからあ……れろおれろお♡」

「俺の為ですか？」

「そうよお……ちゅっ、ぺちやつ♡ んちゅううっ♡」
「うおっ！」

激しく押しつけられるザラザラとした舌の感触に、肉冠が唾液まみれになつていく。

「俺も気持ちよくしてあげますね」

バンビエツタに負けじと、その柔乳に手を伸ばし水着の上から指を食い込ませる。

「くひゅうっ!? ひゃあっ♡ あふうう、あんっ、はああっ♡」

乳肉を強く刺激される快感に、バンビエツタがもどかしそうに身をくねらせた。

「ああ、べろっ♡ ふあ、舐めてるだけじゃ……我慢できないっ！
ちゅっ♡ はむっ！ んむううううっ♡」

舌なめずりをした後、バンビエツタが肉傘に軽く口づけをして、そのまま先端を咥えこんでいく。

先っぽに伝わってくる生温かい頬肉の感触。

ぷっくりとした唇が、カリ首に貼りつき、レロレロと舌尖が鈴口をくすぐってくる。

「やばっ、気持ちいいっ！」

悦びの声を上げながら、またギュツと強く乳肉を掴む。

指が喰い込み、歪に形を変える乳房。

「むふうっ、ちゅっ……ちゅぷううっ……んくうっ、ちゅぶぶっ♡」

バンビエツタは乳肉を揉みしだかれる快感に眉根を寄せながらも、唇を左右に動かし、エラ首を擦ってくる。

唇の端から唾液が垂れ落ち、肉胴を伝わって乳肉を濡らしていく。

「ふぶっ、ぐっ、ぢゅぶっ、ずずっ、じゅるるっ、ずりゆりゆっ♡」

カリ首を唇でまくるあげるように激しく上下に顔を揺らし、徹底的

に肉傘を刺激してくる。

痺れるような快感に腰が震え、自然と俺の息遣いが荒くなる。

そんな俺の反応を見たバンビエツタが嬉しそうに瞳を濡らすと、カ
リ首を攻めたまま肉胴を乳房でしごき上げ始めた。

「くちゅっ、んくっ♡ ふうっ、んふっ♡ じゅぶっ、チュズズツ、じゅ
るるるっ♡」

亀頭に唾液をまぶしながら、肉竿全体を刺激する。

疼きと快感が肉棒を包み込み、先端に熱い塊が集まり始める。

「悦んでりゅう……チンポお、ビクビクしてっ、んぷっ、ずびゅっ、ん
ぼおっ♡」

「すごく気持ちいいですから」

「まらまらあ……もっど気持ちよくしゆるからあ♡ ぢゅぶ
ぶううううっ♡」

俺をもっと悦ばせたいと、バンビエツタが容赦なくカリ首を攻め立
ててくる。

「それじゃ俺ももっど気持ちよくしてあげますね」

水着越しの柔乳を持ち上げて勃起した乳房へと指を動かしていく。

完全に勃起している二つの突起物を両手で摘まむ。

「くひいんっ!!? ふひゅうううっ、へはあっ♡ くうっ、はひっ!!?
んひいんっ♡」

敏感な場所への刺激に、きゅっど唇を窄めたまま、バンビエツタが
嬌声を漏らす。

硬くしこった乳房を指で挟んだまま、その弾力を確かめるように摘
まむ力を強くする。

「くひっ!!? しょんなに強くしひやらっ……潰れひやうっ!!」

「これくらいじゃ潰れないですよ」

「んむむウツ!!? ちゅぱっ、ずずっ、ちゅむうっ……クチュクチュ……
んくっ、ふうっ、くふうウンツ♡」

親指と人差し指の間で、コロコロと乳房を転がし、指の腹を擦り付
け、刺激を与えていくにつれ、バンビエツタの震えが増していく。

「はうっ、くうっ……んあ……はううっ……らめえ♡ か、感じすぎ

ひやうううっ♡」

啜え込んでいた亀頭を吐き出し、嬌声を放ちそうになる。

しかし、快楽に溺れながらも、奉仕の気持ちが強くなつていくように、亀頭を啜え直し、刺激を強くしていく。

「くふうっ、んんっ♡ い、今はあ……あたひがイカしえる番なんだからあっ……!」

「イカせられます?」

「あたひが気持ちよくしへえ、絶対チンポイカしえる……ずっ、ぢゅずずずずっ♡」

溢れ出る先走り汁を吸いたてながら、一心不乱に顔を上下に揺らす。

乳肉で挟み込んだ肉胴を圧迫し、しごきながら俺を射精へと導こうとするバンビエツタ。

「れろれろっ……ちゅぱっ、んぶっ、んぶうっ♡ くっ、んふうっ、くふうう♡」

「それじゃどっちが先にイカせるか勝負しましょうか」

乳首で感じるバンビエツタをイカせるべく、俺もまた指の腹に力を込める。

「くひインッ!? はっ、はひゅううっ……んぐっ……負けなひい……っ!」

プールに浸かったままの腰を跳ねさせ、お尻をもどかしそうに振り動かしながら、バンビエツタは舌先を左右に激しく動かす。

バシヤバシヤと水音が立つのを聞きながら、喜悦に身を委ねる。

プルプルと高速で肉傘を刺激されると、先走り汁に精液が混じり始めしていく。

「んくっ、ずずずっ……ちゆるるうっ♡ ザーメンの味がしてきたあ♡ ずずっ♡ んぢゅっ♡ ちゅくうっ♡」

射精が近づいてきていることを知ると、止めを刺すように口技が激しくなる。

乳肉が燃え立つように熱くなり、その熱に肉竿が震えっぱなしになる。

「くちゅっ、ずぶぶっ♡ あ、あたひが……しやきにイカしえるうっ！」
「さすがに負けそうですね。ママのオツパイマンコと口マンコ凄いですよ」

「ひやえっ!?! ママって言われひやあ! くうっ、くひゅウウツ♡」
「だってもうすぐママでしょ?」

「あ、あたひママあっ♡ もうすぐママになりゆうっ♡ だから……
パパの搾りたてミルク、ママの口マンコに飲ましえへえ♡」

母親になるのに、こんな破廉恥なことに溺れてしまっている。

その背徳感がたまらないようで、バンビエツタの興奮が最高潮を迎えようとしていた。

ぎゅむつと形を変えるほどに強く乳肉で圧迫しながら、下品な音を立てて亀頭を吸い上げる。

「ジュゾゾツ♡ ずりゆううっ♡ んぐっ♡ れろおっ♡ れろろろおおっ♡」

先端に集まっている熱い塊を吸い上げるような強烈な吸引に、これ以上我慢できなくなる。

「バンビエツタ様、イキますよ!」

「あ、あたひの勝ちっ! さ、先にイカしえひやあ……!」

「それはどうですかね?」

「あひゆうっ!?! ひっ、ふひィイツ♡ へあっ!?! はへええっ♡」

キュツと乳首を掴まんだ指に力を込める。

「射精でますっ!」

口内に精液を解き放ちながら、乳首を力強く引っ張り上げる。

「ぐぶぶううううううううっ♡」

乳肉を持ち上げるように強く乳首を引っ張られる快感に、バンビエツタの意識が突起へと向かってしまう。

その隙を突くように、口内へと精液の濁流が流れ込む。

「グブブツ!?! ふぐうっ……で、出ひやあ!?! んぐっ!?! ぐぶうっ!?!」

ビチビチと喉奥を打つ精液に、バンビエツタの腰が何度も水中で跳

ねる。

「バンビエツタ様、イキました?」

「イツたあ……♡ ふぐっ、ぐぷううっ、口マンコと乳首れえ……イツひゃあ♡」

強烈な雄臭を放つ精液が口内に溜め込まれていくにつれ、バンビエツタの頬が膨らんでいく。

「むうっ……ふっ、んぐっ、じゅるるっ、くふうっ……くひゅうんっ♡」

押し寄せてくる喜悦に溺れてしまうバンビエツタが、唇の端から精液を垂れ流す。

「たっぷりザーメン飲んでくださいね」

「の、飲むう……♡ パパがいつふあい出ひひゃあ、搾りたてチンポ汁うっ♡」

「まだパパって言うてるよ」

「ぐびっ♡ ぐびっ♡ グビビビビッ♡」

バンビエツタは唇を窄めると、喉を鳴らしながら精液を飲み下し始めた。

食道にへばりつきながら垂れ落ちていく子種汁。

ドロドロの濃厚な精液を貪り飲む快感に、バンビエツタがうっとり顔と顔を綻ばせる。

「おいひい♡ ふうっ、ぐっ、ぢゅるるるっ、おいひいっ♡」

「まだまだ出ますよ」

飲んでも飲んでも追っつかない程に大量の精液は飛び出し続ける。硬く勃起した乳首を引っ張り、バンビエツタに喜悦を与えながら、口の中を精液タンクとへ変えていく。

「くひゅうッ!? んぶっ、イクう……乳首れイクうっ♡ ザーメン飲みながらイツひゃうううっ♡」

精飲の悦びと乳首を引っ張られる快感に、何度も絶頂するバンビエツタ。

唇でしっかり挟み込まれたまま震える肉傘が、少しずつ射精の勢いを緩め始める。

「んくっ♡ぐっ、じゅるるるっ……ぐくっ、ごくんっ♡ふううっ、むふウウウツ……♡」

喉を鳴らす音をゆつくりとしたものに変えていくと、バンビエツタが恍惚の瞳で俺を見つめてきた。

「ングッ、ングッ♡ズズズツ、じゅるっ、じゅるるるるっ♡」

長い射精が終わったが、まだバンビエツタは亀頭を咥えたまま、離そうとしない。

水面に髪を揺らし、水中に蜜汁を垂らしながら、尿道に残った精液の残滓を吸い上げる。

「ちゅくっ、ずずっ……♡れんぶう……吸うう♡れんぶ飲むう……ちゅぶぶぶぶうっ♡」

鈴口を舌先でくすぐられる度に、また新たな快感が込み上げてくる。

腰が抜けたような快感に、乳首を引つ張る力を緩めてしまう。

「はふううっ……ちゅぱっ、ちゅぱあ♡あはあ、チンポ勃っひやままあ……♡」

「そりやこれだけ気持ちよくされたら勃ったままになりますよ」

奉仕を褒められ妖艶な笑みを浮かべるバンビエツタ。

「そろそろ下の口に欲しくなってきましたせん？」

「欲ひい……でも、まららめえ……精液残っへりゆっ♡じえんぶ吸い取っへからあっ♡」

肉棒を動かすと、バンビエツタが乳肉を寄せ合わせ唇に力を込める。

「れんぶっ、飲みゆうっ♡ずずう——っ♡」
「おあっ!？」

残りカスまでしつかりと全部飲むとばかりに、バンビエツタが頬をへこませ唇を尖らせる。

「ふうっ、くひゆう……んくっ♡ごきゅっ♡ごきゅウウウツ♡」

唾液を精液を混じらせながら、バンビエツタが喉を鳴らしてすべてを飲み下した。

だが俺の肉棒は、バンビエツタの強烈な奉仕により、いきり立った

はまだ。

淫乱の化身となった妊婦の牝豚にぶち込みたい。
そんなどす黒い欲望に駆られた俺は

バンビちゃんは孕んでもやりたい 後編

どす黒い欲望に駆られた俺は、プールの中からバンビエツタを引き上げた。

「ふえっ……っ？」

水着の上半身部分をずらし、確実に成長した乳房を飛び出させる。

「ふひっ!? へあっ、んふうううっ、はうっ、あひやああんっ♡」

乳肉をギュツと掴むと同時に、バンビエツタが甘い声をあげる。

「妊娠マンコに入れますよ」

膝立ちになったバンビエツタの背後から、赤く染まった耳元で囁きかける。

「ああ、入れてえ♡ チンポっ……早く突っ込んでえ♡」

自らお尻を突き出しながら、バンビエツタが俺を求めてくる。

熱く潤った膣内へと、肉傘をめり込ませる。

「あああああっあ……ひっ、んはあっ♡ は、入ってきたあ……♡」

悦びの声が、濡れた唇から放たれる。

「妊娠してもキツキツですね」

「ふあっ、んふうううっ、あんたのチンポが大きすぎるのよ♡ ひあっ!?

はひイインツ♡」

「もうすぐ全部入りますよ」

「わ、わかるっ……ああ、マンコの中あっ……みっちり埋まるっ♡

くっ、くひいっ♡」

「どうですっ？」

「はあっ、あっ、あ、当たったあ♡ 赤ちゃん、驚いちやうわよ……♡

♡」

コツンツと子宮の壁に龟头が当たると、その衝撃にブルツとバンビエツタが大きく身体を震わせた。

肉棒がズッポリと根元まで埋め込まれ、深くバンビエツタと繋がる。

肉竿全体を包み込む熱く蕩けた媚肉の感触に、喜悦の汁が龟头から零れ出る。

「はあっ、はふう……ああ、マンコお……すっかり馴染んでる……♡」

奥深く突き込まれたまま、動きを止めた肉竿をじつくりと味わうバンビエツタが、蕩けた甘い声で喘ぐ。

「何百回もやりまくりましたからね」

「そうよお♡ マンコおっ、チンポ穴にされちゃうくらいやりまくったあ♡」

「バンビエツタ様の身体のことならなんでも知ってますよ。こうすると気持ちいいでしょ?」

膣穴を満たされた悦びに浸るバンビエツタの意識を、乳房に向けるべく、指先に力を込める。

「ひゃうっ、はあんっ♡ ああ、いいっ……気持ちいいっ♡」

乳肉への柔らかな刺激に、バンビエツタが白い肌をくねらせ汗の玉を滴らせる。

乳肉を揉みしだかれる快感に反応するように、ピクツ、ピクツと締まってくる膣穴。

「おっぱいも前より大きくなりましたよね」

形良いポリユームたつぷりの乳房を揉みしだきながら、バンビエツタに囁きかける。

「はうっ、うあ……もうすぐ、ママになるからあ……♡ ひっ、んひいっ♡」

「妊婦になった方がセックス好きになってますよね?」

ガッツリと肉棒を咥え込み喜びを貪るバンビエツタにからかうように声をかける。

「そ、それは……あたしがっ、あんたのチンポ穴だからっ♡ ひっ、いんっ、くひいっ♡」

埋め込まれるだけでは我慢できなくなったのか、自らお尻を押しつけながら、バンビエツタが少しずつ喘ぎを大きくしていく。

「んあっ、くひっ、んひい……ああ、チンポっ……突いてえ♡ 入れるだけじゃ……物足りない……!」

「エツチな母親ですね」

「あ、あたしを……こんなにさせたの、あなたのせいっ……♡ いいから動いてっ……またあたしをハメ殺してえっ♡」

「わかりましたよー!」

答えると同時に、緩やかに腰を振り動かしていく。

「くひっ!? あっ、はあっ、はうっ……あああっ……あふううっ♡」

乳房と膣穴に同時に与えられる快感に、バンビエツタは悦びに息を荒げ身悶える。

「ふひっ!? な、なんでえ……母乳、出てりゆうっ!?」

バンビエツタに黙って俺の能力で母乳が出るようにしておいた。

考えればすぐにわかることだが、快樂中毒になっているバンビエツタはそこまで頭が回らないようで、困惑している。

「気持ちよすぎておっぱい出しちゃったんですか?」

「はあっ、ち、違うっ……! あんたがっ、揉むむからあ……あひっ、

ふうっ、ひやうううっ♡」

「もっと出してあげますね」

「いひっ!? ああっ、らめえっ……!」

垂れ出る母乳に興奮しながら、揉みしだく手の動きに力を込める。

刺激が強くなれば強くなるほど、バンビエツタの悦びの声は大きくなっていく。

「へうっ、くふううっ、ああ、どんどん出ちやう……赤ちゃんのおっぱいなのに♡」

「まだ産まれてないですから俺のモノですよ」

それを教え込むように、指先に力を込めた。

「くひゅウツ!? ああ、今はまだあ……あなたのモノお……♡」

俺の言葉を肯定しながら、バンビエツタがコクコクと何度も頷く。

溢れ出る母乳を指に絡め、乳首へと塗りたくる。

ビンビンに勃起したピンク色の突起をこねまわし、押し潰すように刺激を与えると、お返しとばかりに媚肉で肉傘をしごき上げてきた。

「くっ……!」

「はあっ、ふうっ……あ、あたひも……チンポからミルク出させるうっ♡」

肉壁を蠢かせ圧迫を加えながら、バンビエツタが形良いお尻を突き出してくる。

赤ん坊の眠る子宮の膜を突かれる悦びに、たらたらと母乳を垂らしながら感じまくるバンビエツタ。

「んはあ、ひっ、んにい……ああ、母乳出すのっ、気持ちひいいっ♡

ひっ、ひインッ♡」

「そんな気持ちいいですか？」

「気持ちいいいいっ♡ 母乳出るだけでっ……感じひやうっ♡」

「それじゃもつと出させますよー！」

乳首から垂れ流れる母乳の量をさらに増やすべく、ギュツと乳肉を搾っていく。

「あっ♡ あああっ♡ ま、また出ひやうう……母乳噴くうううっ♡」

悦びの言葉通りに、乳白色の汁は止めどなくなったらたらと溢れ出てくる。

「おっぱい垂らしながらのバンビエツタ様とするのやばいですね」

母親になりつつあるバンビエツタを、淫乱な雌へと変えていく快感。

一度屈服させたバンビエツタを、また改めて屈服させていくような興奮に、膣穴の中で肉棒がこれでもかというほどに暴れている。

「強くっ……もつと揉んでえ♡ はあ、ああっ……おっぱいギュウウツて搾ってえ……♡」

「了解です」

乳肉の中に指をめり込ませる。

「そうっ、そう♡ 搾ってえ♡ もつとミルク、出ひやしえてえ♡ はあっ、あふううんっ♡」

まだ刺激が足りないとばかりに頭を振るバンビエツタ。

「これでどうですっ？」

「くふううっ!? はっ、はひイイツ♡ ふうっ、んあっ、はひひインッ♡」

ズンツと腰を突き出しながら、乱暴に乳肉を搾りたてる。

「そ、それえっ……今のおっ♡ 揉まれながら突かれるの……いいっ♡」

蕩けきった声とともに、隆起した乳首からビュルツ、ビュルツと母乳が飛び出してくる。

「あはあっ♡ で、出たあ……ひいつ!? 母乳出たあ……いひいつ♡」

「どんどん突きますよ」

大きく腰をグラインドさせ、媚肉をエラ首でまくり上げるように擦りまくる。

熱く蕩けた膣穴をほぐされていく快感と、母乳を搾り取られていく快感。

押し寄せる快楽に身悶えしながら、バンビエツタは溢れださせる母乳の量を増やしていく。

「ふひっ♡ くひいつ♡ はあ、いいいつ……イツちやうっ♡」

雌の本能を剥き出しにして快楽を貪る身体では、絶頂を堪えることが出来なくなってるようで、ブルルツと上半身を大きく震わせ、バンビエツタが軽く達してしまう。

だが、一度絶頂したくらいではバンビエツタは満足しない。

肉棒に絡みつく膣肉の圧迫は、相変わらずキツキツだ。

「ふんっ！」

リズム良く息を吐き、媚肉に求められるままに腰を律動させ奥を小突き続ける。

「はひっ!? はううっ……し、子宮が震えるう……♡ 赤ちゃん、びっくりしてる……っ♡」

亀頭に突かれる度に、胎児を保護する卵膜が震えっぱなしになる。

その刺激を快感に変え、潤んだ瞳で宙を見つめたまま、身体を硬直させるバンビエツタ。

膣穴が締まり、また達しようとしている。

「イキたいなら好きナだけイツていいですよー」

ゴツンツとまた卵膜を震わせる衝撃を与える。

「はへえええっ♡ えひっ!? おっ、おひいつ♡」

歓喜の声を上げながら、バンビエツタが軽く達した。

「あひっ、くうっ……き、気持ちいいっ♡でもお……中出しされながら、イキたいっ♡」

「いいですけど、赤ちゃんがいますよ?」

お腹が大きくなってからは、中出しは控えていた。

もちろん能力でどうにかなるが、少なからず罪悪感を覚えてしまう。

「だ、大丈夫、はあ、あんたとあたしの赤ちゃんだったらっ……うあっ、だ、大丈夫……!」

「そうですかね?」

「そうよお! それにあんたの能力もあるじゃない……だからあ!」

雌と化した顔に、一瞬だけ母性を滲ませたバンビエツタが膨らんだ自分のお腹を撫でる。

「んくっ、ああ……イクツ♡ あたひっ……またイツちやうからあ……今度はあんたもイツてっ♡ 妊娠マンコに中出ししてええっ♡」
溢れ出るヌルリとした母乳で乳房も、俺の指もヌルヌルになっている。

一緒にイクことを求め、強く膣穴を絞めつけてくるバンビエツタ。
「わかりました! このまま出します!」

中出しすることをバンビエツタに告げ、ラストスパートをかけて腰を振りまくる。

それと同時にミルクを塗りたくりながら、乳肉を撫でまわし乳首をこねる。

「ひっ!? くひいつ、はあっ、くるっ♡ くるうっ♡ イクツ♡ イグのおおっ♡」

「俺もそろそろ……!」

「一緒にイクのおっ♡ イツてえ、チンポお、ビュツて出して♡ イツてえええええええっ♡」

「射精るっ……!」

「あひやあああああああッ♡」

最深部まで肉棒をねじ込み、そこで亀頭を跳ねさせる。

大量の精液が妊婦の膣穴へと注ぎ込まれる。

「こ、これっ……最高おっ♡ ザーメン出されながら、イツでりゅうううっ♡ んおっ、おほおおっ♡」

もうすぐ母親になるというのに、獣のように喘ぐバンビエツタ。

顔がだらしなく蕩け、開きっぱなしの口から涎を垂らしながら、快楽を貪っていく。

射精音とは、また違う音が聞こえたかと思うと、母乳が勢いよく噴出している。

「ふひいつ!? んっ、ふひいいんっ♡ ミルク出てりゅう♡ 噴いぢやってりゅうううっ♡」

「母乳出しながらイクの気持ちいいんですね」

亀頭で子宮壁を突くと同時に、乳肉をぎゅむつと搾り上げる。

「いひいつ♡ ひっ、んはあっ♡ くヒインツ♡ あっ、ああっ、はふううううっ♡」

搾れば搾った分だけ、勢いよく母乳が噴き出し、バンビエツタは絶頂してしまう。

「気持ちいいっ♡ おっぱい出しながらイグのクセになっひやうううっ♡」

「エロい母親ですねバンビエツタ様は!」

「エロくてもいいっ♡ 気持ちいいの止められにやいつ♡ 母乳噴くのも止められなひいイイツ♡」

イキ続けることで、母乳は飛び出し続けるのか、乳肉を汁まみれにしながら、バンビエツタは上半身をくねらせる。

「こっちでもイキましようか」

精液の溜まりと化した膣穴の中で肉棒を振り動かす。

「はウツ!? ふっ、ひいいんっ……おっぱいと、オマンコレえっ、イグううううううっ♡」

押し寄せてきた強烈な快感にお腹を突き出しながら背を仰け反らせると、バンビエツタはそのままピクピクと痙攣したまま動かなくなってしまう。

「あ、あっ♡ あ、あっ♡ だ、ダメ……おっぱいだけじゃ、い……」

ああっ、ああああっ♡」

「どうしました?」

「い、イキすぎてえ……身体に、力……入らにやいいっ……」

イキすぎて意識朦朧となったバンビエツタが、ジヨロジヨロと水音を立てる。

「ふひいいっ……へああああっ!! 出ひやったあ♡」

下腹部を見ると、黄金水が弧を描きながら噴き出している。

「母乳噴いてオシッコ漏らすなんて、下品すぎますよ?」

「ふひっ♡ んひいいっ……ら、らっつてえ……イツぢやう、へああああっ♡ オシッコ漏らすの見られるだけで……イツぢやう♡」

イキながら失禁する恥ずかしい姿を見られる快感に、バンビエツタはイクのを止められなくなっているようだった。

そんなバンビエツタを見ていると、俺も欲情に歯止めがきかなくなる。

気づけば子宮内はいっぱいになって、大量の精液が溢れ出ていた。

「ひいっ、ひいいっ……気持ちいいっ♡ 妊娠セックスう♡ 気持ちいいイッ♡」

ちよろちよろと放尿の勢いを緩めながらも、まだ小刻みにイキ続けるバンビエツタ。

たっぷりと精液を出し終えた肉棒を、緩やかに膣肉が擦ってくる。

「もっとしてえ♡ 精液欲ひいいっ♡ あへえ、もっといかしえてえええっ♡」

媚肉をうねらせながら、交わり続けることを求めてくる。

「……わかりました!」

肉棒を勃起させたまま、バンビエツタの正面へと回り込む。

「はううっ!?! くっ、ひいん……はあ、はあ、あふううっ……」

精液と蜜汁にまみれた膣穴へと、躊躇なく男根を突き入れる。

柔らかくほぐれた媚肉を、再び荒々しく擦られていく悦びに、バンビエツタが喜悦の声を放つ。

そそり立つ乳首からたらたらと垂れ流しっぱなしになっている母乳。

吸い付いて欲しそうにプルプルと震えていた。

「喉乾いたのでいただきますね」

「んひいっ♡へあつ、はへえつ、へふウウウンツ♡」

コリコリと硬くしこった乳首を唇でついばむと、それだけで膣肉が激しくうねり、締め付けを強めてきた。

プールサイドの壁に背を預け、俺の肩に両足を乗せたまま貫かれていくバンビエツタ。

グツ、グツと腰を突き出していくと、膨らんだお腹を圧迫しそうになる。

「んちゅっ、ちゅっ……お腹気をつけないと」

「あひゅっ♡だ、大丈夫う……お腹、平気だからあつ！」

膣奥まで肉棒を突き入れてほしい。

バンビエツタが、潤んだ瞳で、そう俺に訴えかけてくる。

「チンポおつ、マンコの奥までっ♡はあつ、おおっ……突っ込んでほしいのお♡赤ちゃん、大丈夫だからあつ！あんっ、あふうんっ♡」

喜悦に顔を染めてはいるが、僅かながらも母性は垣間見える。

「ダメな時はあつ、ダメって言うからっ！だから……入れてえ♡」

「孕んだマンコに突っ込んでええええっ♡」

「それじゃ容赦しないでですよ……っ！」

喜悦を求めるバンビエツタに応えるため、隆起した乳首を唇で挟んだまま、体重を乗せていく。

「んひいイツ!?はっ、ひうっ♡くひゅウウツ♡へああつ!?あ

へえええっ♡」

肉棒が埋め込まれていくにつれ、膨らんだお腹が圧迫されへしやいでいく。

「ぐううっ……ひいっ!?きたあつ♡チンポ奥きたアツ♡おっ!?

おふウウウツ♡」

額に汗を滲ませながらも、俺と密着していく悦びに顔が蕩けていくのがわかる。

「んっ、ちゅううっ！」

乳肉に指を喰い込ませ、乳首から母乳を吸いたてながら、口内へと

ドロドロの汁を溜めていく。

「ひいあっ!?! はあ、あああ……の、飲まれてりゆうっ♡ 母乳、もつと飲んでえっ……♡」

バンビエツタに見られながら、口の中に溜まった母乳を飲み下す。

「ふうっ、ひっ、ひいんっ……気持ちいい♡ ああああ、おっぱい飲まれるの気持ちいい♡」

「ぎゅっ、んぢゅっ」

「たくさん飲んでえっ♡ いっぱい出りゆかひゃあっ♡」

もつと飲んでほしいと、バンビエツタがボリユームたっぷりの乳房を突き出してくる。

乳首にむしやぶりついたまま、もう片方の手で突起をこね回す。

「ひうっ!?! はあっ、はひいっ♡ ひあっ!?! ああ……出ひやううっ♡」

もともと感度のよかった乳首が、母乳を垂れ流してからは、さらに敏感になっているようだった。

感じまくっていることを俺に伝えるように、肉傘に絡みつ়く膣肉が、何度もビクツと痙攣している。

足の指先を丸め、軽く達しながらも、お腹の圧迫に堪えるバンビエツタ。

そのバンビエツタの興奮を煽りたてるように、乳首を吸い上げる音を激しくする。

「へうっ!?! ふっ、へああっ♡ 音もおっ……しゅいっ♡ 興奮して感じすぎひやううううっ♡」

俺と密着することが、この上無く嬉しいのか、顔を仰け反らせ白い喉を見せつけながら、嬌声を放ち続ける。

「イイイッ♡ き、気持ちイイッ♡ 母乳吸われながらっ、ふひっ、あひいっ♡ んひイインッ♡」

飲んでも飲んでも、次から次に溢れ出てくる母乳。

乳首を摘まみこね回す指は、母乳でヌルヌルだ。

「ふひいんっ♡ お、お願いっ……乳首い……一緒に吸ってえ……♡」

両乳首から、母乳を吸い出して欲しい。

切なげに眉根を寄せながら、バンビエツタが上擦った声でおねだりしてくる。

「後ですてあげますよ。まずはこっちの乳首から」

「くひゅウウウっ!? いつ、いひひひひひひひひひひひっ♡」

口に含んでいた乳首に歯を立てる。

その衝撃に、眼を見開きながら嬌声を放つバンビエツタ。

乳首を軽く噛んでいくにつれ、溢れ出る母乳の量が増えてくる。

「か、噛んじゃ……らめえ! 乳首い、壊れりゅう! ふひっ!? くひひひひひっ♡」

膣肉を擦られながら乳首を噛まれる強烈な快感に、バンビエツタは密着した肌を震わせながら絶頂してしまう。

「乳首噛まれたらくれえ……イツちやうう♡ イツちやうううううっ♡」

イクのを止められなくなった身体は、ビクビクと跳ねまくり、整った可愛らしい顔をだらしなく崩していく。

「噛んだら母乳、余計に出ひやうっ♡ おっ、おっ、おひييイツ♡」
悦楽の叫びがプールサイドに響き、その自分の声の大きさにバンビエツタが頬を赤らめる。

だが、飛び出す声を抑えることも、小さくすることも出来なくなってしまうほどのに、身体は喜悦を貪っていた。

「ずっ、ぢゅずずっ、もう何回イキました?」

乳首に吸い付いたまま視線を上げ、蕩けた顔のバンビエツタを見る。

「わかんない……♡ 何回イツひやかなんかあ……頭おかひくなつてりゅからあっ♡」

「覚えてないんですか?」

「らつてえ、母乳出まくりでえ……♡ あ、あたひよいい、あんたあ

……! まだあ……チンポおっ、イツへないいいっ!」

「そうですね。イカせてくれます?」

グツとまた膨らんだお腹に圧迫を加えながら、腰を突き出しバンビ

エツタと密着する。

「イカせ……へううううツ!? へあつ♡ おおつ♡ おおつ♡ おひいいい♡」

圧迫される苦しみと奥を貫かれる悦び。

獣のように吼え立てながら、バンビエツタがまた絶頂を迎える。

「ひいいつ、へあつ♡ おおつ……イツぢやうううつ♡」

「んちゅつ、ずつ、ずずずずつー!」

「ひぐっ!? ふえええ……ほ、欲しい♡ イツてえ♡ ザーメン、妊娠マンコに流し込んでえええ♡」

「それじゃしつかり締めてくださいよ!」

コリツと乳首を軽く抓りながら、バンビエツタに俺をイカせるように求める。

「ひいいいんっ♡ ふつ、ふひいいつ♡ んああつ、イカせりゅうっ♡

♡ チンポイカせりゅうううっ♡」

両乳首を吸ってもらうため。

新鮮な精液を貪り飲むために、バンビエツタが必死になって膣肉をうねらせていく。

その動きにあわせて腰を律動させ、バンビエツタと一緒に喜びを昂ぶらせる。

「ふひいっ、ふひいっ……ああ、チンポイキそうになってりゅう♡」

肉傘が膨らみ、肉胴に浮かぶ青筋の脈動が激しくなる。

トロトロになった媚肉で、肉棒が射精寸前であることを感じ取ると、バンビエツタが止めを刺すように膣穴を締めあげてきた。

「イツへえええっ♡ んっ、んっ——っ♡ イツへええええええっ♡」

厚みのある膣肉が、肉棒を押し潰し精液を搾り取ろうとする。

「バンビエツタ様も一緒にですよね?」

膣奥深くに肉棒を突き込んだまま、俺もバンビエツタに止めを刺すべく、乳首を噛んで母乳を吸いたてる。

「イクううっ♡ ああ、両方吸ってええ♡ 二つとも射乳するから吸い取ってええっ♡」

蕩けたバンビエッタの瞳が、指で摘ままれコネコネされているもう片方の乳首へと向けられる。

「両方とも吸う約束う♡ あひいんっ♡ 両方のミルク飲んれええええええっ♡」

「出すときに吸いますから……!」

「チンポミルク出しへええ♡ あたひも……イクッ♡ イクう♡ また母乳噴きながらイグうううう♡」

乳首を口に含んだまま、もう片方の乳房をぐつと持ち上げる。

膣肉にこねまわされ圧迫される快感に肉竿を震わせながら、射精ギリギリまで耐え続ける。

「いきゅっ♡ いきゅうう♡ イクのお……♡ ザーメン出しへええええっ♡」

「いきますよっ……!」

「んゝあゝあゝあゝあゝ——っ♡」

バンビエッタの喘ぎを聞きながら、射精に負けない勢いで、隆起した両乳首を吸い上げる。

「ズズズズッ!」

吸えば吸うほどに噴き出してくる母乳。

「乳首でもイツひゃうっ♡ 乳首チュウチュウされて……イツぢやうううっ♡」

孕んだお腹をぐつと押し付け、バンビエッタが俺と密着しようとする。

その拍子に、ズブリッとまた子宮壁を窄る肉傘。

「くはあっ!?! はひっ……いいっ♡ ふひいいっ……イツ……ぐううううううっ♡」

乳房を寄せ合わせ、二つの乳首で引つ張りあげていくと、乳房が柔らかなく形を変えていく。

欲情を煽るいやらしい乳房を見ながら、怒涛の勢いで精液を流し込む。

「乳首しゅわれでえ……精液出しやれるのも、気持ちいい……いいっ♡」

「そんなにイキまくって赤ちゃん大丈夫ですかね？」
からかうようにバンビエツタに問いかける。

「ふへええええッ♡　ら、らいじょうぶううっ♡」

「本当ですか？」

「本だからあ♡　もつと出しへえ♡　出産間近のマンコにザーメン叩き込んれええええっ♡」

肉壁をうねらせ、さらなる射精を求めるバンビエツタ。

「あんた専用の妊娠マンコにいつ、もつとザーメン飲ませへえええっ♡」

「いいですよ……っ！」

すでに孕んだバンビエツタに、さらに種付けする勢いで、膣奥でザーメンをぶっ放す。

「あひゃああああっ♡　まひゃ、ザーメンきひゃああああっ♡　んおおおおおっ♡」

意識を朦朧とさせながらも、本能のままにイキ続けるバンビエツタ。

イキ続け、意識を飛ばしそうになっても、俺に乳首を噛まれると、ビクンツと身体を跳ねさせ、また絶頂を迎えてしまう。

意識を失うことが許されない絶頂地獄がバンビエツタを襲い続けた。

「ふえええ……へあ……あへえ……♡　ひっ、ふひいつ……いひ、いひっ……♡」

だらしなく蕩けた顔と半開きの濡れた唇。

薄気味悪い笑みを浮かべ、バンビエツタは絶頂の余韻に浸っている。

「うあ……気持ちいい……もつとしゆるう……セックスう……しゆるのお……♡」

うわ言のように、まだ俺を求めてくるバンビエツタ。

「家に帰ったらしましょうね」

「うへえ……う、ん……するう……あふえ……♡」

だがバンビエツタの願いは叶わなかった。

出産間近であるバンビエッタの体力は著しく低下しており、帰宅しても熟睡したままだった。

その日の晩。俺は久しぶりに夢を見た。

俺とバンビエッタが正座させられ、黒髪の美少女に説教されている夢だ。

バンビエッタに話してみると、彼女も同じ夢を見ていた。

もしかしたらその幼女は――。

バンビちゃんはストレスが溜まっている

バンビエツタはストレスが溜まっていた。

今までに感じたことがないほどイラついている。

バンビーズの面々にからかわれたときも、狛村左陣に敗北したときも、こんなにストレスを感じることはなかった。

バンビエツタのストレスの原因。

それは――育児である。

バンビエツタは3ヶ月前に女の子を出産していた。

もともと子供好きだった彼女は、いいお母さんになろうと努めた。

夫婦そろってまだ18歳の若輩だったが、俺の収入がそれなりにあるので、自身は専業主婦として子育てに専念が出来る。

だから楽勝だと思っていた。

だが現実には甘かった。

おむつを替えても、母乳やミルクをあげても、ベビー服を着替えさせても、泣きやまない。

寝てほしいときに寝てくれないので、自分の時間がまったくない。

夜泣きが酷くて、熟睡することが出来ない。

授乳すると体力が異常に消費してしまう。

なにより俺とセックスする回数が大幅に減ってしまった。

バンビエツタの育児疲れによる性欲の低下、常に子供を気にしなければならぬ状態なので、身体を重ねる機会が減ってしまったのだ。

もともとストレスをセックスで解消していたバンビエツタ。

たまにセックスをしてストレスを解消しても、翌日にはストレス値がもとに戻ってしまう日々が続いた。

これで旦那の俺に八つ当たりすれば少しはましになると思うのだが、バンビちゃんは自分より上の存在に、強くものを言えないビビりちゃんだ。

さらに俺たちの子供も、霊力が凄まじく、霊力だけならバンビエツタを上回るほどだ。

バンビエツタはもう限界だった。

そんな可哀そうなバンビちゃんだが、俺の休みに一人で出かけるようになってからは、以前よりマシな状態になった。特に帰宅直後はすつきりとした顔になっている。理由はすぐにわかった。

とある少女がバンビエツタの、ストレスの捌け口になっているのだ。

ドMであるが、Sな部分も併せ持つバンビエツタはその少女に、非人道的な行為を行い、ストレスを解消させていた。

少女の名は——ロリ・アイヴァーン。
俺の肉便器ちゃんだ。

独占欲が強いバンビエツタは、ロリの存在が気に入らないのだ。子供が生まれる前から二人の仲は険悪だった。

ロリは学習能力がないので、勝てないとわかっているのに、バンビエツタが虚^{ウエコムンド}圏^ドに来るたびに喧嘩を売っていた。まあ、バンビエツタもロリをボコすのが目的で虚^{ウエコムンド}圏^ドに行っていたのだが……。

俺はロリが怪我をするたびに、彼女を能力で治しているのだが、最近になってロリの負傷が酷くなっている。

前までは欠損するくらいだったのに、子供が生まれてからは死んでもおかしくないほど酷い状態になっている。

今日もロリは瀕死寸前の状態だ。

「ち、ちくしょう……。絶対に殺してやるっ……」
両足を失ったロリが泣きながら恨み節を吐く。

「うぐっ……ひっぐ……うう……」
よほど自分が惨めに思えているのか、涙と鼻水が止まらないロリ。

「ロリ」

「ご、ご主人様っ……!?!」

「すぐに治してあげるからな」

俺は決して大丈夫か、などロリに言ったりはしない。欠損している時点で大丈夫なわけがないからだ。

「ご主人様あ……」

俺が来たことがよほど嬉しいのか、ロリは這いつくばり、俺のもと

に近づこうとする。

「無理しなくていいぞ。ほれ」

「あっ」

俺が手をかざすと、一瞬でロリの身体が五体満足に戻った。

潰れていた鼻も、ありえない方向に曲がっていた両腕も、切り傷だらけだったお腹も、すべて元通りだ。

「ありがとうございますご主人様」

土下座をして感謝の言葉を述べるロリ。

「顔をあげていいぞ。うちの妻が悪かったな」

「いえ。次こそは倒してみせます!」

やはりロリは学習能力がない。

むしろ原作より酷くなっているような気さえする。

「あの、すぐに部屋に行きますか……?」

「そうだな」

「かしこまりました」

俺がそう言うと、ロリは嬉しそうに鼻歌を歌いながら、建物に入っていく。

「やっぱりご主人様の力は凄いです」

「そうか」

「はい。あのクソビッチに破壊されたオマンコも元通りになっ
ます」

あそこも壊されていたのか……。バンビエッタも容赦ないな。

「だから今日も可愛がってください♡」

「もちろんだ」

☆☆☆

「あふああああ……♡ もうこんなにい……♡ れろお、ちゅぱ、ぴ
ちやつ♡」

部屋に入るなりロリが奉仕させてほしいとお願いをしてきた。

断る理由もないので、ベッドに腰を下ろすと、ロリは丁寧な俺のズボンとパンツを下ろし、期待に膨らんだ勃起した肉棒を目にするなり、うっとりとした顔つきで、片手で竿を支えて亀頭を舐め始めた。「そんなにフェラしたかったのか？」

「ふむああっ♡ はいっ、ご主人様ああ♡ はぶうっ、ペろおっ♡ ちゅぷうう♡」

ロリは久しぶりの肉棒に興奮しているようで、色っぽい吐息を漏らし、亀頭を舐め回す。

「チンポ好きな顔してるなあ」

「じゅるっ♡ はあっ、ああっ……♡ 好き♡ オチンポ好きですう♡ ちゅむっ、んむあっ♡」

ロリのフェラチオは本当に上手くなった。

愛おしいものをうっとり見つめるような、この蕩けきった表情もそそられる。

「れろっ、ちゅぱあっ♡ それでは、そろそろお……んむはああ……♡ ああああん……♡」

ロリは大きく口を開けようとする。

このまま勃起男根にむしゃぶりつくようだ。

「ロリ、待て。おしやぶりは、俺が許可するまでなし」
「そんな……そんなああ……」

見る見るうちにロリの表情が曇っていき、情けなく意気消沈した声を漏らします。

「れろおっ、ペろっ、ううう……ご主人様あ……ぴちやつ、れろおっ」
ペニスを加えたいと、潤んだ瞳で俺を見つめて慈悲を求め、もの欲しそうにちろちろと舌で亀頭を舐め続ける。

「そんな媚びた目で見てもだめだぞ」
「ううう……あんまりですう、ご主人様あ……ピチャツ、じゅるるっ、ペろおっ」

俺の命令にロリは寂しそうに唸りながらも、亀頭を啜えたい衝動を抑えて、舌で舐めるに留めている。

「ちゅろっ、れろお……オチンポお、啜えたいですう……おしやぶりさ

せてください……ペろっ、ちゅぷっ」

「ロリには我慢も覚えてもらおうと思っただけな」

ロリもバンビエツタに劣らず性欲に素直だ。

これで我慢を覚えれば、バンビエツタにやられる回数が減るかもしれない。

「んろおっ、ちゆる、ちゆるっ……オチンポお……れろっ、ペろっ……」

嘆きを漏らしながらもロリは決して奉仕の手を緩めることなく、舌で亀頭をたっぷり舐め回して快感を与えてくる。

「あのお、ご主人様あ……♡ 舌で舐めるのはいいんですよね……？」

何か妙案が浮かんだようで、ロリは表情を明るくして問うてくる。

「ああ、それならいいぞ」

「あはっ♡ それではあつ……んむあああつ♡」

ロリは大きく口を開けるとはしたなく舌を伸ばし、亀頭にべったりと密着させて舐め始めた。

広範囲にわたってんめりのある柔らかな感触が伝わり、思わむ刺激の強さに腰が跳ねそうになる。

「ふはああつ♡ これならセーフですよ？ んろおお、ペろっ♡

はむっ、じゅろろおっ♡」

「ああ、問題ないぞ」

「じゆるむうっ♡ はぶううんっ♡ それじゃ、これでオチンポを味わいます♡♡ じゅぶるるるっ、むぢゅううう♡」

自分に許された範囲を見極めて、淫らな汁音をこぼし、品性の欠片もない卑猥な奉仕を嬉々として行ってくる。

「ずいぶんとドスケベなフェラをしてくるな。そんなにチンポが味わいたかったのか？」

「むはああア♡ じゆるるっ、れろおお♡ は、はい、味わいたいです♡

♡ じゅろおっ♡」

ロリは嬉しそうに首を振って肯定し、舌を亀頭にスタンプのように押しつけると、下品極まりないフェラで肉棒へ奉仕する。

「ご主人様のオチンポを味わないと頭おかしくなっちゃうんです♡♡

じゅぶ、んろおおお♡ ふはあ、美味しいですよ♡」

柔らかい舌で亀頭を包むように撫でられると、淫らな刺激がペニスを走り、肉竿が歓喜するように震えてくる。

腰が熱く重たくなっていくような感覚が芽生え、情熱的な口淫に俺の興奮は確実に高まっていく。

「ご主人様のオチンポ大好きれすう♡ れろおおっ♡」

「そんなにか?」

「はあい、ご主人様のオチンポの匂いを嗅ぐと、身体がじわじわって熱くなってきたてえ……んりゅっ♡ すぐくエツチな気分になるんですう♡」

「ほかに?」

「舌で味わっていると頭がポーツとしてきてえ♡ はふうっ、れるるっ♡ お酒を飲んだみたいに酔ってきちやいますう♡」

ロリはうつとりと目を細めて媚び切った表情で俺を見つめ、下品な奉仕をしながら、肉棒への思いを打ち明けた。

「この汁も好きか?」

「ふあああつ、好きですう♡ ちゅろっ、ぴちやあ♡ 滲んでくるカウパーも美味しいですう♡ ああんっ、ヌルヌルしてえ、舌に絡んじやいますう♡」

鈴口から漏れ出てきた先走り汁をしっかり舐め取ると、咀嚼するように口内でくちやくちやと鳴らして味わう。

「でもお、ザーメンをお口に出していただけたらあ♡ ふひやあっ♡ もっと身体がゾクゾク震えて、とつてもいやらしい気持ちにんらえるんですう♡」

「そうなのか?」

「はあい♡ ご主人様のザーメンはとつても濃厚でえ、頭が蕩けちゃいますからあ♡」

「ザーメンも好きなんだ?」

「はいっ♡ お口でも、オマンコでも、ずっと味わいたくなりますう♡」

ロリは嬉々として亀頭にねっとり舌を押し付け、その美貌を惜しげもなく不格好にさせたまま、肉棒に心から酔いしれている様子を見

せる。

吐息はより熱くなり、表情も官能に染まりきっている。

肉棒に対する卑猥な賞賛が影響して、かなり高ぶっているようだ。

「むはあああ♡ おしやぶりしたいですうう♡ れろっ♡ オチンポ
啞えさせてくださあいっ♡ べろおおおっ、れろっ♡ ぴじゅるっ
♡」

「ははっ、そんなにしゃぶりたいか？」

腕時計を見ると、開始から10分ほど経っていた。

そろそろ許可を出してもいいだろう。

「よし、もう啞えてもいいぞ」

「ふあああむっ、はむうううんっ♡ んぶううっ♡ ちゅばああああ
♡」

「うおっ……!?!」

許しを得るや否や、ロリは食らいつくようにペニスを啞え込み、舌
で亀頭をねぶり回してきた。

途端にペニスへの刺激が強くなり、腰の中心に重たい快感の一撃を
受けた俺は、思わず声を漏らしてしまう。

「んじゅるるるう♡ やっとしやぶれたあ♡ ぢゅぶうう、じゅるる
るるっ♡ ご主人様のオチンポお♡ んじゅううううう♡」

尻尾を振って餌に飛びつく犬のように、ロリは喜びを露わにし、卑
しい音が出るのも構わずに、濃厚なフェラを繰り出してくる。

ぷるんと弾力のある唇で亀頭を挟み込んでしごいては、柔らかな舌
で裏筋をねつとりと擦ってきて、熱烈な奉仕でペニスの興奮をみるみ
るうちに高めていく。

「じゅるっ、んむううううウウ♡ はぶっ、むはあああ♡ ご主人
様あ、気持ちいいですかあ？ ぢゅぶううう♡」

「おおお、これはすごいな……!」

「ふあああ♡ カウパー、いっぱい出てきましたあ♡ これも好きで
すう♡ んちゅウウ♡ あふううんっ、じゅるるるるるっ♡」

ロリの卑猥すぎるフェラに、獣欲が荒れ狂うほど煽られ、俺はさら
なる刺激が欲しくなってしまう。

「ロリ、もっと激しくしてみろ」

「ふあああ、かしこまりましたあ……♡ んぶうっ、じゅぶう
もっごご奉仕させていただきますう♡」

「ああ」

「むじゅるるるっ♡ じゅぶるっ、ぢゅぶうウウツ♡ はむうっ♡
あふっ、んぢゅるるるッ♡ ずずずっ、じゅろおおお♡」

次の瞬間、ロリはフェラをさらに激しくさせてきた。

吸引は先走り汗をすべて吸いつくしそうな勢いで、舌は熱烈に這いまわって亀頭を隅々まで磨き上げていく。

「むはあああんッ♡ あたしも興奮しちゃいますう♡ あむううっ、
じゅぞぞぞぞッ♡ んぱあぁっ♡ オチンポしやぶってオマンコ濡
れちゃいますうう♡」

強くなる口奉仕はロリ自身の色欲も高めているようだ。

漏れる息は次第に荒さを増し、腰をくねらせる姿もいつそう淫らになっってくる。

「じゅるるウウツ♡ 凄いですう、先走り汁どんどん出てますう♡
はむっ、ちゅるうう♡ むじゅるるっ、んじゅぶウウウ♡」

予想以上に熱烈な口奉仕に、射精感が一気に高まってしまう。

「よし、それじゃイクぞ……！ たっぷり出すからこぼさずに飲むんだぞー！」

「はいっ、わかりましたあ♡ んぢゅっ、むううう♡ じゅ
むううううっ♡」

絶頂を告げると、ロリは口内射精への期待感からか、亀頭への吸引をより強めてきた。

「ぢゅぶおおおおっ♡ あむう、んずううううう♡ むじゅるッ♡
「射精すぞ……！」

「んむぶぶぶぶうううううううっ♡」

口内に勢いよく精液を放たれ、ロリは表情をますます喜悅に染めながら、身体をビクリと跳ねさせた。

「んむぐうう♡ んくっ、ごくんっ♡ むはぁっ♡ ゝぎゅっ、んんっ

♡

「まだまだ出るからな」

「んぶう♡ むはっ、んぶううう♡ あぶっ、ゴクンッ♡」

ロリは吐き出された精液を実に美味しそうに、ごくごくと喉を鳴らして飲み下していく。

「はむぢゆっ、ぢゆううっ♡ んはああんっ♡ んくっ、んぐっ♡ おげえっ♡」

「よし、これで打ち止めだ!」

「おつぶううううううううううっ♡」

残りの精液を一気に放出すると、ロリの頬が膨らんだ。

口内に収まりきらないようで、鼻の穴から黄色が混じった精液が溢れだす。

「むふう……♡ んくっ、んんっ♡ ぷふうあ……♡ んぐっ、げふっ♡ はむう♡」

「ロリ、よかったぞ」

射精を終わらせた俺は、腰に残る余韻に愉悦を覚えながら、ロリを褒めた。

ロリは大量に吐き出された精液をなんとか受け止めきり、うっとりとした表情で飲み続けている。

鼻から精液が溢れ出たことにも気づいたようで、右手で鼻の横を押し潰して、放出された精液も口に移動させた。

「うわぁ」

その底なしの淫欲に少々面喰いつつも、俺はいつそう愉快的気分になった。

「はぶうっ♡ ご主人様あ、どうですかあ?」

「なにがだ?」

「雑魚まんこなあたしですけどお♡ お口は雑魚じゃなくなりましたかあ?」

雑魚まんこを自称するロリは自分を卑しめるのが大好きだが、今回は俺に褒められたらしい。

「そうだな」

「あああ……♡ ありがとうございます♡」

「嬉しそうだな」

「はあいっ♡ 次はあたしの雑魚まんこを鍛えてくださいあい♡」
「もちろんだ」

「あ、ちよつと待つてもらえますか?」

「わかった」

ロリは何かを思い出したように、紙袋を持って、脱衣所に移動した。
「ご主人様あ、お待たせしましたあ♡」

戻ってきたロリ犬の格好をしていた。

イヌ耳のカチューシャ、首輪、尻尾のアナルパールを身に着け、文字通り雌犬になっている。

「これらはすべて俺がプレゼントしたものだ。」

「犬のコスプレ気についてるのか?」

「もちろんですよ♡ ご主人様がプレゼントしてくださいましたものですからあ♡」

「それだけか?」

「あ、あと……あたしはご主人様の雌犬でもありますからあ♡」

「肉便器じゃなかったか?」

「肉便器もですけど、雌犬でもありますう♡」

イヌ耳を触り、尻尾を振りながら、媚びた目で見つめてくるロリ。

「そっか。でも犬とはセックス出来ないなあ」

「そ、そんなあ……」

「……冗談だよ。準備が出来たらやらるぞ」

「はいっ♡」

興奮するロリを壁に追いやり、右足を上げさせる。

「はうううっ……♡ ご主人様あ♡ もうオマンコ準備できてますからあ、さっそくオチンポ入れてください♡」

「フェラしただけで、そんなにマンコ濡らしたのか?」

「はいっ♡ 雑魚まんこですからあ♡」

「よし、それじゃ挿入するぞ」

「ふああああああんっ♡」

ペニスが膣洞に進入していくと、ロリは待ちかねたかのように嬌声をあげて、歓喜に全身を震わせる。

ロリの膣内は愛液で満ちており、結合部からいやらしい音を立てながら、蜜汁が溢れてくる。

「ひゃあああんっ♡ ああ、ご主人様ああ♡ オチンポいただけ嬉しそうです♡ あひいいいっ♡ 一番奥まできたあ♡」

ロリの膣穴は男根を埋めた瞬間から締めまり始め、ピストンへの期待感を募らせているのがわかる。

「ロリ、今日はどんな風にしてもらいたい?」

「ふああああ♡ いいんですかあ? あはあ……♡ でしたらあ、うんと強くオマンコの穴をほじってくださいあい♡」

「強くほじればいいのか?」

「はい♡ オマンコの肉がめくれちゃうぐらい、乱暴に犯してほしいんです♡ あたしの雑魚まんこを虐めてくださいあい♡」

すっかり淫欲に取り込まれたロリは恥ずかしいおねだりすら平然と口にする。

「いいぞ。でも途中でギブアップするんだろ?」

「が、頑張りますからあ……♡」

「わかったよ。……ほらっ!」

「きやひいインっ♡ ふはっ、あああああ♡ オチンポ突き刺さってます♡ あひゃああああ♡」

ロリの望みに応えるべく、最初から荒々しく牝穴を蹂躪してやる。

膨張した肉棒を膣奥深くへ突き刺すと、ロリはたまらず歓喜の声を爆発させる。

「あはああっ♡ これええ♡ この強いのがいいです♡ きゃあああんっ♡ あひいいいんっ♡ 感じちやいますううっ♡」

「これでいいんだろ?」

「はひいいいっ♡ ズンズンっ、頭で響く♡ おまんこ感じてます♡ ひゃああああんっ♡」

遠慮も手加減もない抽送に喜びを表すロリの淫らさに、俺はいい気分になりながら、勢いよく腰を前後させていく。

「ひああああつ♡ きやああんつ♡ オチンポお、いっぱいオマンコ擦れてええ♡ いいれずうつ♡ あひいいいいんつ♡」

「派手により声をあげてるな」

「ふひやああ♡ さつき口に出していただいた精液の匂いと味が残っててえ、エッチな気分盛り上がってるんです♡」

「まだ残ってたのかよ」

「はひいいつ♡ 精液、オチンポお♡ 一緒に味わうと蕩けちやいます♡♡ きやあああんツ、んはああつ♡」

ロリの息がいつそう荒くなり、喘ぎ声もより品のないものになっていく。

「ロリ、もつと喜ばせてやるぞ」

俺はペニスを突き込む角度に変化をつけ、亀頭で膣壁を引つ搔くように抽送する。

「きひいいんつ♡ カリ食い込んできてますうううツ♡ ああんつ、きやふううんツ♡ オチンポ乱暴ですうつ♡ これ気持ちよすぎるうううう♡」

「マン汁がたくさん出てくるな」

「ひいいん♡ ああつ、グジュグジュいつでりゆうつ♡ きやはああ♡ もつとしてください♡ もつとオチンポお♡」

責めれば責めるほどロリの反応は淫らになり、艶めかしい声をあげ続け、身体をくねらせる媚態に、誘われるように俺の情欲も強くなつていく。

媚肉は刺激に合わせてリズムよく収縮し、ペニスの先端から根元まで締め付け、竿に快感を味わせてくる。

「きやあんツ♡ あひいいんつ♡ 突いてええ♡ オチンポ突いてく
ださいあいつ♡ きやひいいんツ♡」

「はあうんつ♡ きやあんつ♡ セックス気持ちいいれずう、ご主人様あ♡ あんつ、きやああんつ♡」

ロリの喘ぎに、犬の鳴き声みたいなものが混じっている。

犬のコスプレをしているからか、やけに奇妙な喘ぎが似合っている

ように見える。

「ロリ、その犬みたいなのがり声はわざとかか？」

「わ、わざとじゃないれずう♡ あんっ、きゃひいんっ♡ あたしは雌犬ですからあ♡」

「そうか。ならもつと鳴かせてやる！」

「あんっ、はあうんっ♡ きゃんっ♡ もつと雌犬まんこ気持ちよくしてくだひやいっ♡ ひやううんっ♡」

子宮を容赦なく突くと、ロリは犬の鳴き声に似た喘ぎを、はしたなく放つ。

どんどん乱れていやらしい様子をさらしていくロリの姿に、俺は愉悅を覚えて淫欲が強く沸いてくる。

「キャヒイイいん♡ きやう♡ あんっ、掻き回されてますうう♡ わふうっ♡ きやふふううんっ♡」

荒々しいピストンで膣穴を思いつき掻き回されると、ロリはよけいに雌犬じみた喘ぎ声を跳ね上げて、淫らにより狂う。

「これはリードもプレゼントしたほうがよかつたかもな」

「あんっ、きゃあんっ♡ キャヒイインッ♡ あふううううっ♡」

乱暴に責めれば責めるほど、ロリの痴態からはどんどん品も知性も感じられなくなり、獣と見紛うほどのはしたなさを見せてくる。

俺は興奮に任せ、ピストンを緩めることなく、快楽を貪るように膣穴を責め続ける。

「あひいっ♡ 雌犬セックス気持ちいいれじゅうう♡ おひっ、んひやひいっ♡」

だんだんと呼吸のペースを乱れだし、腰の辺りをブルブルと震えさせ始めた。

「どうやら絶頂が近いようだ。」

「イカせてやるからな」

「嬉しいっ♡ 嬉しいですっ、ご主人様あつ♡ オマンコアクメツ、したいですっ♡ オチンポでイカせてくださあいつ♡」

「ああ、思いつきりイけ！」

俺はロリをアクメに突き抜けさせるべく、激しく肉棒を抽送させ

「あはああああつ♡ イッてるのにつ、もつとイッひやうう♡ はひイインツ♡」

さらなる絶頂が近づき、ロリの腰が小刻みに痙攣し、肉襞のうねりが騒がしくなってきた。

「やあああああん♡ もうイクうツ♡ きやいいん♡ イクつ、イクイクイク♡」

「そらイツちまえー！」

「ひきやああああああああん♡」

アクメの最中、さらに一段階上の激裂な絶頂に達し、口のは身体は大きく震え、凄まじい放尿音を立てて小便をまき散らす。

「きひいいいん♡ オシッコ出ちやいましたああ♡ 恥ずかしいのを感じちやうう♡ たまらないでしゆう♡ ひいいいイイン♡」

大量の尿を嘔き散らし、大きく尻をよじらせて快感に浸るロリ。

「小便まで漏らして本当に雌犬だなー！」

「そうなんれずう♡ あたしは嬉しくてオシッコしちやう雌犬なんでしゆう♡ おひいいい♡」

白目を剥き始め、隠語を連発するロリ。

「むひやああ♡ きやひいい♡ イクうう♡ オチンポで飛んじやいまひゆう♡ イクうう♡ きやん♡ あふうう♡」

「くつ、俺もそろそろ限界だ」

とうとう俺も射精感が限界に達し始めた。

「あひやん♡ ああつ、中に♡ 種付けしてもらえる♡ きやひイイン♡ 雑魚まんこにザーメン来ひやう♡」

牝穴に精液が流れ込む快樂を思い出し、ロリはいっそう激しく身悶えて狂乱する。

「よしっ、射精すぞー！」

「んひやああああアアアアアアツ♡」

勢いよく吐き出された精液が豪快に子宮を叩き、膣穴は瞬く間に白濁液だらけになる。

ロリは獣のようなよがり声を室内に轟かせた。

「ひゃひひひひひひッ♡ 出てりゆうううッ♡ あつついザーメンッ♡ ふあああッ♡ 子宮にいっぱい入ってくりゆうううッ♡」「たつくさん出すから、全部受け入れろよ……!」
「ひゃひひひッ♡ ありがとうございませうッ♡ きゃひひひひッ♡」

ロリは再び絶頂したようで、身体の痙攣と下品な失禁は一向に止まる気配を見せない。

尿道口から恥水をびちゃびちゃと漏れ出させながら、華奢な背筋をわななかせて、快楽に染まった悲鳴をあげ続ける。

「はっひゃアアアアアッ♡ オシッコいっぱいッ♡ ザーメンと一緒にっ、いっぱい飛んじやってまひゆううッ♡ いひひひんっ♡ 気持ちいいイッ♡」

受精と放尿を同時に行い、絶頂し続ける。

「きゃひひひん♡ ご主人様♡ ザーメンもっど注いでくださいいい♡ 精液欲しいのおお♡」

「ああ、もっど注いでやる!」

無様なロリのアへ顔で興奮を覚えながら、俺はペニスを脈打たせて精液を吐き続ける。

「あひひひッ♡ お漏らし雑魚まんこイキっぱなしですうッ♡ 子宮もたぷたぷになってますうッ♡ あはあああッ♡」

「これが最後の一発だ……!」

俺は亀頭を子宮口に密着させ、ひと際大きくペニスを震わせ、残りの精液をまとめてぶちまけた。

「あひゃあああああッ♡」

直後に、あまりの絶頂に興奮したロリは後頭部を壁にぶつけてしまう。

だが快感に支配されたからか、ロリは痛みを感じていないようで、下品な喘ぎを放ち続ける。

「むひひひ……♡ ひふッ♡ あはああ……♡ んああ……んふう……♡」

長かった射精が終わると、ロリも絶頂から解放されたようで、蕩けた表情で快樂の余韻に浸っていた。

「あひいいい……♡ 今日のセックスもお、よかったです……♡」

「そうか、そいつは何よりだ」

「はあいつ♡ もつと虐めてくださいねえ……♡」

「もちろんだ」

「そういえば何か忘れているような気がする。

「あ、思い出した」

「はひい……？」

「これ抜くぞ」

「ふえ……んほおおおおおおおおおつ!!」

俺は一気に尻尾のアナルパールを引き抜いた。

刹那。不意打ちの衝撃にロリが獣のような悲鳴をあげる。

「お、おひりい……♡ いきなりは、卑怯れしゅう……♡ んおお……♡」

ロリはそう言うと、再び尿を漏らし始めた。

「どうやらアナルを刺激されて絶頂したようだ。」

「ロリ、おしっこ漏らしすぎだぞ」

「す、すみませえん……♡ 尿道も、オマンコと一緒に雑魚なんで

ひゅう……♡」

「ならこれで尿道も鍛えてみるか？」

アナルパールを見せつけ、尿道口に宛がう。

「あ、ああつ……だめですっ！ そんなの入りませんっ！」

先ほどまで蕩けた表情を一変させ、必死にアナルパールを拒むロリ。

「おいおい、ご主人様の命令に逆らうのか？」

もちろん尿道口に異物を入れるつもりはないが、ロリをいじめたくなったので、演技を続けることにした。

「い、いえっ……あたし、そんなつもりは……」

ロリは俺の肉便器であり、雌犬だ。

主の俺に逆らうのはご法度だと、ロリが一番理解している。

「ご主人様、お願いします……。尿道口だけは勘弁してください……。とうとう号泣して懇願し始めてしまった。

よほど尿道口にトラウマがあるのだろうか。

「……わかったよ。勘弁してやる」

「あつ……。ありがとうございますっ！ ありがとうございますっ！

ご主人様あつ！」

帰宅後。ロリがあれだけ尿道口責めを拒否した理由がわかった。

バンビエツタが剣でぶっ刺したらしい。

ロリが自身のマンコが俺専用だと言い放ったことに、怒りの沸点が限界突破したバンビエツタが、剣でまんこと尿道をぐちゃぐちゃにしたとのことだった。

やはり女の争いは怖い。